

平安京右京三条三坊五町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一七―一五

平安京右京三条三坊五町跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条三坊五町跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1区全景（東から）



93



92



91



85



86



87

墨書土器

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物建設工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

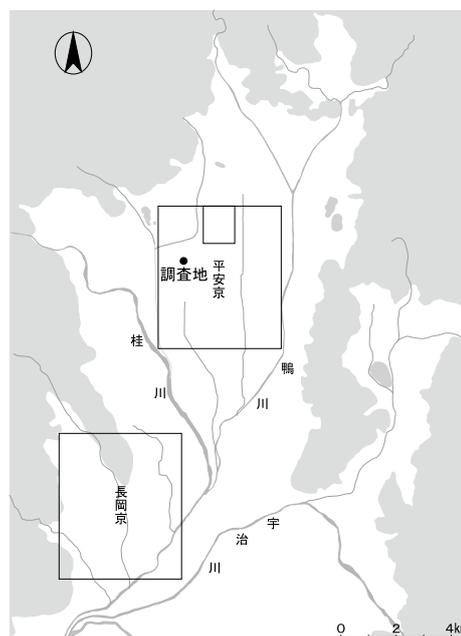
平成30年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（京都市番号 16H029）
- 2 調査所在地 京都市右京区西ノ京桑原町1番地
- 3 委 託 者 太平工業株式会社 代表取締役社長 加藤照男
- 4 調査期間 2017年5月1日～2017年12月14日
- 5 調査面積 約4,580㎡
- 6 調査担当者 山本雅和・三宮昌弘・合田幸美・末次由紀恵
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」・「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。また、細分が必要な場合は英文字（A・B…）で枝番を付した。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 山本雅和・末次由紀恵
- 14 執筆分担 山本雅和：1・2、付章3
山本雅和・末次由紀恵：3～5
付章1：パリノ・サーヴェイ株式会社
付章2：吉野秋二
- 15 分 析 種子分析・花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 16 備 考 上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 17 協 力 者 調査・整理にあたっては下記の方々からご教示をいただいた。
記して感謝を申し上げます。
國下多美樹、鈴木久男、西山良平、橋本義則、平尾政幸、保立道久（敬称略 50音順）

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	8
(1) 層序と遺構の概要	8
(2) 鎌倉時代以降の遺構	11
(3) 平安時代の遺構	13
(4) 平安京造営前の遺構	26
4. 遺 物	29
(1) 遺物の概要	29
(2) 土器・陶磁器	29
(3) 瓦	40
(4) 木製品	45
(5) その他の出土遺物	47
5. まとめ	48
付章1 自然科学分析	55
付章2 墨書土器と文献史料	78
付章3 島津製作所5次・6次調査の成果	81

図 版 目 次

巻頭図版1 遺構 1区全景（東から）
巻頭図版2 遺物 墨書土器
図版1 遺構 遺構平面図割付図（1：500）
図版2 遺構 遺構平面図1（1：150）
図版3 遺構 遺構平面図2（1：150）
図版4 遺構 遺構平面図3（1：150）
図版5 遺構 遺構平面図4（1：150）

- 図版 6 遺構 遺構平面図 5 (1 : 150)
- 図版 7 遺構 遺構平面図 6 (1 : 150)
- 図版 8 遺構 遺構平面図 7 (1 : 150)
- 図版 9 遺構 遺構平面図 8 (1 : 150)
- 図版 10 遺構 建物 1 新平面図 (1 : 100)
- 図版 11 遺構 建物 1 新柱穴断面図 (1 : 100)
- 図版 12 遺構 建物 1 古平面図 (1 : 100)
- 図版 13 遺構 建物 1 古柱穴断面図 (1 : 100)
- 図版 14 遺構 建物 4 平面図 (1 : 100)
- 図版 15 遺構 建物 4 柱穴断面図 (1 : 100)
- 図版 16 遺構 建物 5 新平面図 (1 : 100)
- 図版 17 遺構 建物 5 新柱穴断面図 (1 : 100)
- 図版 18 遺構 建物 5 古平面図 (1 : 100)
- 図版 19 遺構 建物 5 古柱穴断面図 (1 : 100)
- 図版 20 遺構 2区全景 (東から)
- 図版 21 遺構 1 南壁断面 (北から)
2 西壁断面 (北東から)
- 図版 22 遺構 1 建物 1・建物 4 (北西から)
2 建物 1・建物 4 完掘状況 (東から)
- 図版 23 遺構 1 建物 1 新柱穴 692 検出状況 (南から)
2 建物 1 新柱穴 705 検出状況 (南から)
3 建物 1 新柱穴 717 遺物出土状況 (南東から)
4 建物 1 新柱穴 727 A 遺物出土状況 (北東から)
5 建物 1 新柱穴 703 A 半裁断面 (東から)
6 建物 1 古柱穴 732 半裁断面 (東から)
7 建物 1 新柱穴 725 A・建物 1 古柱穴 725 B 半裁断面 (北東から)
8 建物 1 新柱穴 694 礎板出土状況 (北東から)
- 図版 24 遺構 1 建物 5・建物 6 (東から)
2 建物 5・建物 6 完掘状況 (東から)
- 図版 25 遺構 1 建物 5 新柱穴 938 A・建物 5 古柱穴 938 B 遺物出土状況 (東から)
2 建物 5 新柱穴 924 遺物出土状況 (北東から)
3 建物 5 新柱穴 991 A・建物 5 古柱穴 991 B 半裁断面 (東から)
4 建物 5 新柱穴 996 柱根固め状況 (東から)
5 建物 5 新柱穴 962 A 柱根出土状況 (南東から)
6 建物 5 古柱穴 903 礎板出土状況 (東から)

- 7 建物5古柱穴874礎板出土状況（東から）
- 図版26 遺構 1 建物2（西から）
 2 建物2柱穴792柱根出土状況（南から）
 3 建物2柱穴793柱根出土状況（南から）
 4 建物2柱穴103半裁断面（東から）
 5 建物2柱穴104半裁断面（東から）
- 図版27 遺構 1 建物3（北から）
 2 建物3南端柱穴列検出状況（北西から）
 3 建物3柱穴660半裁断面（東から）
 4 建物3柱穴150半裁断面（東から）
- 図版28 遺構 1 溝80A土器群1遺物出土状況（南西から）
 2 溝80A土器群3遺物出土状況（北西から）
 3 溝153遺物出土状況（南から）
 4 溝80B断面（南から）
 5 土坑766（北から）
- 図版29 遺構 姉小路全景（東から）
- 図版30 遺構 1 姉小路（南東から）
 2 路面800断面（東から）
 3 溝（水路）801断面（東から）
 4 溝（水路）807・盛土809断面（東から）
 5 溝831断面（東から）
- 図版31 遺構 1 1区流路630完掘状況（東から）
 2 2区流路630完掘状況（東北東から）
- 図版32 遺物 土器1（柱穴857・柱穴717・溝80B・溝810・溝832・流路630・溝831・溝799
 ・溝（水路）801・溝（水路）807出土）
- 図版33 遺物 土器2（溝80A出土）
- 図版34 遺物 1 転用硯（94）
 2 漆が付着した土器（95）
- 図版35 遺物 瓦
- 図版36 遺物 木製品1（柱根）
- 図版37 遺物 木製品2（礎板）

挿 図 目 次

図1	調査前全景（南東から）	2
図2	機械掘削作業（北東から）	2
図3	遺構検出作業（北東から）	2
図4	遺構掘削作業（南東から）	2
図5	トータルステーションによる測量（南東から）	2
図6	壁面実測作業（南から）	2
図7	社内説明会（南西から）	2
図8	発掘成果報告会	2
図9	周辺調査位置図（1：5,000）	5
図10	調査区配置図（1：1,000）	6
図11	南壁断面図（1：100）	9
図12	西壁断面図（1：100）	10
図13	遺構平面図1（鎌倉時代以降 1：400）	12
図14	遺構平面図2（平安時代 1：400）	14
図15	建物6平面図・柱穴断面図（1：100）	16
図16	建物2平面図・柱穴断面図（1：100）	17
図17	建物3平面図・柱穴断面図（1：100）	18
図18	溝80B断面図（1：40）	19
図19	流路630・溝810・溝832断面図（1：60）	19
図20	溝90断面図（1：40）	19
図21	溝80A土器群1遺物出土状況実測図（1：20）	20
図22	溝80A土器群2遺物出土状況実測図（1：20）	21
図23	溝80A土器群3遺物出土状況実測図（1：20）	21
図24	溝153遺物出土状況実測図（1：20）	22
図25	土坑766実測図（1：20）	23
図26	姉小路関連遺構断面図（1：80）	24
図27	遺構平面図3（平安京造営前 1：400）	27
図28	流路630断面図（1：40）	28
図29	土器実測図1（1：4）	30
図30	土器実測図2（1：4）	32
図31	土器実測図3（1：4）	34
図32	土器実測図4（1：4）	36

図33	土器実測図5 (1 : 4)	37
図34	墨書土器画像・実測図 (1 : 4)、釈文	39
図35	瓦拓影・実測図1 (1 : 4)	41
図36	瓦拓影・実測図2 (1 : 4)	42
図37	瓦拓影・実測図3 (1 : 4)	43
図38	瓦拓影・実測図4 (1 : 4)	44
図39	檜皮 (木12)	46
図40	木製塔婆画像・実測図 (1 : 4)	46
図41	土製品実測図 (1 : 4)	47
図42	右京三条三坊五町遺構概要図 (1 : 1,000)	51
図43	溝 (水路) 801 東側セクション検出状況 (南東から)	56
図44	溝 (水路) 801 東壁断面 (東から)	56
図45	溝 (水路) 801 東壁断面 (北東から)	56
図46	溝 (水路) 801 東壁断面 (北東から)	56
図47	溝 (水路) 801 東壁試料採取地点断面 (東から)	56
図48	溝 (水路) 801 東壁断面南肩部 (東から)	56
図49	溝 (水路) 801 東壁試料採取地点南肩部付近 (東から)	56
図50	溝 (水路) 801 東壁試料採取地点堆積状況 (東から)	56
図51	溝799 検出状況 (西から)	57
図52	溝799 西壁断面 (西から)	57
図53	溝80B 検出状況 (北から)	57
図54	溝80B 北壁断面 (北から)	57
図55	溝80B 北壁試料採取地点断面 (北から)	57
図56	溝80B 北壁断面南肩部 (北から)	57
図57	流路630 検出状況 (南西から)	57
図58	流路630 西壁試料採取地点堆積状況 (西から)	57
図59	流路630 試料採取層準肩部付近 (西から)	58
図60	流路630 北肩部付近 (西から)	58
図61	溝810 検出状況 (北西から)	58
図62	溝810 西壁試料採取地点断面 (西から)	58
図63	溝810 西壁断面 (西から)	58
図64	溝810 西壁試料採取地の北肩部付近 (西から)	58
図65	溝810 西壁断面北半部 (西から)	58
図66	溝810 西壁断面北肩部付近 (西から)	58
図67	花粉化石群集	65

図68	種実遺体群集	68
図69	花粉化石	75
図70	種実遺体1	76
図71	種実遺体2	77
図72	5次調査遺構実測図(1:300)	82
図73	5次調査西壁・南壁断面図(1:100)	83
図74	5次調査S B 20平面図・柱穴断面図(1:100)	84
図75	5次調査S E 26実測図(1:20)	85
図76	6次調査遺構実測図(1:300)	88
図77	6次調査北壁・西壁断面図(1:100)	89
図78	6次調査S B 55平面図(1:100)	90
図79	6次調査S B 55柱穴断面図(1:100)	91
図80	6次調査S B 56平面図(1:100)	92
図81	6次調査S B 56柱穴断面図(1:100)	93

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	8
表3	遺物概要表	29
表4	溝80 A出土土器破片計数表	35
表5	花粉分析結果	64
表6	種実分析結果	66

平安京右京三条三坊五町跡

1. 調査経過

今回の調査は、島津製作所ヘルスケアR&Dセンター（W10号館）建設工事に伴う発掘調査である。調査地は平安京跡にあたっており、周辺の調査でも多数の遺構が見つかることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課）が試掘調査を実施したところ、平安時代の遺構面が良好な状態で残されていることが確認された。また、下層の西ノ京遺跡に関連する弥生時代から古墳時代の遺構の検出も十分に期待された。これを受けて文化財保護課は島津製作所に対して埋蔵文化財発掘調査の指導を行い、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を担当することとなった。

島津製作所敷地内では、これまでもたびたび遺跡調査が行われており、今回の発掘調査は当研究所が実施する13次調査となる（図9）。

今回の調査地は、右京三条三坊五町北西部の約4分の1町の範囲となる。調査区は文化財保護課の指導に基づき、東西長約81m・南北長約61mで、既存建物による攪乱を除外して西辺の一部が凹む形に設定した（図10）。最終的な調査面積は約4,580㎡である。なお、調査範囲が広いいため南半部を1区、北半部を2区として、1区、2区の順に反転して調査を進めた。

調査は2017年5月1日より開始した。1区・2区とも最初に工場建設に伴う盛土、鎌倉時代以降の耕作土を約2.0～2.3mの深さまで機械掘削したのち、1面の遺構検出面で、平安時代以降及び平安京造営前の2時期に分けて遺構検出、遺構登録、遺構の掘り下げを行い、遺跡の状況が明らかになった段階で写真撮影、遺構実測などの記録作業を実施した。遺構実測図の作成にはオルソ測量・トータルステーションによる測量を併用している。機械掘削土、調査に伴う人力掘削土は基本的に調査地内に積み上げて処理したが、掘削土の一部については原因者側による搬出が行われた。調査中は、適宜、文化財保護課による臨検を受け、2017年12月14日にすべての調査・現地作業を終了した（図1～6）。

なお、調査期間中の2017年7月31日に島津製作所社員を対象とした社内説明会（図7）、また、8月3日に報道機関への広報発表を行ったのち8月5日に現地説明会を開催し、それぞれ約500名、約750名の参加を得た。また、調査終了後の2018年3月19日には、島津製作所社員を対象とした発掘成果報告会を開催し、約170名の参加を得た（図8）。



図1 調査前全景（南東から）



図2 機械掘削作業（北東から）



図3 遺構検出作業（北東から）



図4 遺構掘削作業（南東から）



図5 トータルステーションによる測量（南東から）



図6 壁面実測作業（南から）



図7 社内説明会（南西から）



図8 発掘成果報告会

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は京都盆地北西部に位置し、地勢的には紙屋川（天神川）の扇状地に立地している。紙屋川は鷹峯を源流とし、京都盆地西部をほぼ南流して吉祥院で桂川に合流する。現在の河道は20世紀前葉に付け替えられたもので、それ以前は農業用水として利用される一方、たびたび洪水を引き起こして流路の位置を変えたようである。調査地北側には旧河道の痕跡が北北東から南南西に向く道路や地割として残っており、また、調査地の現地形はわずかに西から東に向けて傾斜しているが、これは調査地西側を流れていた紙屋川が氾濫したときに土砂が堆積したことによるものと考えられる（図9）。

調査地周辺の歴史的状況は次のように概観することができる¹⁾。調査地は『京都市遺跡地図』では平安京右京三条三坊五町及び西ノ京遺跡として周知されている²⁾。

西ノ京遺跡は京都盆地北西部に位置し、おおよそ北は丸太町通、東は西大路通東側、南は六角通、西は西小路通に囲まれた南北約1.2km・東西約0.8kmの範囲に広がる遺跡である。弥生時代から古墳時代の遺物が出土しており、西大路御池交差点南東側の西ノ京南原町の調査では古墳時代の溝・土坑などを確認している。また、平安京右京三条三坊五町については居住者などの記録は残っていないが、『拾芥抄』によると平安時代後期には棲霞寺の所領があったことが記載されている。棲霞寺の所領は調査地西側の十一町・十二町にも広がっており、また、調査地東側の三条三坊四町は大江匡房の所領であったことから、平安時代後期には調査地周辺は耕作地として利用されていたことが推測できる。

(2) 周辺の調査

調査地周辺ではこれまでに多数の調査を実施している。主要な調査については図9・表1にまとめたとめた。見つかった遺構・遺物の時期は西ノ京遺跡に関わる弥生時代から古墳時代、平安時代前期から中期、平安時代後期以降に大きく分けることができる。

西ノ京遺跡については、調査地北側の西ノ京徳大寺町の調査（図9-24）では、古墳時代中期の竪穴建物1棟のほか土坑を検出しており、土師器・須恵器が出土した。また、この南側の調査（図9-25）でも、古墳時代中期の溝から土師器・須恵器が出土している。調査地北東側から東側にかけての調査（図9-16・18・20）では、北東から南西方向や北から南方向に流れる溝を検出している。出土遺物には微量の弥生土器を含むが、大部分は古墳時代初頭から古墳時代中期の土師器・須恵器である。断片的な痕跡ではあるが、竪穴建物が溝群よりも比高約2mの微高地に立地していることから、溝群は耕作地の導排水の機能を担っていた可能性が推測されている³⁰⁾。

なお、遺構には伴わないが、調査地北東側の調査（図9-16）で尖頭器・石鏃が出土しており、縄文時代にさかのぼる遺構が近隣に所在している可能性も考えられる。

表1 周辺調査一覧表

番号	調査概要	文献	備考
1	10世紀後半の西堀川小路路面・西側溝・西堀川など。	註3	
2	9世紀の建物、10世紀中頃の整地層・溝など。	註4	西大路御池駅駐輪場の調査
3	詳細不明。		他団体の調査、未報告
4	9世紀前半の井戸、9世紀から10世紀の建物・十二町中央を流れる南北水路など。	註5	
5	鎌倉時代から室町時代の土取跡・柱穴。	註6	
6	10世紀中頃の野寺小路西側溝・井戸・柱穴、10・11世紀の野寺小路川、鎌倉時代の野寺小路側・堰など。	註7	
7	平安時代中期の三条坊門小路南側溝・野寺小路東西側溝・柵、平安時代後期から鎌倉時代の野寺小路川など。	註8	島津製作所8次調査
8	9世紀後半二面庇建物を含む建物3棟など。	註9	他団体の調査
9	9世紀中頃から10世紀前半の3時期の建物群・三条坊門小路南側溝・井戸・道祖大路川など。絵馬が出土。	註10	島津製作所9次調査
10	9世紀前半の土坑、9世紀中頃の三条坊門小路北築地内溝・室町時代の溝など。	註11	西大路御池駅の調査
11	10世紀前半の建物・土坑、12世紀の柵・野寺小路川など。	註12	西大路御池駅昇降口の調査
12	9世紀後半から10世紀前半の三条坊門小路南側溝・道祖大路西側溝・道祖大路川など。	註13	西大路御池駅昇降口の調査
13	9世紀末から10世紀前半の建物・溝、平安時代後期の溝、室町時代の井戸など。	註14	西京高校校内の調査
14	平安時代中期の建物・井戸、平安時代後期の押小路南北側溝・野寺小路川など。	註15	西京高校校内の調査
15	9世紀後半から10世紀前半の建物群・庭園・井戸・道路など。「齊宮」などと記した多数の墨書土器が出土。	註16	西京高校校内の調査 「齊宮」の1町規模の邸宅
16	古墳時代前期の溝、9世紀後半の建物・柵・井戸・溝・落込みなど。	註17	島津製作所2次調査
17	9世紀後半から10世紀前半の建物、10世紀前半の井戸、10世紀の道祖大路東側溝。	註18	島津製作所12次調査
18	古墳時代初頭と中期の溝、9世紀中頃の井戸・溝・小径・土坑など。	註19	島津製作所10次調査
19	9世紀前半から中頃の道祖大路西築地内溝と橋・建物・土坑など。	註20	島津製作所3次調査 1町規模の邸宅
20	古墳時代中期の溝、9世紀前半の大型建物・宇多小路東築地と内溝、姉小路南築地内溝など。	註21	島津製作所11次調査 1町規模の邸宅
21	9世紀前半の建物・柵・井戸・姉小路南築地内溝など。	註22	島津製作所5次調査 1町規模の邸宅
22	9世紀前半の大型建物2棟・柵・溝など。	註23	島津製作所6次調査 1町規模の邸宅
23	遺構未検出。	註24	他団体の調査
24	古墳時代中期の堅穴住居・土坑・河川、9世紀中頃から後半の四面庇建物2棟・井戸・溝・土坑など。	註25	他団体の調査
25	古墳時代中期までの流路、古墳時代中期の溝、9世紀中頃から後半の建物・柵・溝・土坑、10世紀の木棺墓など。化粧道具が出土。	註26	島津製作所1次調査
26	平安時代の整地層。	註27	島津製作所7次調査
27	古墳時代以降の湿地状の堆積。	註28	島津製作所4次調査
28	9世紀後半と12世紀の建物、9世紀後半の井戸、10～12世紀の道祖大路川。	註29	

右京三条三坊周辺では平安時代前期から中期の遺構が良好な状態で残っており、これまでの調査で建物・柵・井戸・溝・土坑・柱穴などを多数検出している。以下では主要な成果を紹介する。

三条二坊十四町の調査(図9-9)では、道祖大路東側沿いで小規模な掘立柱建物・井戸を検出した。4分の1あるいは8分の1町規模の宅地で隣地とは塀で区画される。また、建物群は平安時代前期から中期前半にかけて3時期の変遷があったことが明らかとなった。

三条二坊十六町の調査(図9-15)では、平安時代中期の1町規模の邸宅の全容がほぼ明らかとなった。敷地中央北部に泉や洲浜を備えた庭園があり、周囲には5棟以上の掘立柱建物や柵・井戸などの施設が設けられる。「齋宮」「齋雑所」などの文字を墨書した土器が出土したことから、伊勢神宮に奉仕する「齋宮」の邸宅であることが判明した。

三条三坊三町の調査(図9-16~18)では、1町の範囲を分割して宅地として利用している状況が明らかとなった。北西部には平安時代前期の複数の掘立柱建物と井戸・塀を備えた4分の1町規模の邸宅、また、東部には平安時代前期後半から中期にかけての2分の1町規模の邸宅があっ

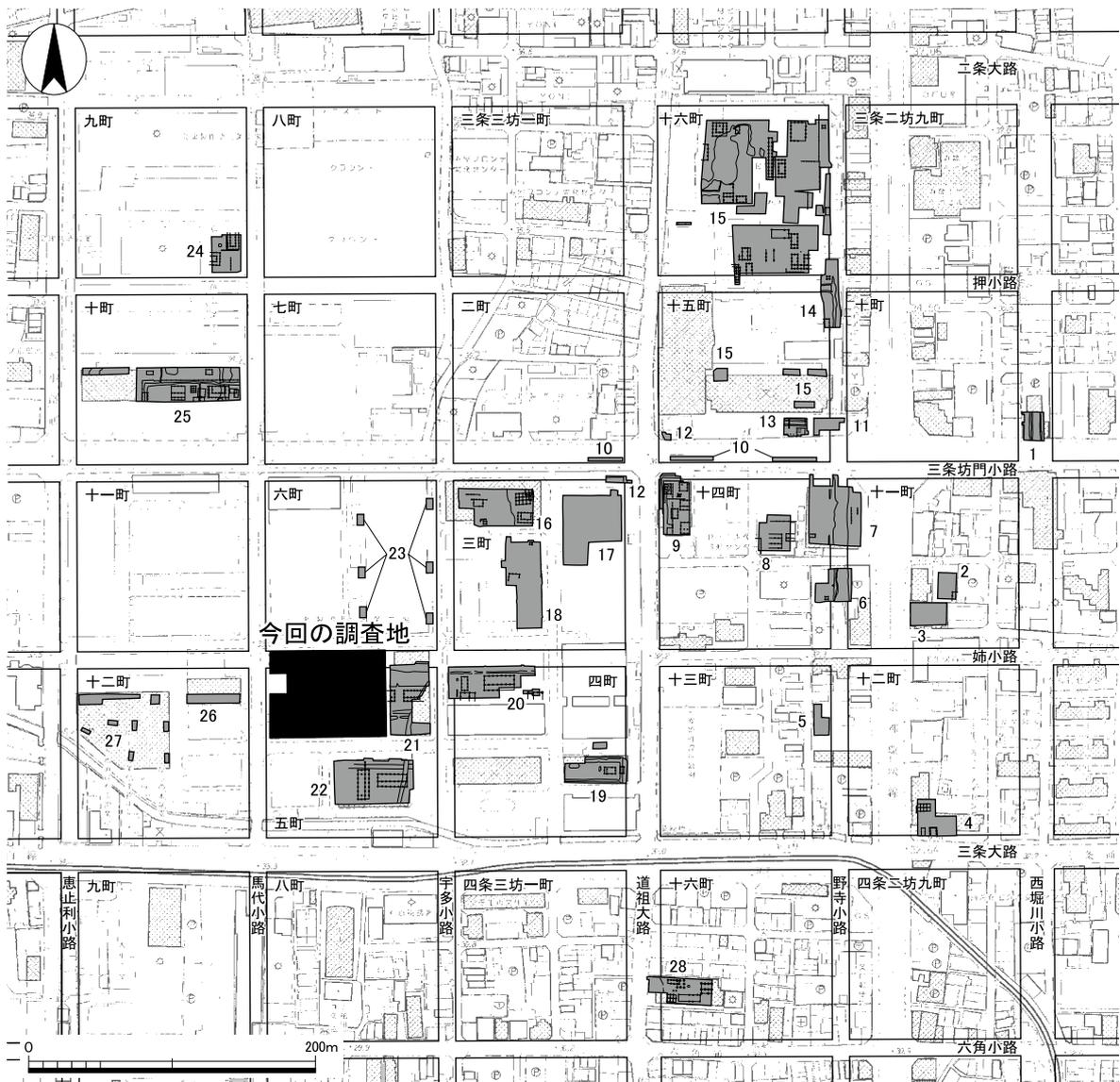


図9 周辺調査位置図(1:5,000)

たと推定できる。

三条三坊四町の調査(図9-19・20)では、平安時代前期前半の1町規模の邸宅を検出した。北西部に3棟の大型建物をコ字形に配置しており、中心建物は東西約21m、南北約10mの東西棟で、桁行7間×梁行2間の身舎の南面に庇が付く。平安京域で見つかった最大規模の建物である。また、東側の道祖大路から出入りした橋・通路が見つかったことから、宅地の門が道祖大路に面して開いていたことが判明した。

三条三坊九町の調査(図9-24)では、平安時代前期のL字形に配置された2棟の四面庇建物・井戸・土坑などを検出した。また、平安京域の調査では類例がない獅子をかたどった唐三彩の枕の破片が出土した。

三条三坊十町の調査(図9-25)では、邸宅の一画で平安時代中期の木棺墓を検出した。棺内には銅鏡のほか毛抜き・墨・玉・漆器皿・須恵器壺などを収めた化粧道具箱が副葬されていた。

一方、三条三坊十二町の調査(図9-27)では、ほぼ全域に湿地が広がっており、居住の痕跡を認めることはできなかった。

今回の調査地がある平安京右京三条三坊五町では、これまでに2回の調査を実施している。調査地東側の調査(図9-21)では、平安時代前期の2棟の建物・柵・井戸・姉小路南築地内溝などを検出した。また、姉小路南築地内溝からは灰釉陶器・緑釉陶器を含む土器・陶磁器がまとめて出土した。調査地南側の調査(図9-22)では、平安時代前期の2棟の大型建物・溝などを検出し

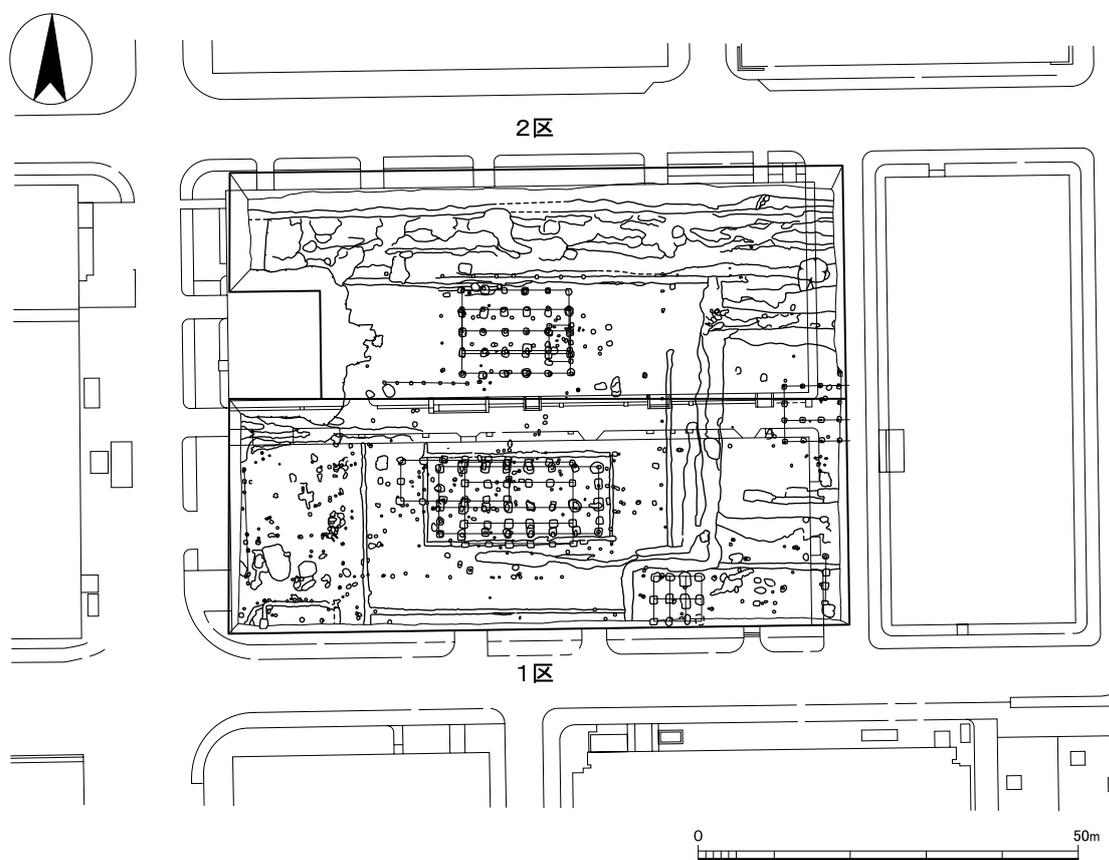


図10 調査区配置図(1:1,000)

た。ともに平安京城で見つかった最大級の建物であることから、五町には1町規模の邸宅があったと推定された。これらの調査成果については、今回の調査を含めた右京三条三坊五町の宅地利用の評価に関わることから、付章3にて詳細を報告する。

平安京の街路では、西堀川小路・西堀川(図9-1)、野寺小路(図9-6・7・11・14)、道祖大路(図9-9・12・28)、宇多小路(図9-20)、押小路(図9-14)、三条坊門小路(図9-7・10・12)、姉小路(図9-20・21)に関わる遺構を検出している。

調査地周辺では、西堀川が平安時代中期に埋没して機能を停止したのち、隣接する野寺小路や道祖大路の路面を掘削して、新たに大規模な溝(水路)を開削した状況が明らかとなったことが特筆できる。洪水対策や周辺地域の水はけを良くすることを目的とした平安京の都市整備事業の一つとして評価³¹⁾されている。

平安時代後期以降、特に室町時代になると、調査地周辺でのほとんどの調査で広い範囲にわたって耕作土と耕作溝を検出している。平安時代中期には宅地としての利用が終焉し、調査地周辺のほぼ全域が耕作地に変容したことを示しており、この状況は文献の記載を裏付けている。その後、耕作地としての利用は近代の開発が及ぶまで継続した。

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要

層位（図版21、図11・12） 調査区全体には約0.8～1.1mの厚さで既存の工場建設に伴う盛土が行われており、部分的には基礎による攪乱が地表下2.5m以上の深さにまで及んでいる。

盛土の下層には、約0.4～0.7mの厚さで江戸時代の耕作土である灰色粘土質シルト（南壁10層）・暗黄灰色シルト（南壁36層）や黄褐色細砂質シルト（西壁15層）などが堆積する。耕作土に伴う畦（南壁11層・14層）や溝（南壁13層）も確認している。江戸時代の堆積層には、ラミナを観察できる褐灰色粘土質シルト（南壁18層）などがあり、耕作土中にも砂粒や小礫が含まれることから、しばしば洪水の被害を受けたことがわかる。また、この下層には直径約5cm以上の礫を含む大規模な洪水に伴う砂礫層（南壁38層）がある。この層は調査区東部では厚さ約0.3mあるが、西へ向けて徐々に厚さを減じてY=-24,850付近ではなくなることから、かつて調査地東側を流れていた紙屋川の氾濫によるものであろう。西壁で断続的に観察できたオリーブ色細砂（西壁23層）はこれに対応する可能性がある。遺物を確認できなかったため年代の確定は難しいが、上下の耕作土の時期から室町時代から江戸時代前期頃に属するものと考えられる。

この砂礫層及び江戸時代の耕作土層の下層には、約0.2～0.4mの厚さで鎌倉時代から室町時代の耕作土である黄灰色シルト質細砂（南壁46層）・黄灰色シルト（西壁30層）や灰色シルト（南壁48層）・黄灰色シルト質細砂（西壁32層）などが堆積する。検出した鎌倉時代以降の耕作溝の埋土と共通することから、これらの耕作土が耕作溝と対応することがわかる。わずかではあるが粗砂や小礫を含むことから、これらの耕作土も洪水に伴う堆積層を母材としていることが推測できる。

鎌倉時代から室町時代の耕作土の下面は地山となるが、南東部や北西部では平安時代前期の整地層である黒褐色粘土質シルト（南壁61層）が0.05mの厚さで堆積する。地山は固く締まった明黄褐色粘土などである。

遺構の概要（巻頭図版1、図版20） 調査では平安時代前期の遺物包含層である黒褐色粘土質シルト及び地山上面で遺構検出を行い、平安時代以降及び平安京造営前の2時期に分けて実施した。

平安時代以降の遺構には、畦・耕作溝、建物・柱穴列・柱穴・溝・土坑及び姉小路路面・側溝・

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安京造営前	土坑811、流路630、落込み978	
平安時代	建物1～6、柱穴列1～4、柱穴50・72・778、路面800、築地804、土坑484・766・857、溝46・80A・80B・90・153・184・202・210・294・547・549・631・799・810・831・832、溝(水路)801・807、盛土809	
鎌倉時代以降	畦806、土坑985、耕作溝群	

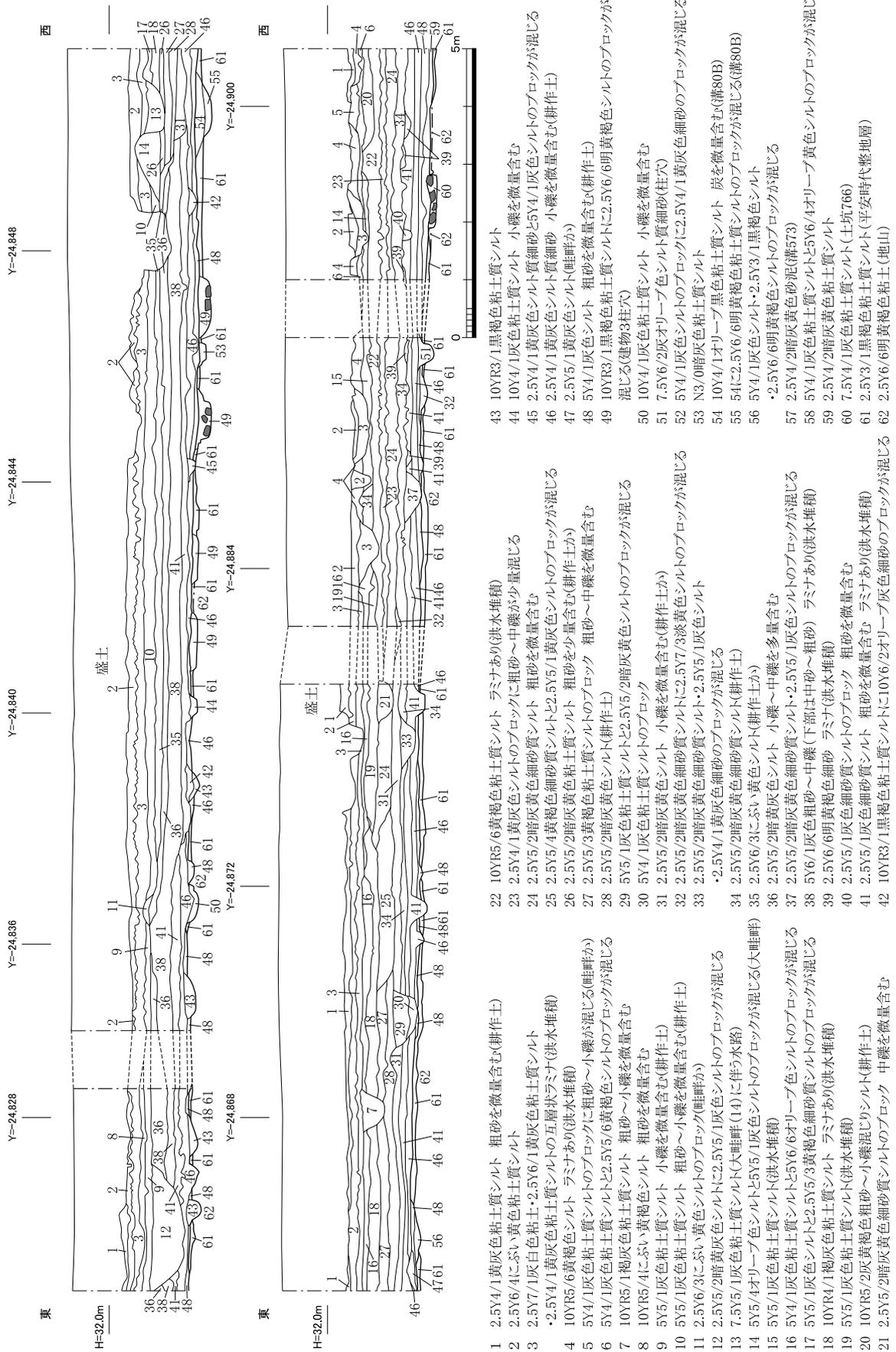
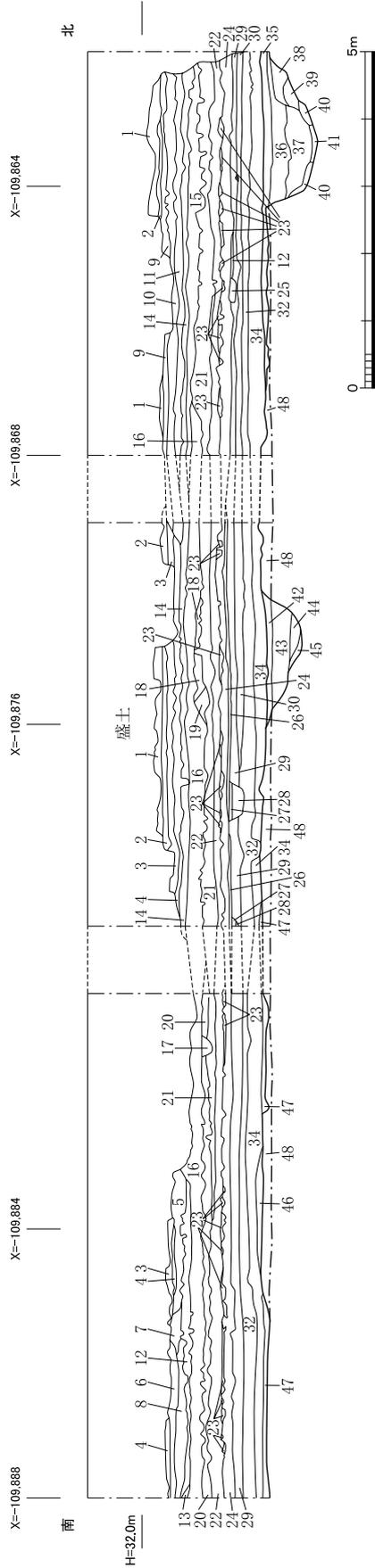


図111 地層断面図 (1:100)



- 1 7.5Y4/1 灰色粘土質シルト 炭を微量含む(耕作土か)
- 2 5Y4/1 灰色粘土質シルト(耕作土か)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂質シルト(止水堆積か)
- 4 2.5Y4/1 黄褐色シルト(止水堆積か)
- 5 5Y5/1 灰色細砂質シルト ラミナあり(洪水堆積)
- 6 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト 小礫・プロット土を少量含む(耕作土)
- 7 10YR5/6 黄褐色細砂質シルト 粗砂を微量含む(耕作土)
- 8 10YR5/4 黄褐色シルト 粗砂を微量含む ラミナあり(洪水堆積)
- 9 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 粗砂を微量含む(耕作土)
- 10 2.5Y5/4 黄褐色細砂質シルト 粗砂を微量含む(耕作土)
- 11 2.5Y4/1 黄灰色シルトに5Y4/1 灰色シルトのプロットが混じる(耕作土)
- 12 5Y4/1 灰色粘土質シルトと2.5Y5/6 黄褐色細砂質シルトのプロットが混じる粗砂を少量含む
- 13 10YR5/2 灰黄褐色粗砂シルト(耕作土)
- 14 2.5Y5/3 黄褐色細砂質シルト 粗砂を少量含む
- 15 2.5Y5/4 黄褐色細砂質シルト 小礫を微量含む(耕作土)
- 16 10YR5/2 灰黄褐色シルト(耕作土)
- 17 2.5Y4/1 黄灰色シルトのプロットに粗砂が少量混じる
- 18 2.5Y5/4 黄褐色シルト
- 19 10YR5/2 灰黄褐色シルト プロットが多い
- 20 2.5Y4/1 黄灰色シルトのプロットに粗砂が少量混じる
- 21 2.5Y5/1 黄灰色シルト 粗砂を微量含む
- 22 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質シルト 粗砂を微量含む
- 23 5Y6/6 オリーブ色細砂 ラミナあり(洪水堆積)
- 24 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質シルト(耕作土)
- 25 2.5Y5/3 黄褐色細砂質シルト
- 26 5Y6/6 オリーブ色細砂と2.5Y5/2 暗灰黄色シルトの互層状ラミナあり(洪水堆積)
- 27 2.5Y5/1 灰色細砂質シルト 粗砂を少量含む
- 28 7.5Y6/3 オリーブ黄色細砂シルト 粗砂を微量含む(耕作土)
- 29 2.5Y4/1 黄灰色シルト 粗砂を微量含む(耕作土)
- 30 2.5Y4/1 黄灰色シルトとシルト質細砂のプロットが混じる
- 31 2.5Y4/1 黄灰色シルトとシルト質細砂のプロットが混じる
- 32 2.5Y4/1 黄灰色シルト質細砂 小礫を微量含む(耕作土)
- 33 5Y4/1 灰色シルトと2.5Y6/6 明黄褐色粘土質シルトのプロットが混じる
- 34 5Y4/1 灰色シルト 粗砂を微量含む(耕作土)
- 35 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト 粗砂を少量含む(溝631 第1層)
- 36 10Y3/1 オリーブ黒色細砂質シルト(溝631 第1層)
- 37 N3/0 暗灰色粘土質シルト(溝631 第1層)
- 38 5Y3/1 オリーブ黒色シルトに2.5Y6/6 明黄褐色シルトのプロットが混じる(溝631 第2層)
- 39 10Y4/1 灰色シルト質細砂(溝631 第2層)
- 40 10Y4/1 灰色シルトと10Y5/1 灰色 細砂を少量含む(溝631 第3層)
- 41 N5/0 灰色粗砂シルト 小礫(溝631 第3層)
- 42 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粗砂を少量含む(流路630 第1層)
- 43 5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト内に2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂～中砂のラミナあり(流路630 第2層)
- 44 5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルトと2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂～中砂の互層状ラミナあり(流路630 第2層)
- 45 5Y5/1 灰色中砂～小礫(流路630 第2層)
- 46 5Y4/1 灰色粘土質シルト
- 47 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
- 48 2.5Y6/6 明黄褐色粘土(地山)

図 12 西壁断面図 (1 : 100)

築地・水路などがある。検出した遺構のほとんどを占め、中でも鎌倉時代以降の耕作溝が多くを占める。同一面で検出した平安時代の溝とは、出土遺物、遺構の形状・まとまりや埋土から区別、判断した。建物の柱穴は同じ位置に重複して造り替えられているものが多く、出土遺物にも時期差がないことから、平面・断面での検出状況及び建物としての柱穴列のまとまりから前後関係を判断して、新しいものから英文字（A・B・C）の順で枝番を付した。溝・流路については平面での検出状況で埋土が区別できない場合に英文字で枝番を付した。また、溝・土坑・柱穴の中には出土遺物から時期を判断できない遺構があるが、これらについては遺構の形状・まとまりや埋土から帰属時期を推定した。

平安京造営前の遺構には、流路・土坑がある。遺構数は少ない。他に地山面には不整形な土坑状のものがあるが、これについては樹木の根株跡と判断した。

検出した遺構総数は1,054基である。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構を中心に時代順に鎌倉時代以降、平安時代、平安京造営前に分けて報告し、調査地の歴史的な変遷についてはまとめて総括する。なお、検出遺構及び出土遺物の時期の判定は、平安京・京都Ⅰ期～ⅩⅣ期の編年案に準拠する³²⁾。

（2）鎌倉時代以降の遺構（巻頭図版1、図版20、図13）

鎌倉時代以降の遺構には、畦・耕作溝・土坑などがある。

畦806（図26） 北部で検出した東西方向の大規模な畦である。機械掘削時に大部分を削り取ったが、東側は調査区外に延び、西側は攪乱のため調査区内で不明瞭となる。検出長45m以上、基底部の幅約1.8m、高さ0.5m以上である。姉小路路面に掘削された溝（水路）801・溝（水路）807の上面に位置しており、溝埋土と共通するシルト・粗砂～中礫を母材として断面半円形に積み上げる。基底部の南北両側には径約5cmの杭を並べて打ち込んでおり、土留めで補強されていたことがわかる。また、南側に平行する溝808は畦806に伴う可能性が高い。耕作地を区画する大畦畔と考えられる。京都Ⅶ～Ⅷ期の遺物が出土した。また、畦806を掘り込んだ土坑底部から、木製塔婆（木13）が出土した。他の遺物は出土していないが、この土坑が墓墳であった可能性がある。

土坑985 北東部で検出した。築地804・築地内溝831を掘りくぼめている。平面形は南北約3.2m、東西約3.8mの不整形な方形で、深さは約1.0mである。底部付近から湧水があったことから、井戸の可能性を考えて精査したが、井戸枠などの痕跡は確認できなかった。埋土は暗褐色泥砂などで、京都Ⅶ期からⅧ期の遺物が出土した。

耕作溝群 溝は畦806南側の調査区ほぼ全域で検出した。複数の溝が平行・重複しており、全体としては南北方向が優位である。幅約0.2～0.7m、深さ約0.1～0.2mのものが大部分を占める。埋土は南壁46層（西壁30層）及び南壁48層（西壁32層）と共通しており、前者の方が新しい。出土遺物は京都Ⅶ期～Ⅷ期の遺物が大部分を占める。

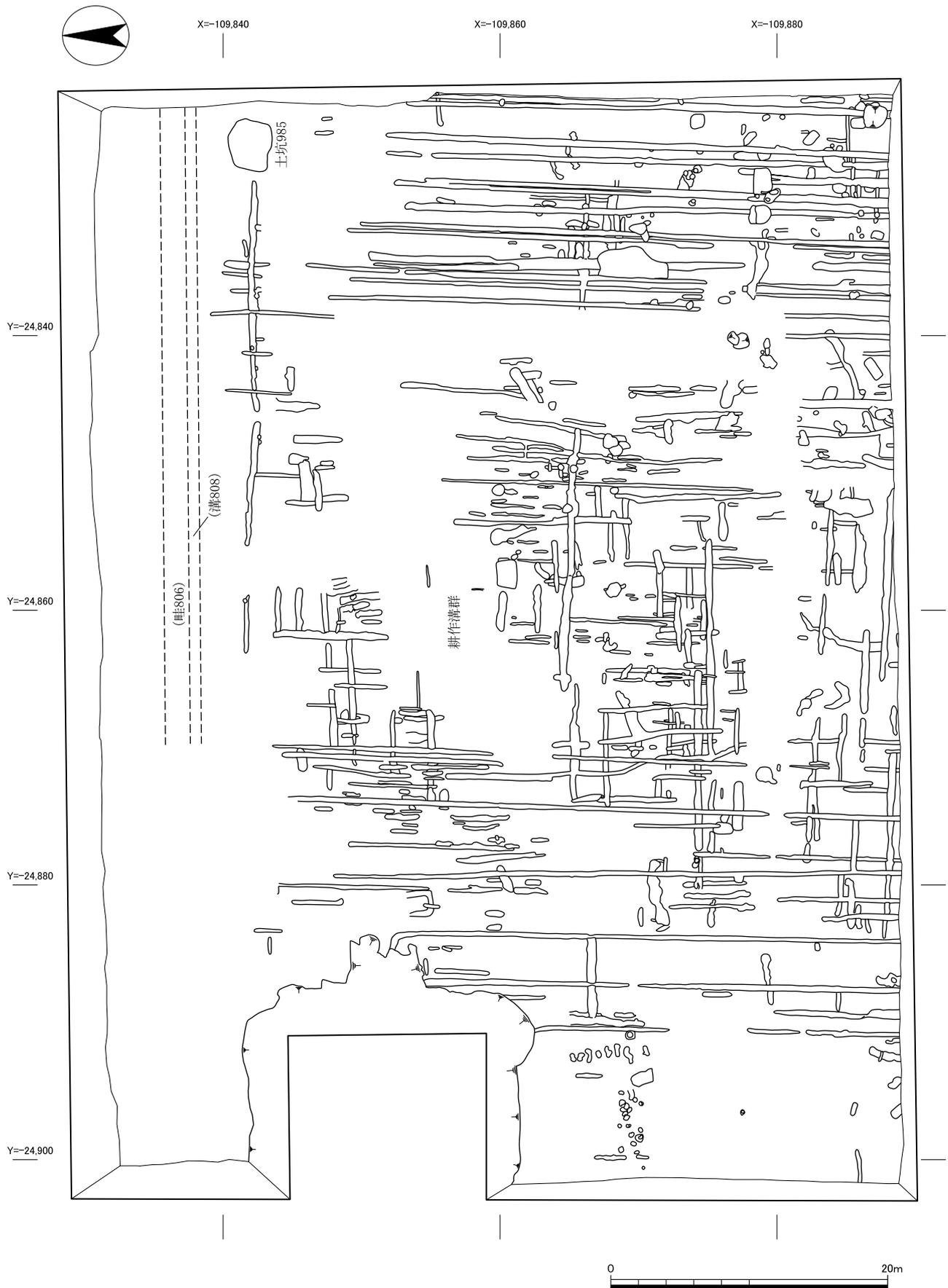


図13 遺構平面図1 (鎌倉時代以降 1 : 400)

(3) 平安時代の遺構（巻頭図版1、図版10～20・22～30、図14～26）

平安時代の遺構には、建物・柱穴列・柱穴・溝・土坑及び姉小路路面・築地・側溝・溝（水路）・盛土などがある。以下、本文の1尺は0.3mとする。

建物1新（図版10・11・22・23） 建物1は中央部南寄りで検出した。同じ位置に重複して大型建物が建て替えられており、柱穴の重複関係から判断して、新しい方を建物1新、古い方を建物1古とする。

建物1新は東西棟の掘立柱建物である。桁行7間×梁行2間の身舎の南面に庇が付く。規模は柱穴の芯々間で東西約21m、南北約9mで、身舎の柱間は桁行10尺・梁行9尺、庇の出は12尺である。東端・西端の柱筋には、身舎と庇の柱の中間に別の柱穴がある。柱穴の平面形は、抜き取り穴により攪乱されている部分があるが、ほぼ方形あるいは長方形で、規模は一辺0.9～1.8m、深さ0.5～0.6mである。庇の柱穴は身舎の柱穴よりもやや浅い。柱はすべて抜き取られており、柱穴692・柱穴694には礎板が残されていた。埋土は抜き取り穴が地山の黄褐色粘土ブロックが混じる黒褐色・暗褐色粘質土など、掘形は暗灰黄色粘土や黄褐色粘土などの細かいブロック土である。抜き取り穴の上面に大きさ10～20cmの河原石を意図的に置いた柱穴がある。南庇中央の柱穴717からは完形の土師器小型甕が出土した。祭祀に関わる遺物と考えられる。出土遺物は少ないが、平安時代前期の瓦などが出土した。

建物1新の周囲には、北側に溝267、東側に溝232、南側に溝245、西側に402が方形にめぐる。断面形は浅いU字形で、幅0.3～0.9m、深さ約0.1mである。溝それぞれの芯々距離は南北約11.8m、東西約24.5mである。埋土は暗灰黄色砂泥などで、京都I期新段階からII期の遺物が出土した。雨落溝を兼ねた排水溝と考えられる。

建物1古（図版12・13・22・23） 建物1古は東西棟の掘立柱建物である。桁行5間×梁行2間の身舎の南北両面に庇が付く。規模は柱穴の芯々間で東西約15m、南北約10.8mで、身舎の柱間は桁行10尺・梁行9尺、庇の出は南北とも9尺である。柱穴の平面形は、建物1新の柱穴により攪乱されている部分があるが、ほぼ方形で、規模は一辺0.8～1.2m、深さ0.4～0.6mである。庇の柱穴は身舎の柱穴よりもやや浅い。柱はすべて残されておらず、また、礎板もない。埋土は黒褐色粘質土・暗褐色粘質土・黄褐色粘土などの細かいブロック土で、柱あたりや抜き取り穴の痕跡を認めることができない。出土遺物は少ないが、平安時代前期の瓦などが出土した。

建物4（図版14・15・22） 建物1新・建物1古の北西側に重複する位置で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴の重複関係から建物1古に先行する。桁行5間×梁行2間で庇はない。規模は柱穴の芯々間で東西約14.3m、南北約5.4mで、柱間は桁行9.5尺・梁行9尺である。柱穴の平面形は、建物1新・建物1古の柱穴により攪乱されている部分があるが、ほぼ方形で、規模は一辺0.7～1.0m、深さ0.3～0.5mである。柱はすべて抜き取られており、礎板も残されていない。柱穴756には瓦を根固めに入れている。埋土は抜き取り穴が地山の黄褐色粘土ブロックが混じる黒褐色粘質土など、掘形は暗褐色粘土や黄褐色粘土などの細かいブロック土である。平安時代前期の瓦など

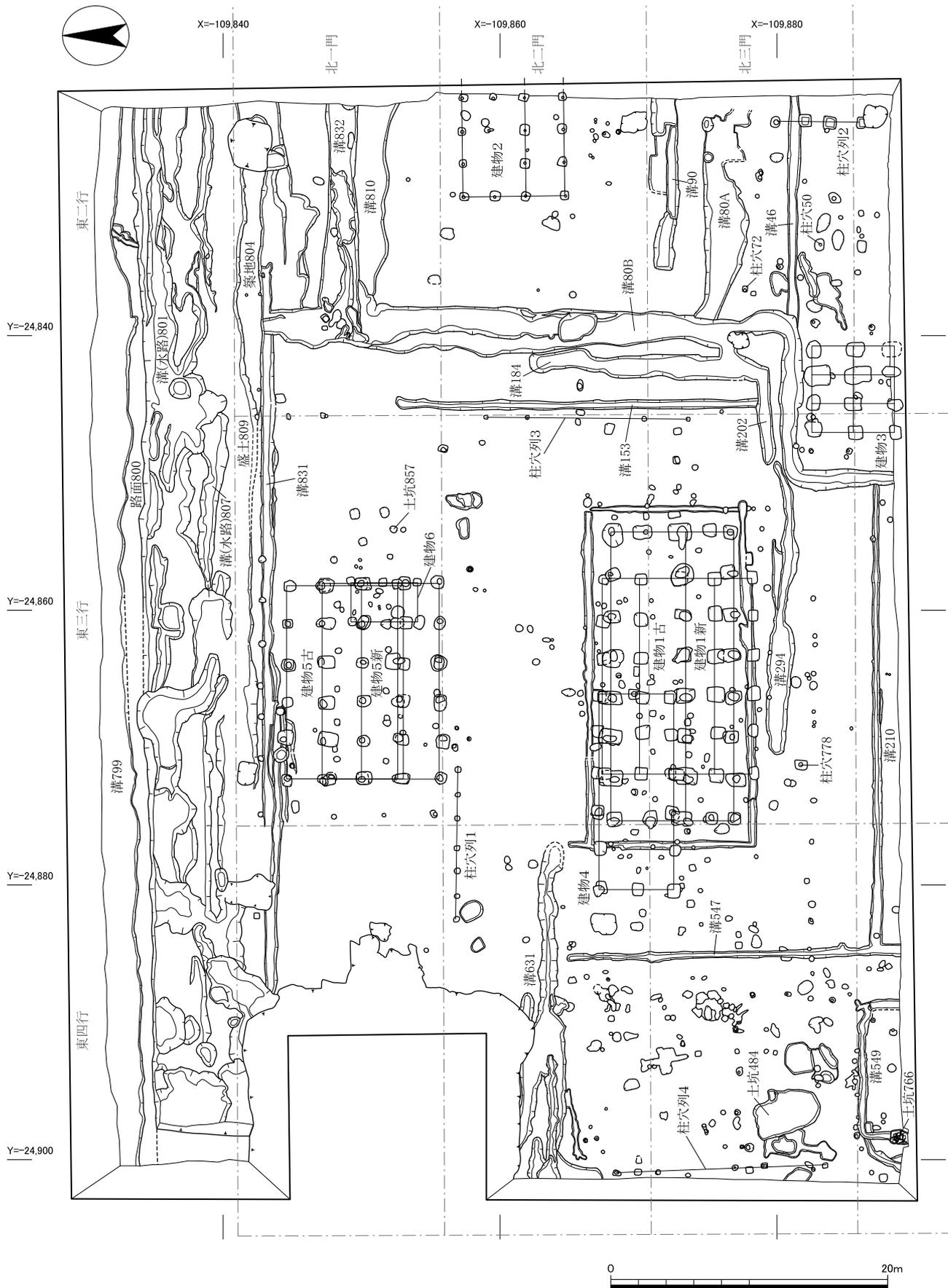


图14 遺構平面図2 (平安時代 1 : 400)

が出土した。

建物5新（図版16・17・24・25） 建物5は中央部北寄り、建物1の北側に中軸をそろえる位置で検出した。同じ位置に重複して大型建物が建て替えられており、柱穴の切り合い関係から判断して、新しい方を建物5新、古い方を建物5古とする。

建物5新は東西棟の掘立柱建物である。桁行5間×梁行2間の身舎の南面に庇が付く。規模は柱穴の芯々間で東西約14.3m、南北約8.4mで、身舎の柱間は桁行9.5尺・梁行9尺、庇の出は10尺である。柱穴の平面形は、抜き取り穴により攪乱されている部分があるが、ほぼ方形あるいは楕円形で、規模は一辺0.8～1.1m、深さ0.4～0.6mである。柱の多くは抜き取られていたが、柱穴913・柱穴916A・柱穴962Aには柱根、柱穴900A・柱穴907・柱穴991A・柱穴1002には礎板が残されていた。埋土は抜き取り穴が黒褐色粘質土など、掘形は暗灰黄色粘土や黄褐色粘土などの細かいブロック土である。抜き取り穴の上面に大きさ10～20cmの河原石を意図的に置いた柱穴がある。出土遺物は少ないが、平安時代前期の瓦などが出土した。

建物5古（図版18・19・24・25） 建物5古は東西棟の掘立柱建物である。桁行5間×梁行2間の身舎の南面に庇が付く。規模は建物5新と同一で、柱間1間分（9.5尺）北側に位置する。柱穴の平面形は、柱穴が重複するため建物5新の柱穴により攪乱されている部分が多いが、ほぼ方形で、規模は一辺0.7～1.1m、深さ0.3～0.6mである。柱はすべて抜き取られているが、柱穴874・柱穴880・柱穴903・柱穴991B・柱穴995B・柱穴1000には礎板が残されていた。埋土は地山の黄褐色粘土ブロックが混じる黒褐色粘質土など、掘形はにぶい黄褐色粘質土や黄褐色粘土などの細かいブロック土である。出土遺物は少ないが、平安時代前期の瓦などが出土した。

建物5古の周囲には、南北方向に7列、東西方向に3列の柱穴列がある。柱筋は直線ではない。平面形は直径0.2～0.5mの円形で、深さ約0.2～0.3mである。埋土は灰褐色砂泥・オリーブ褐色砂泥などで、遺物は出土していない。建物5古を建設する際の足場穴の可能性はある。

建物6（図版24、図15） 建物5新の南東部に重複する位置で検出した南北棟の掘立柱建物である。建物5新・建物5古に先行すると考える。桁行2間×梁行1間で庇はない。規模は柱穴の芯々間で南北約4.8m、東西約2.8mで、柱間は桁行8尺・梁行9.5尺である。柱穴の平面形は、ほぼ方形で、規模は一辺0.5～0.6m、深さ0.4～0.5mである。柱はすべて抜き取られており、礎板も残されていない。埋土は柱穴1025の抜き取り穴が黄褐色粘質土で、掘形は黄褐色粘土などの細かいブロック土である。遺物は出土していない。

柱穴列1 中央部、建物5南西側で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は7基で、検出長は約11.0mである。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、隅丸形状のものもある。深さは約0.2mである。柱あたりの痕跡はない。柱穴の間隔は1.4～2.1mである。埋土はオリーブ褐色砂泥などである。遺物は出土していないが、検出位置や方位から建物5に付属する遺構と考えた。

土坑857 中央部東寄り、建物5東側で検出した。建物5東端柱列から約3.8mの位置にあたる。平面形は直径0.5mのほぼ円形で、深さは約0.2mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、京都I期新段階に属する完形の土師器椀が出土した。祭祀に関わる遺構であった可能性がある。

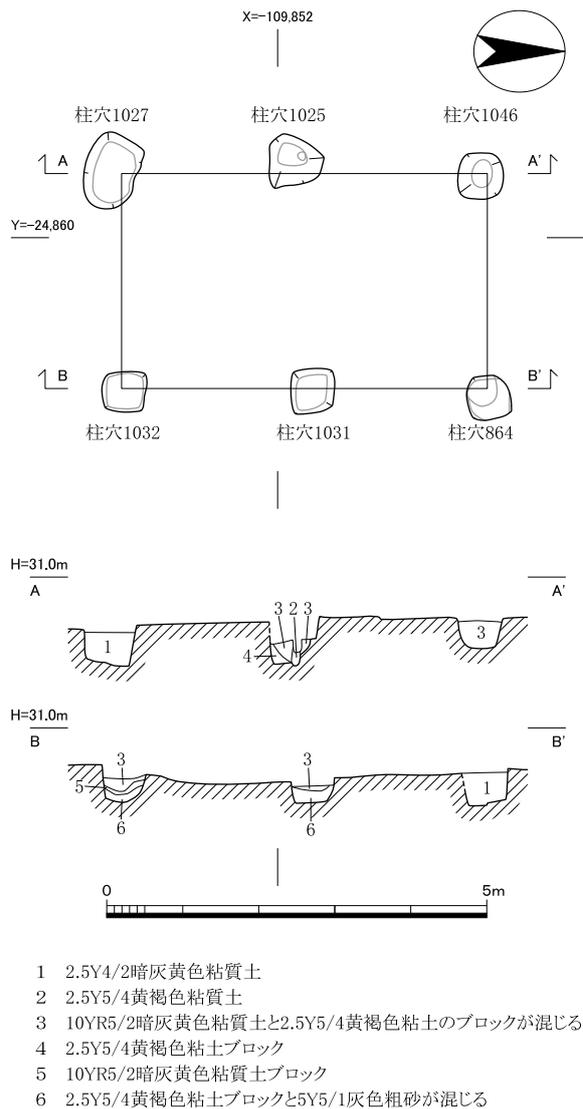


図15 建物6平面図・柱穴断面図（1：100）

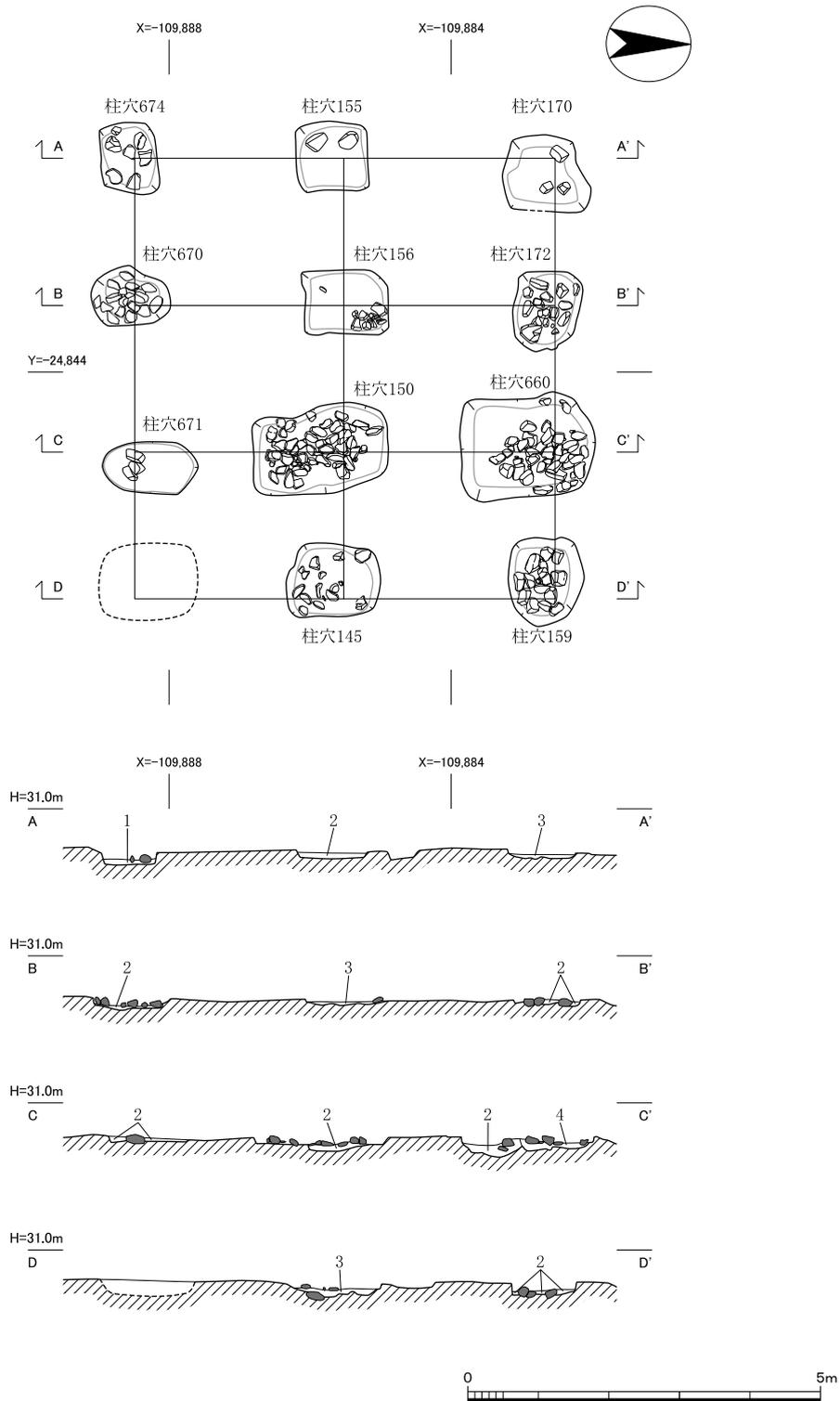
は一辺0.5～0.7m、深さ0.2～0.4mである。すべて柱穴の中央には直径約15cmの柱あたりの痕跡があり、柱穴103・柱穴104・柱穴105・柱穴789・柱穴790・柱穴792・柱穴793には柱根が残されていた。礎板は使用していない。埋土は柱あたりは灰色粘土、掘形は地山の黄褐色粘土ブロックが混じる黒褐色粘質土である。京都Ⅰ期新段階からⅡ期の遺物が少量出土した。

建物3（図版27、図17） 南東部壁際で検出した東西棟の総柱建物である。南壁部を拡張して南端の柱列を確認しており、桁行3間×梁行2間であると推定している。なお、南東隅の柱穴は確認できていない。規模は柱穴の芯々間で東西約6.3m、南北約6.0mで、柱間は桁行7尺・梁行10尺である。柱穴の平面形は、ほぼ方形あるいは楕円形で、規模は一辺0.8～1.8mと大きく、深さは非常に浅く約0.1mである。柱穴150・柱穴660は2つの柱穴が重複している可能性がある。柱穴には大きき10～30cmの河原石を詰めており、底面にめり込んでいる石が多い。柱や礎板の痕跡は認めていない。埋土は黒褐色粘質土である。京都Ⅰ期新段階からⅡ期の遺物が少量出土した。

溝80B（図版28、図18） 東部で検出した南北方向の溝で、南東部で建物3を囲む形で屈曲す

柱穴778 中央部南寄り、建物1南側で検出した。建物1新南庇柱列から約4.6mの位置にあたる。平面形は南北約0.9m、東西約0.7mの隅丸方形で、深さは0.05mと非常に浅い。直径約0.3mの柱あたりの痕跡がある。埋土は柱あたりが暗褐色粘質土、掘形が褐色粘質土で遺物は出土していない。

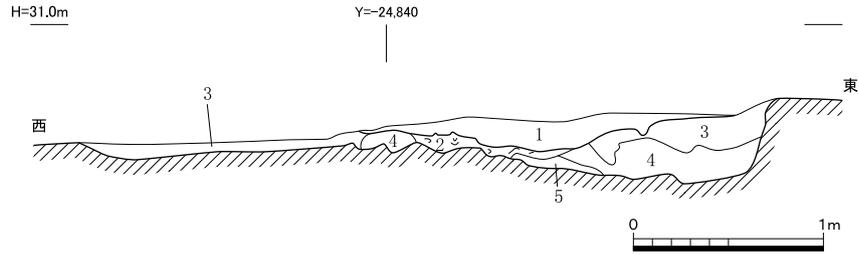
建物2（図版26、図16） 東部中央壁際で検出した東西棟の掘立柱建物である。東端は調査区外となるが、1985年度の5次調査で東端を検出していることから、桁行6間×梁行2間の身舎の南面に庇が付く建物に復元できる。規模は柱穴の芯々間で東西の検出長が約7.2m、南北約7.2mで、身舎の柱間は桁行8尺・梁行7.5尺、庇の出は9尺である。復元できる東西規模は約14.4mとなる。西端から4列目の柱筋には、身舎の中央にやや小さい別の柱穴があり、建物の東西中央に間仕切りがあった痕跡と考えられる。柱列は他の建物と異なり、北で2度西へ振る方位を取る。柱穴の平面形は、ほぼ方形で、規模



- 1 10YR3/1黒褐色粘質土
- 2 10YR3/2黒褐色粘質土
- 3 10YR3/2黒褐色粘質土に2.5Y5/4黄褐色粘土ブロックが混じる
- 4 10YR3/2黒褐色粘質土に2.5Y5/2暗灰黄色粘土ブロックが混じる

図17 建物3平面図・柱穴断面図 (1:100)

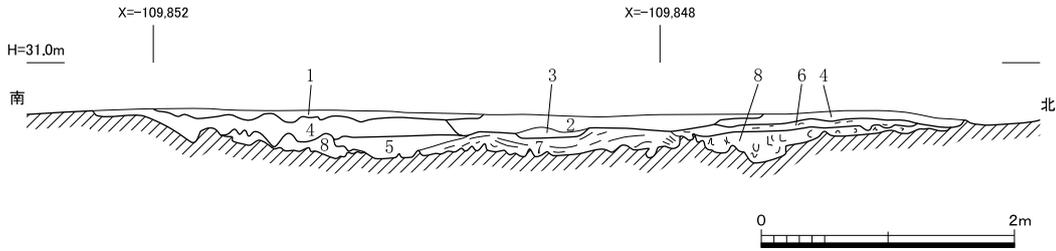
(X=-109.853ライン)



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト 粗砂を少量・炭化物を微量含む
- 2 1に5Y7/3浅黄色粘土(地山)が乱れたラミナ状に入る
- 3 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトと2.5Y5/3黄褐色細砂質シルトのブロックが混じる
- 4 5Y7/3浅黄色シルトと7.5Y5/1灰色シルト質細砂のブロックが混じる
- 5 5Y4/1灰色粘土質シルト 7.5Y5/1灰色シルト質細砂のブロックを少量含む

図18 溝80 B断面図 (1 : 40)

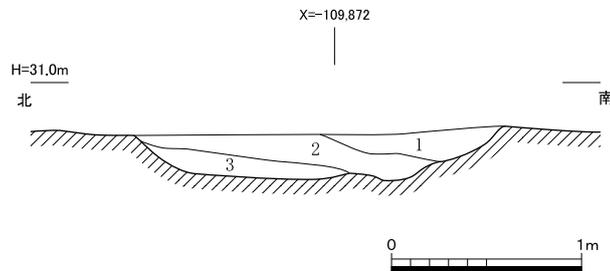
(Y=-24.835.6ライン)



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトに5Y7/3浅黄色シルトのブロックが混じる 粗砂・炭化物を少量含む
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト 粗砂を微量含む(溝832)
- 3 2.5Y4/1黄灰色細砂質シルト 小礫・粗砂を多量含む(溝832)
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトに5Y7/3浅黄色シルトのブロックが混じる 小礫・炭化物を少量含む(溝810)
- 5 10YR4/2灰黄褐色シルトと2.5Y5/2暗灰黄色細砂質シルトのブロックが混じる(流路630)
- 6 2.5Y5/3黄褐色シルトに2.5Y6/6明黄褐色シルトがラミナ状にはいる(流路630)
- 7 5Y5/1灰色中砂～小礫 ラミナあり(流路630)
- 8 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトに2.5Y6/6明黄褐色シルトが乱れたラミナ状にはいる

図19 流路630・溝810・溝832断面図 (1 : 60)

(調査区東壁)



- 1 5Y4/1灰色粘土質シルトと2.5Y3/1黒褐色シルトのブロックが混じる
- 2 5Y4/1灰色粘土質シルトに7.5Y7/2灰白色粘土質シルト(地山)のブロックが混じる
- 3 5Y3/1オリーブ黒色シルトに7.5Y7/2灰白色粘土質シルト(地山)のブロックが混じる

図20 溝90断面図 (1 : 40)

る。北端は溝831と接続し、南側は調査区外へ延長する。底面は南へ傾斜する。断面形は逆台形で西側は緩やかに浅くなる。検出長は南北約38m、屈曲する東西部分が約11m、南北部分が7mで、幅1.5～3.0m、深さ0.3～0.4mである。埋土は暗灰黄色粘質土シルトなどで、地山の浅黄色粘土などのブロックが混じる。出土遺物は京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階の土器・瓦が中心で、最上層からⅡ期新段階の土器が出土した。邸宅内を区画する溝である。

溝810 (図19) 北東部で検出した東西方向の溝状の堆積で、東側は調査区外へ延長する。平面形・断面形は不整形で東西約15m、南北約12m範囲に広がり、深さは0.1～0.2mである。埋土は暗灰黄色粘土質シルトなどで、最上層は湿地状の環境にあったことを示している。京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階の遺物が出土した。

溝832 (図19) 北東部で検出した溝810の上位に位置する東西方向の溝で、西端は溝80Bに接続し、東側は調査区外へ延長する。底面はほぼ平坦である。断面形は浅いU字形で、検出長15.0m、幅2.0～2.5m、深さ0.1～0.2mである。埋土は黄灰色細砂質シルトなどで、京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階の遺物が出土した。溝810・溝832の下層には流路630が重複する。

溝90 (図20) 南東部で検出した東西方向の溝で、西端は調査区内で途切れ、東側は調査区外へ延長する。平面形は幅に狭広があり、底面にも凹凸がある。断面形は浅いU字形で、検出長12.5m、幅1.0～2.0m、深さ0.2～0.3mである。平面形・断面形の状況から複数の土坑が重なった遺構である可能性がある。埋土は地山の粘土ブロックが混じる灰色粘土質シルトなどで、京都Ⅰ期新段階の

遺物が出土した。

溝80A (図版28、図21～23) 南東部で検出した東西方向の溝で、西側は溝80Bに接続し、東端は不明瞭となる。平面形は幅に狭広があり、底面はわずかに西へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長15.1m、幅1.5～3.1m、深さ0.1～0.3mである。平面形の状況から複数の土坑が重なった遺構である可能性がある。埋土はオリーブ褐色砂泥で、京都Ⅰ期新段階の土器が複数の群を形成して出土した。

溝46 南東部で検出した東西方向の溝で、西側は溝80Bの屈曲部に接続し、東端は調査区外へ延長する。底面はわずかに西へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長16.0m、幅0.6～0.8m、深さ0.1mである。埋土は暗灰褐色

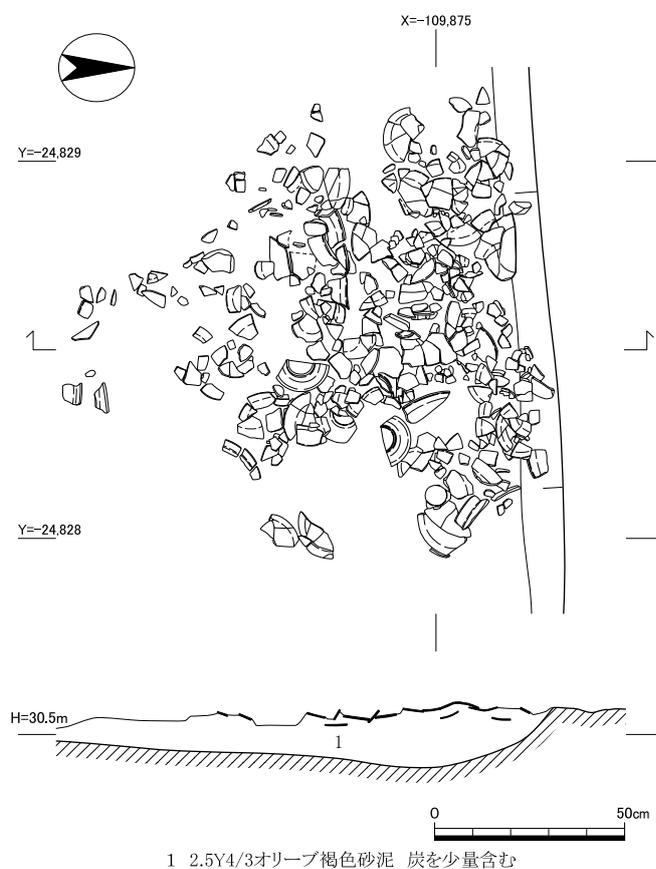


図21 溝80A土器群1遺物出土状況実測図(1:20)

砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

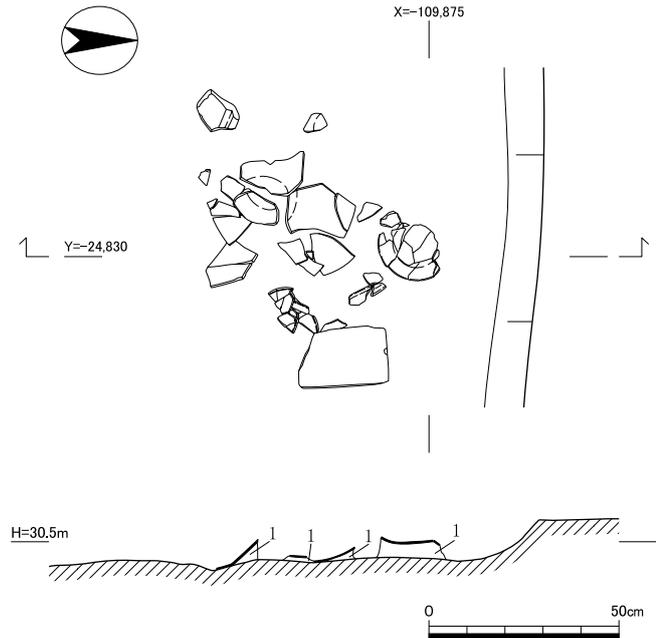
柱穴列 2 南東部で検出した南北方向の柱穴列である。北側はつながりが不明瞭で、南側は調査区外へ延長する。検出した柱穴は4基で、検出長は約6.2mである。柱穴は一辺約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。2基には直径約25cmの柱あたりの痕跡がある。柱穴の間隔は不揃いである。埋土は黒褐色砂泥などである。遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代に属する遺構と考えた。

柱穴 50 南東部で検出した。平面形は南北約0.6m、東西約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。中央部に大きき約20cmの石、その上にもう一つ平たい石を平坦な面を上にして据えている。埋土は暗灰褐色砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

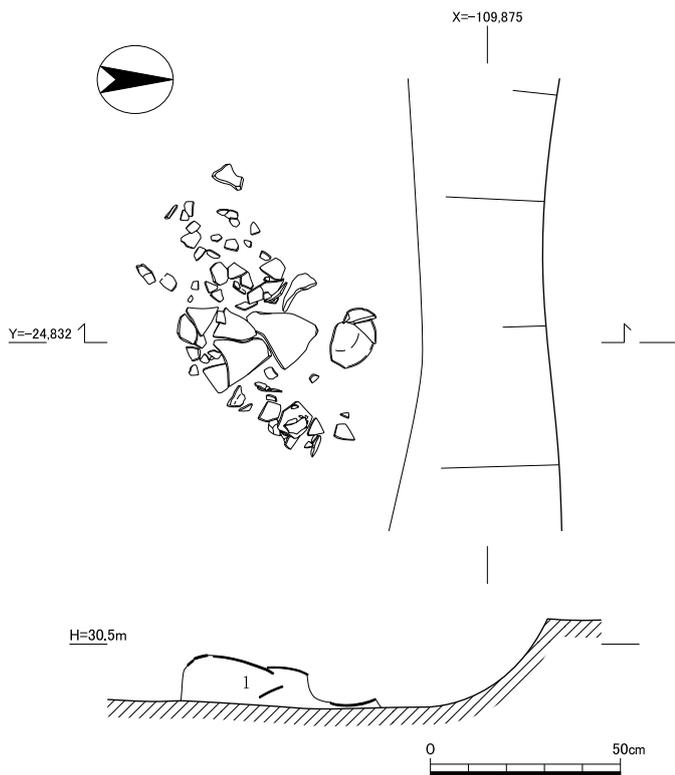
柱穴 72 南東部で検出した。平面形は一辺約0.4mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。中央部に太さ約15cmの柱根が残る。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、遺物は出土していない。

溝 184 東部で検出した溝80 B南北部分の西側に平行する南北方向の溝である。北端は調査区内で途切れ、南端は溝202に接続する。底面はわずかに南へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長16.0m、幅1.5～2.0m、深さ0.1mである。埋土は暗灰褐色砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

溝 202 東部で検出した溝80 B東西部分の北側に平行する東西方向の溝である。東端は溝184に接続し、西端は調査区内で途切れるが、溝294とつながり更に西へ延びていた可能性が高い。底面はわずかに西へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長7.0m、幅1.0m、深さ0.1mである。埋



1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 炭を少量含む
図22 溝80 A土器群2 遺物出土状況実測図 (1:20)



1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 炭を少量含む
図23 溝80 A土器群3 遺物出土状況実測図 (1:20)

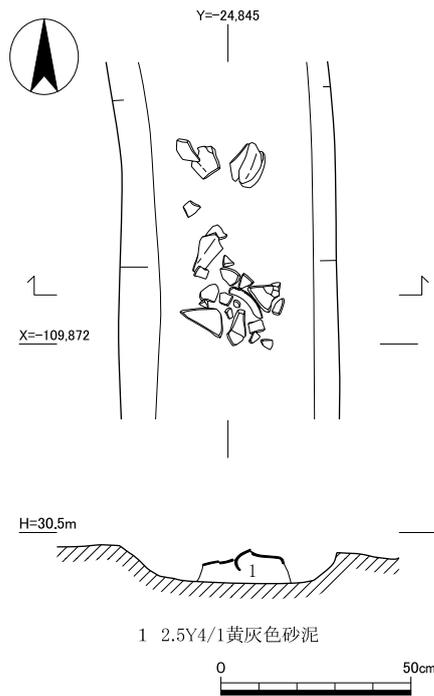


図24 溝153遺物出土状況実測図（1：20）

柱穴列3 溝153西側で検出した南北方向の柱穴列で、三条三坊五町のほぼ東西中央に位置する。検出した柱穴は5基で、検出長は約14.6mである。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、隅丸形状のものもある。深さは約0.2mである。柱穴の間隔は3.2～4.8mと不揃いである。埋土は暗灰黄色砂泥・暗灰黄色粘土などで、瓦の小片がわずかに出土した。溝153とともに大型建物東側を区画する遺構の可能性がある。

溝210 南部で検出した東西方向の溝で、東端は溝80B、西端は溝547に接続する。底面は西へ傾斜する。断面形はU字形で、長さ33.2m、幅0.4～0.8m、深さ0.1mである。埋土は黒褐色砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

溝547 南西部で検出した南北方向の溝で、南端は調査区外へ延長し、北端は溝631に接する位置で途切れる。底面は南へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長24.0m、幅0.3～0.8m、深さ0.1mである。埋土は黒褐色砂泥で、遺物は出土していない。

溝631 西部で検出した東西方向の溝で、西側は調査区外へ延長し、東端は流路630に接続する。底面は西へ強く傾斜する。断面形はU字形で、検出長は約23.6m、幅1.2～2.0m、深さ0.4～0.6mである。西側ほど幅・深さとも増大しているが、東西方向の溝が流路状に変容したと考えた。埋土は上層は黒褐色砂泥、下層はオリブ黒色シルトを含む中砂～粗砂などである。京都Ⅰ期新段階からⅡ期の遺物が出土した。

柱穴列4 南西部西壁際で検出した南北方向の柱穴列で、北で約3度西へ振る方位を取る。検出した柱穴は7基で、検出長は約15.2mである。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、隅丸形状のものもある。深さは0.2～0.3mである。3基には直径約30cmの柱あたりの痕跡がある。柱穴の間隔は不揃いである。埋土は暗灰黄色砂泥などで、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

土は暗灰褐色砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

溝294 南部で検出したやや蛇行する東西方向の溝である。東端は溝202に接する位置にあり、西端は調査区内で途切れる。底面はわずかに西へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長21.3m、幅0.8～1.6m、深さ0.1mである。埋土はオリブ褐色砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

溝153 (図版28、図24) 中央部東寄りで検出した南北方向の溝で、南端は溝202に接続し、北端は調査地内で途切れる。底面はわずかに南へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長26.3m、幅0.5～0.7m、深さ0.1mである。埋土は黄灰色砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

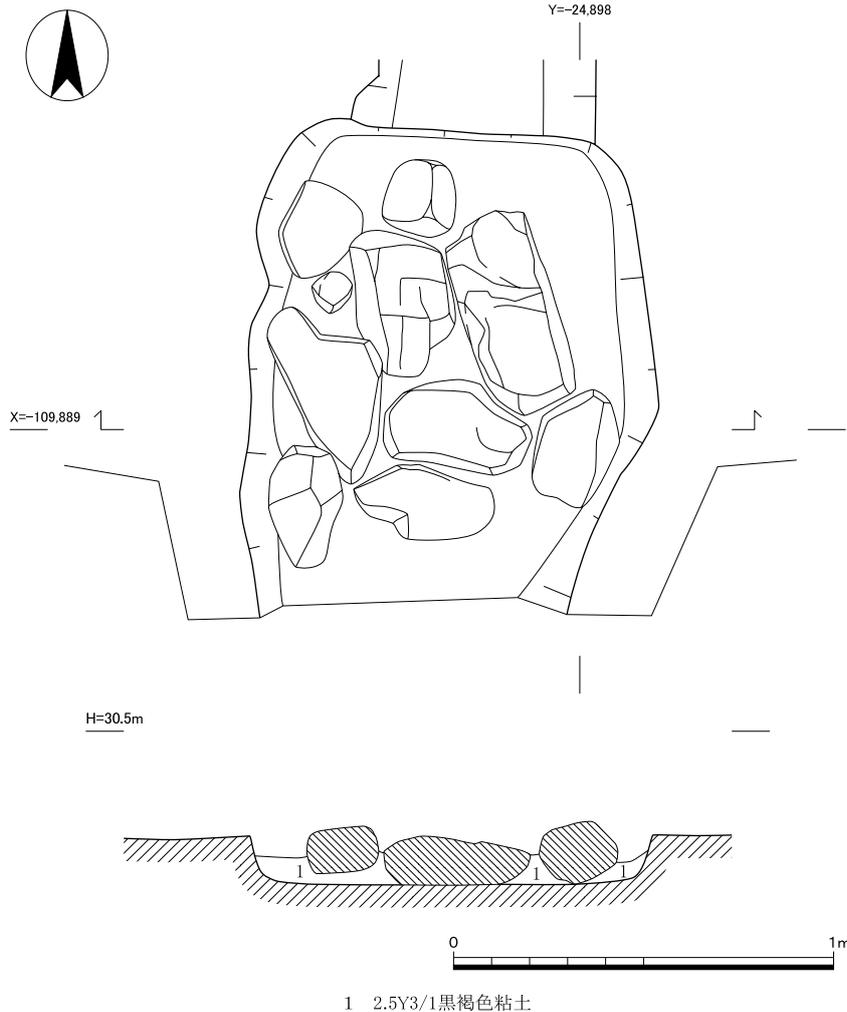


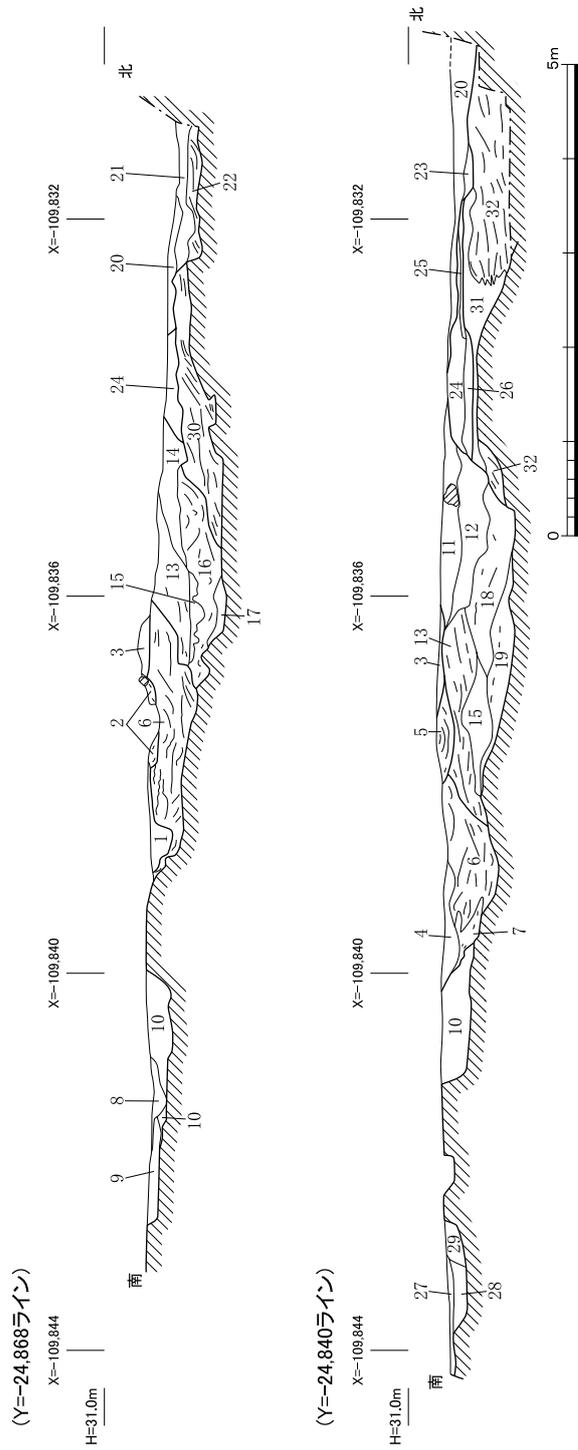
図25 土坑766実測図（1：20）

土坑484 南西部で検出した。平面形は南北約4.8m、東西約3.2mの不整形で、深さは0.1～0.15mである。埋土は地山の黄褐色・暗灰黄色粘土のブロックを含む暗オリーブ褐色砂泥で、遺物は出土していない。

溝549・土坑766（図版28、図25） 南西部で検出した屈曲する溝で、集石部分を土坑766とした。検出部分の平面形はコ字形で、南側は両端とも調査区外へ延長する。断面形は浅いU字形で、検出長は南北で3.0m、東西で9.5m、幅0.7～0.9m、深さ0.1～0.2mである。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、京都Ⅱ期の遺物が出土した。

土坑766は南壁際で検出した。溝549の幅を広げ、大きさ10～50cm程度の10個の河原石を平坦に並べる。南壁裾を拡張したところ図化した部分が石を並べる南端であることが確定した。埋土は黒褐色粘土で、遺物は出土していない。

路面800（図版29・30、図26） 調査区北部で姉小路に関連する遺構を検出した。路面800は東西方向の姉小路路面で、途切れる部分もあるが、東側・西側とも調査区外へ延長する。北側を溝799、南側を溝（水路）801・溝（水路）807に攪乱されるため、本来の幅員を大きく減じている。検出長約75.0m、幅0.7～1.3mで、上面は西へ傾斜する。路面は地山の黒色・浅黄色・黒褐色粘土



- | | |
|---|--|
| <p>1 2.5Y3/2黒褐色シルト</p> <p>2 2.5Y4/2暗灰黄色細砂質シルト ラミナあり(溝808)</p> <p>3 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細砂 粗砂～中礫を多量含む(畦806最下部)</p> <p>4 2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト 粗砂～小礫を少量含む</p> <p>5 2.5Y5/1黄灰色粗砂～中礫 ラミナあり(溝807)</p> <p>6 5Y5/2灰オリーブ色細砂と5Y5/1灰色シルト混じり中礫～粗砂のラミナ 洪水堆積層(溝807)</p> <p>7 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト 粗砂・植物遺体を少量含む ラミナあり(溝807)</p> <p>8 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに5Y7/3浅黄色粘土質シルトのブロックが混じる(盛土809)</p> <p>9 5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトブロックに2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトが混じる(盛土809)</p> <p>10 5Y2/1黒色粘土質シルト・5Y7/1灰白色シルト・5Y4/1灰白色シルトのブロックが密に混じる(盛土809)</p> <p>11 2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト 粗砂～小礫を少量含む(溝801)</p> <p>12 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粗砂を微量含む(溝801)</p> <p>13 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細砂と粗砂～小礫の互層状ラミナ 洪水堆積層(溝801)</p> <p>14 2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト(溝801)</p> <p>15 2.5Y4/1黄灰色細砂質シルト(溝801)</p> <p>16 2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトと2.5Y4/1黄灰色シルト質細砂の互層状ラミナ 小礫を微量含む(溝801)</p> | <p>17 2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト・5Y4/2灰オリーブ色シルト・5Y6/3オリーブ黄色シルト質粘土のブロックが混じる(溝801)</p> <p>18 2.5Y4/1黄灰色粗砂～小礫 ラミナあり 洪水堆積層(溝801)</p> <p>19 2.5Y4/1黄灰色シルト ラミナあり(溝801)</p> <p>20 2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土 粗砂～小礫を少量含む(溝799 姉小路北側溝)</p> <p>21 2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土(溝799 姉小路北側溝)</p> <p>22 5Y4/1灰色粗砂～中砂 ラミナあり(溝799 姉小路北側溝)</p> <p>23 2.5Y2/1黒色細砂質シルト 粗砂～小礫を多量含む(溝799 姉小路北側溝)</p> <p>24 2.5Y2/1黒色シルト質粘土・5Y7/4浅黄色シルト質粘土・2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトのブロックが混じる(路面800 姉小路路面)</p> <p>25 2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土 粗砂～小礫を少量含む(路面800 姉小路路面)</p> <p>26 5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土に5Y7/3浅黄色粘土質シルトのブロックが混じる(路面800 姉小路路面)</p> <p>27 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトに5Y7/3浅黄色シルトのブロックが混じる 粗砂・炭化物を少量含む</p> <p>28 5Y5/2灰オリーブ色シルト 中砂～粗砂を少量含む(溝831 姉小路南築地内溝)</p> <p>29 5Y4/1灰色粘土質シルト(溝831 姉小路南築地内溝)</p> <p>30 2.5Y4/1黄灰色小礫～細砂と2.5Y2/1黒色シルト質粘土の互層状ラミナ 洪水堆積層</p> <p>31 N3/1暗灰色粘土質シルト</p> <p>32 5Y3/1オリーブ黒色粗砂～中砂 ラミナあり 洪水堆積層</p> |
|---|--|

図26 姉小路関連遺構断面図 (1:80)

質シルトの細かいブロック土を約0.2mの厚さで積み上げ、叩き締めて形成する。京都Ⅰ期新段階からⅡ期の遺物が極少量出土した。

溝799 (図版29・30、図26) 北部で検出した東西方向の姉小路北側溝で、東側・西側とも調査区外へ延長し、北岸は調査区外となる。底面は西へ傾斜する。断面形は浅い台形で、検出長約75.0m、幅2.9m以上、深さ約0.3mである。埋土は黒褐色シルト質粘土などで、ラミナが観察できる部分もあることから水流により姉小路路面を浸食したと推定できる。また、下層では平安京造営前の水路と重複していることが判明した。京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階の遺物が少量出土した。

築地804 (図版29・30、図26) 北部で検出した東西方向の姉小路南築地で、途切れる部分もあるが、東側・西側とも調査区外へ延長する。地山を削り出して成形しており、基底部のみ残存する。検出長約59.5m、幅約1.5m、残存高約0.2mである。北側は溝(水路)807に攪乱される部分がある。

溝831 (図版29・30、図26) 北部で検出した東西方向の姉小路南築地内溝で、途切れる部分もあるが、東側・西側とも調査区外へ延長する。底面は西へ傾斜する。断面形は浅いU字形で、検出長約59.5m、幅0.5～0.9m、深さ約0.2mである。埋土は灰オリーブ色シルトなどで、京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階の遺物が出土した。

溝(水路)801 (図版29・30、図26) 北部の姉小路路面復元推定位置で検出した東西方向の溝で、東側・西側とも調査区外へ延長する。南側は溝(水路)807と重複する。底面は水流に挟られたため凹凸が著しいが全体としては西へ傾斜する。断面形は半円形で、検出長約75.0m、幅3.0m以上、深さ約0.6mである。埋土は黒褐色粘土質シルトなどで、多量の粗砂や礫を含む部分があり、洪水や滞水を繰り返しながら埋没したことがわかる。京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階の遺物が多いが、Ⅲ期の遺物を含んでいる。

溝(水路)807 (図版29・30、図26) 北部の姉小路路面復元推定位置で検出した東西方向の溝で、東側・西側とも調査区外へ延長する。北側は溝(水路)801と重複する。底面は水流に挟られたため凹凸が著しいが全体としては西へ傾斜する。断面形は浅いV字形で、検出長約75.0m、幅3.0～4.0m、深さ約0.5mである。埋土は灰オリーブ色細砂などで、多量の粗砂や礫を含む部分があり、洪水や滞水を繰り返しながら埋没したことがわかる。京都Ⅳ期新段階からⅤ期古段階の遺物が出土した。

盛土809 (図版29・30、図26) 北部で検出した東西方向に延びる溝状の遺構で、東側・西側とも調査区外へ延長する。東部では溝(水路)807、西部では築地804に南接しており、底面は西へ傾斜する。断面形は浅い台形で、検出長約69.0m、幅2.0～2.5m、深さ約0.3mである。地山の黒色・灰白色・灰色シルトの細かいブロック土で埋め立てている。流水の痕跡が全く見られないこと、京都Ⅴ期の遺物が数点であるが出土していることから溝(水路)807に伴う人為的な盛土と考えた。

(4) 平安京造営前の遺構 (図27)

平安京造営前の遺構には、流路・落込み・土坑がある。

流路630 (図版31、図19・28) 北東部から西部中央にかけて検出した。北東部では溝810・溝832と重複し、東側・西側とも調査区外へ延長する。分流・合流しながら北東から南西方向へ向けて流れており、A～Dの4つの部分に分けて調査を進め、遺物を採集した。

検出長約85mで、場所にもよるが幅1～5m、深さ0.1～0.6mである。底部は水流による凹凸があり、岸の一部は抉れて土坑状に広がる。埋土は下層が灰色やオリーブ黒色のシルトを含む中砂～粗砂で、ラミナが見られる洪水堆積層である。中層は灰色やオリーブ黒色の中砂～小礫を含むシルトで、やや澱んだ状況にあったことがわかる。上層はオリーブ黒色や明黄褐色のシルトのブロックが混じっていることから、人為的な埋土を含んでいると考えられる。最上層は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトで湿地状の環境にあったことを示している。

下層の洪水層からの出土遺物はなく、中層で古墳時代から飛鳥時代の遺物、上層・最上層で瓦片を中心とする平安時代前期の遺物が出土した。

落込み978 西部で検出した不整形な遺構で、西側は攪乱される。検出長は東西12.8m以上、南北約11m、深さ0.2～1.0mである。西側ほど幅・深さが増大していることから流路630と同様の流路の痕跡と考えられる。埋土は中礫を含むオリーブ褐色砂泥で、京都I期からII期の遺物が出土した。

土坑811 北東部の溝(水路)807下面で検出した。平面形は直径約0.5mの不整形な円形で、深さ約0.2mである。埋土は黒褐色砂泥で、飛鳥時代の遺物が出土した。

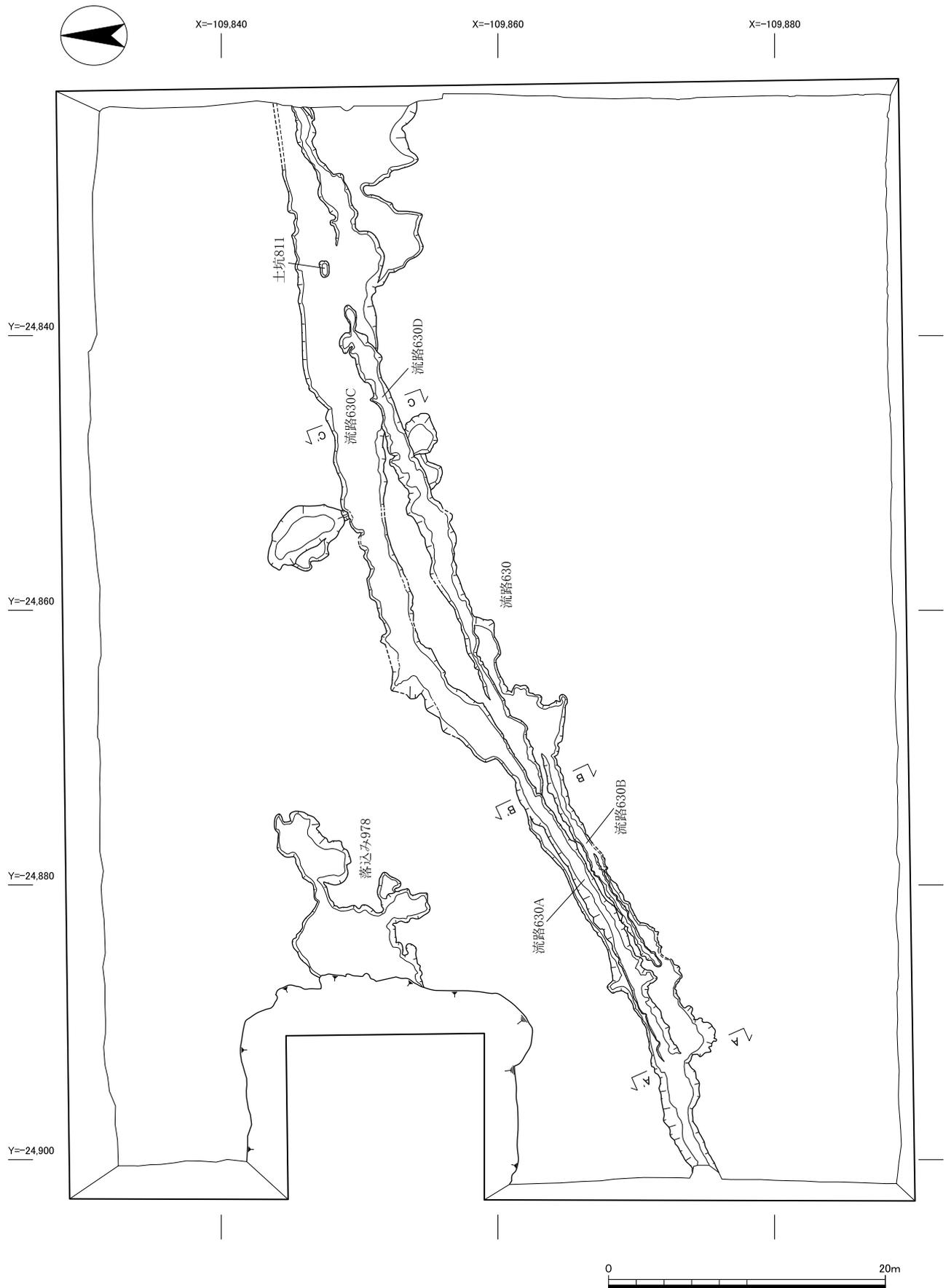
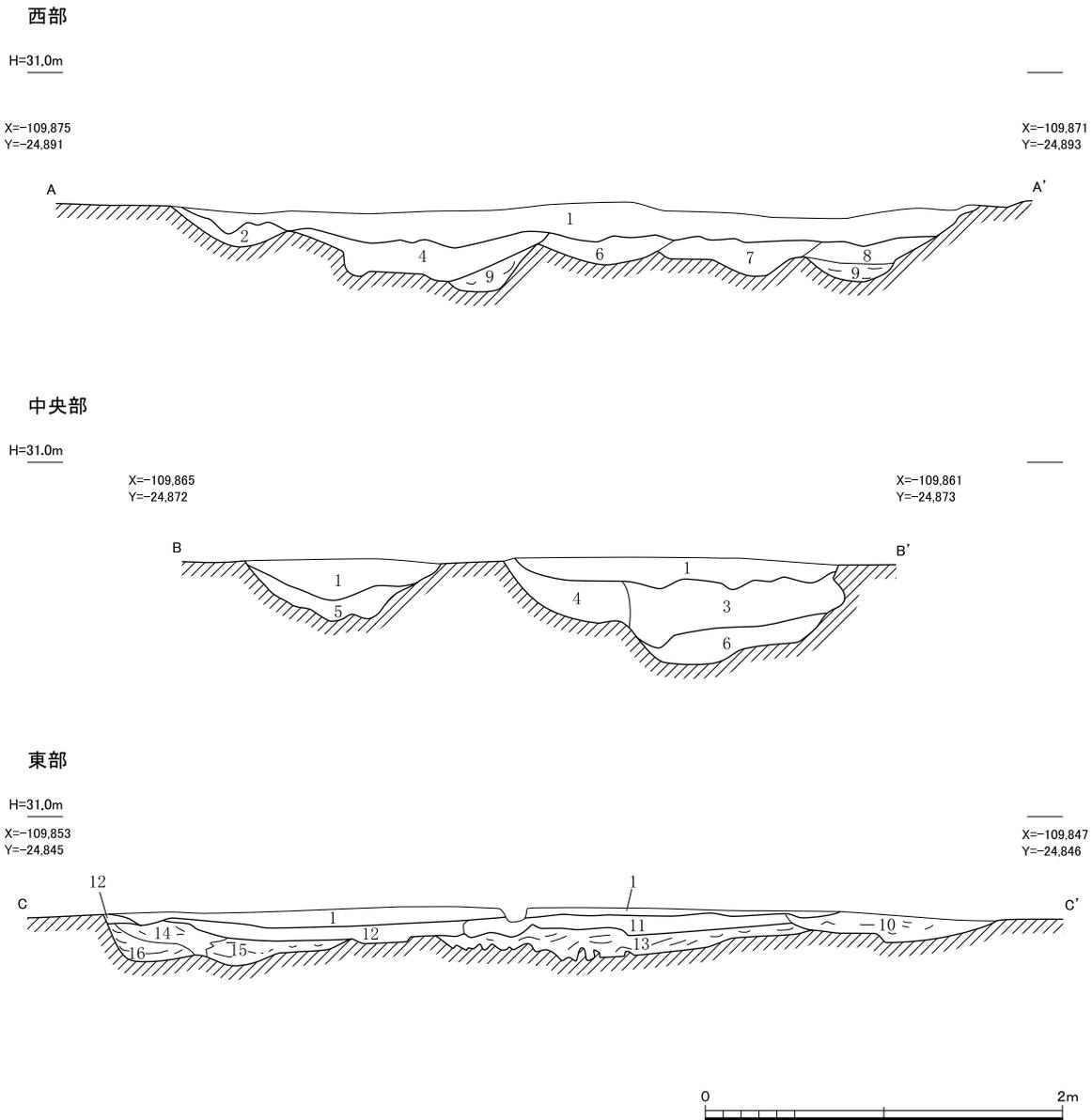


图27 遺構平面図3 (平安京造営前 1 : 400)



- 1 10YR3/2黒褐色粗砂混じり粘土質シルト (630共通の第1層)
- 2 1に2.5Y6/6明黄褐色粘土質シルトの細長いブロックが混じる (630A第1層)
- 3 7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂混じり粘土質シルトと5Y4/1灰色シルトのブロックが混じる (630A第1層)
- 4 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトに2.5Y6/6明黄褐色シルトのブロックが混じる (630A第1層)
- 5 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトに2.5Y6/6明黄褐色シルトのブロックが混じる (630B第2層)
- 6 5Y4/1灰色粗砂～小礫混じり粘土質シルト 洪水堆積層 (630A第2層)
- 7 5Y3/1オリーブ黒色中砂～小礫混じりシルト 洪水堆積層 (630A第2層)
- 8 5Y3/1オリーブ黒色粗砂～小礫混じり細砂質シルト 洪水堆積層 (630A第2層)
- 9 5Y5/1灰色粗砂～小礫 ラミナあり (630A第2層)
- 10 5Y4/1灰色粘土質シルト 5Y7/3浅黄色シルトがラミナ状にはいる (630C第1層)
- 11 5Y5/2灰オリーブ色粗砂～小礫混じりシルト質細砂 (630C第1層)
- 12 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト 粗砂を微量含む (630D第1層)
- 13 5Y6/3オリーブ黄色シルト混じり細砂～粗砂 ラミナあり (630C第2層)
- 14 5Y4/1灰色シルト 中砂がラミナ状にはいる (630D第2層)
- 15 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり中砂～粗砂 ラミナあり 洪水埋積層 (630D第2層)
- 16 5Y4/1灰色シルト混じり中砂～粗砂 ラミナあり (630D第2層)

図28 流路630断面図 (1 : 40)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査では整理用コンテナに102箱の遺物が出土した。出土遺物には土器・陶磁器、瓦、木製品のほか埴輪、土製品、石製品、動植物遺体などの種類がある。出土遺物の土器・陶磁器、瓦が9割、次いで木製品が1割を占め、その他の種類の遺物はわずかである。

調査では新しい時代の遺構埋土・包含層に、より古い時代の遺物が混入する状況がみられた。時代別の出土量では、平安時代前期の遺物が大部分で、古墳時代から飛鳥時代及び平安時代中期以降の遺物は少量で、合わせても1割に満たない。平安時代前期の遺物の出土状況をみると、土器・陶磁器は溝80 B東側の調査区東部、瓦類は建物1・建物5周辺からまとまって出土した。

以下では種類ごとに出土遺物の概要を報告する。なお、出土遺物の時期の判定は、平安京・京都³³⁾I期～XIV期の編年案に準拠する。

(2) 土器・陶磁器

土器・陶磁器には土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・白色土器・緑釉陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などがある。土器類は瓦とともに出土遺物の大部分を占めるが、古墳時代から飛鳥時代、平安時代前期、平安時代中期から後期、鎌倉時代から室町時代、江戸時代に大別することができ、その多くは平安時代前期のものである。

古墳時代から飛鳥時代 (図29 1～8)

古墳時代の土器には、土師器甕、須恵器杯身(3)・高杯・鉢(7)・甕(8)がある。また、飛鳥時代の土器には、土師器高杯・甕(1)、須恵器杯蓋(2)・杯身(4～6)・提瓶がある。ほとんどが小片である。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安京造営前	土師器、須恵器、埴輪		土師器1点、須恵器7点、土製品1点		
平安時代	土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品、土製品、石製品、動植物遺体		土師器34点、須恵器29点、灰釉陶器12点、緑釉陶器7点、輸入陶磁器4点、瓦28点、木製品12点、土製品1点		
鎌倉時代以降	土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、木製品、土製品、石製品		木製品1点		
合 計		115箱	138点 (18箱)	8箱	89箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より13箱多くなっている。

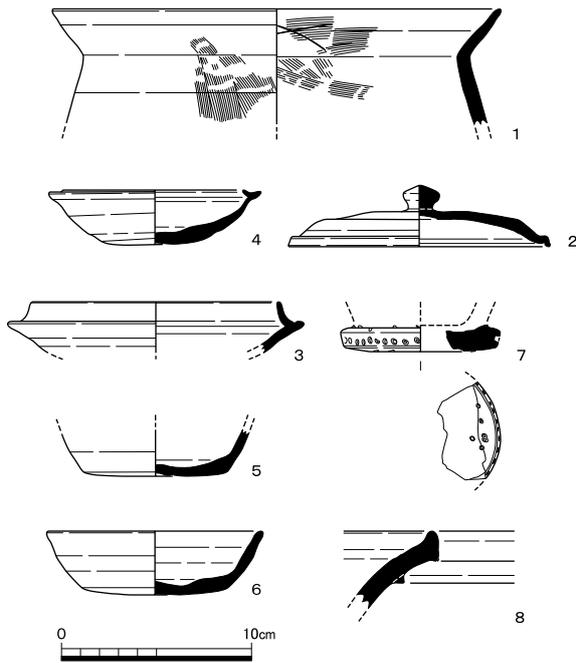


図29 土器実測図1 (1:4)

1は長胴甕の口縁部である。口縁部は体部から屈曲して開き、端部は丸くおさめる。調整は、体部は内外面ともハケで、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケである。口縁部内面に「×」形のヘラ記号をつける。流路630から出土した。

2は宝珠つまみが付く蓋である。天井部はわずかに丸みをもち、口縁部は屈曲して端部は垂下する。調整は、天井部外面はヘラ切りののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。流路630から出土した。

3は体部は内弯して開く。受部は水平に張り出し、立ち上がり部は内傾する。調整は、体部・受部・立ち上がり部の内外面はともに

回転ナデである。耕作溝から出土した混入品である。

4は受部・立ち上がり部とも矮小化している。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、内面はナデ。体部・受部・立ち上がり部の内外面はともに回転ナデである。流路630から出土した。

5・6は平底の底部から口縁部が屈曲して開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである、5は流路630、6は土坑811から出土した。

7は欠損部分が多いが、円盤形の底部から口縁部が直線的に立ち上がる形態に復元できる。調整は、内外面ともナデで、 $\phi 2\text{mm}$ の刺突文を密に施す。遺構検出中に出土した。

8は大型甕である。口縁部は外反して開き、端部は上下に拡張する。調整は、内外面とも回転ナデで、外面に突帯が1条めぐる。耕作溝から出土した混入品である。

平安時代 (図版32～34、図30～34 9～95)

平安時代の土器には、土師器碗・杯・皿・高杯・甕、黒色土器碗・甕、須恵器杯蓋・杯身・碗・稜碗・鉢・壺蓋・壺・平瓶・甕、灰釉陶器碗・皿・段皿・三足盤・鉢・壺蓋・壺・甕・硯、白色土器碗・盤、緑釉陶器碗・皿・耳皿・蓋・唾壺・壺、中国製青磁碗・白磁碗・白磁水注などがある。大部分を平安時代前期の遺物が占めており、これらのほかに平安時代中期から後期になると、瓦器鍋釜類、東播系須恵器鉢・甕などが加わる。以下に、代表的な遺構から出土した土器を紹介する。

溝245出土土器 (図30 9) 建物1新南側の溝である。土師器碗皿類・高杯・甕、須恵器杯身 (9)・壺・甕が出土した。9は平坦な底部から体部が屈曲して開き、口縁端部はわずかに外反気味に丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、内面は回転ナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデである。京都I期新段階に属する。

土坑857出土土器 (図版32、図30 10) 建物5東側の単独の柱穴である。土師器碗 (10) と甕

の破片のみが出土した。10は底部から体部が緩やかに内弯して開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は、底部・体部外面はケズリ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。完形品であることから祭祀に使用された可能性がある。京都Ⅰ期新段階に属する。

柱穴717出土土器（図版32、図30 11） 建物1新南庇中央の柱穴である。完形の土師器小型甕（11）が出土した。小破片に碎けていたため、底部の復元ができていない。11は球形の体部から口縁部が屈曲して開き、口縁端部はわずかに肥厚する。調整は、表面の摩滅のため不明瞭であるが、体部外面はハケ、内面はオサエ、口縁部内外面はヨコナデである。完形品であることから祭祀に使用された可能性がある。京都Ⅰ期新段階に属する。

溝80B出土土器（図版32、図30 12～20） 土師器碗皿類（13・14）・高杯・壺（12）・甕、黒色土器碗、須恵器杯蓋（15）・杯身・碗（17）・皿（16）・鉢・壺・甕、灰釉陶器碗（19）・皿（18）・硯（20）、緑釉陶器碗などが出土した。

12は内弯気味に外傾する体部から口縁部が屈曲して立ち上がる。調整は、体部外面はミガキ、内面はヨコナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

13・14は埋土最上層から出土した。口縁部は内弯気味に開き、口縁端部はわずかに屈曲する。器壁は薄い。調整は、底部・体部外面はオサエ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデである。

15はつまみが付かない蓋である。天井部はわずかに丸みを持ち、端部は小さく屈曲して垂下する。調整は、天井部外面はヘラ切りののちナデ、天井部内面・口縁部内外面はヨコナデである。

16は底部から口縁部が屈曲して直線的に短く立ち上がり、端部は緩く平坦に仕上げる。調整は、底部は平底でヘラ切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。

17は底部から口縁部が内弯気味に開き、端部はわずかに外反する。調整は、底部外面は平底で糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。

18は底部から口縁部が浅く開き、端部は外反して丸くおさめる。調整は、底部外面は回転ケズリののち高台を貼り付け、口縁部外面は回転ナデ、底部・口縁部内面は厚く釉薬を施し、調整は不明である。

19は内弯気味の体部から口縁部が外反して開く。調整は、体部・口縁部外面は回転ナデ、内面は厚く釉薬を施し、調整は不明である。

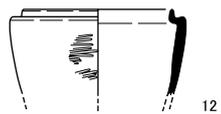
20は風字硯の陸部である。粘土板の両端を折り曲げて成形し、底面の2箇所脚を貼り付ける。調整は、上面は丁寧なナデ、端面はタテ方向のケズリ、側面・下面は厚く釉薬を施し、調整は不明である。脚はケズリにより多角形に整形しており、割付線や貼り付けの際のかきやぶりの痕跡を観察できる。上面中央にはわずかに墨痕が残り、使用により極めて平滑になっている。12・15～20は京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に、13・14はⅡ期新段階に属する。

溝810・溝832出土土器（図版32、図30 21～28） 土師器碗皿類（21・22）・高杯・甕、黒色土器碗、須恵器杯蓋・杯身・鉢・壺（23・24）・甕、灰釉陶器碗・皿・三足盤（25）・硯（26）、緑釉陶器碗・唾壺（27）・中国製白磁水注（28）などが出土した。

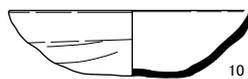
溝245



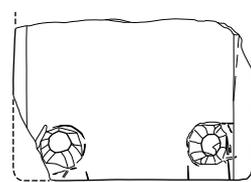
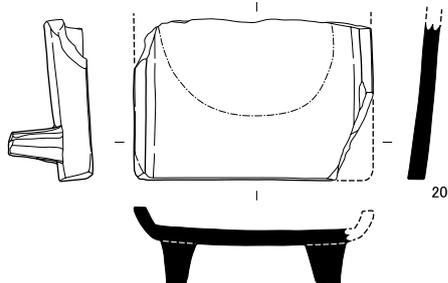
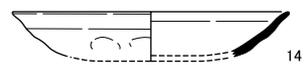
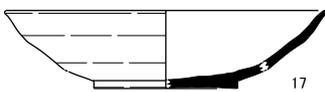
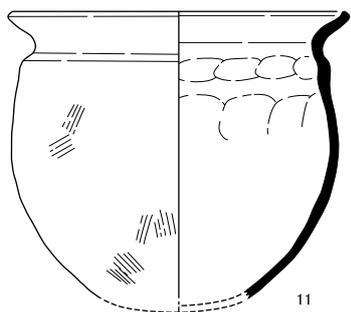
溝80B



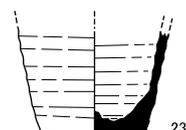
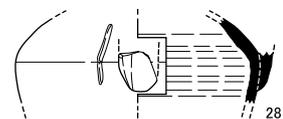
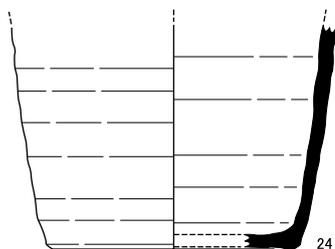
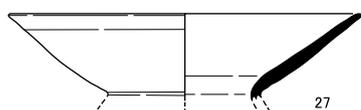
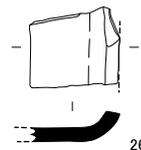
土坑857



柱穴717



溝810・溝832



溝90

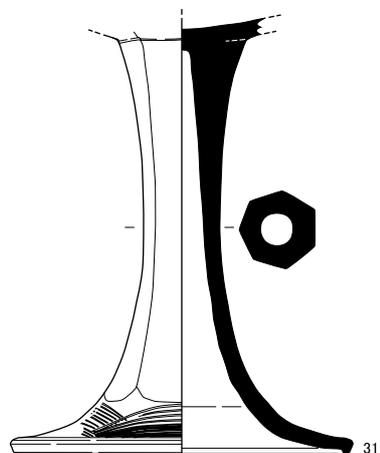
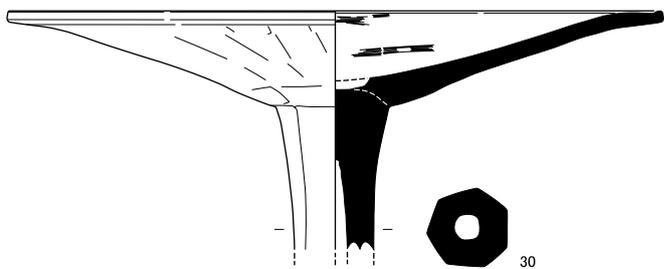


图30 土器实测图2 (1:4)

21は口縁部は内弯気味に開き、口縁端部は外反して丸くおさめる。調整は、底部・体部外面はオサエ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデである。

22は大型杯で、口縁部は内弯気味に開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は底部・体部外面はケズリ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデである。

23・24は底面から屈曲して、体部が直線的に立ち上がる。調整は、23は底部平底で糸切り、底部内面・体部内外面は回転ナデで、内面はロクロ痕が顕著である。24は底部平底でヘラ切り、底部内面・体部内外面は回転ナデである。

25は底部から口縁部が屈曲して開き、端部は水平方向に張り出す。調整は、底部外面は回転ケズリののち脚を貼り付け、口縁部外面は回転ナデ、底部・口縁部内面は厚く釉薬を施し、調整は不明である。脚は三足に復元でき、ケズリにより獣脚に整形する。

26は風字硯の小破片である。粘土板を折り曲げて成形する。上面は丁寧なナデ、端面はタテ方向のケズリ、側面・下面は厚く釉薬を施し、調整は不明である。

27は口縁部が直線的に大きく開く。頸部の直径は大きい。調整は内外面ともミガキののち厚く施釉する。猿投産である。

28は把手部分の小破片である。屈曲する肩部外面に板状の把手を貼り付ける。体部外面にはタテ方向の圧痕があり、瓜形を表現した可能性がある。器壁は薄い。調整は、体部内面は回転ナデ、外面は施釉のため不明である。いずれも京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する。

溝90出土土器（図30 29～32） 土師器碗皿類（29）・高杯（30・31）・甕、黒色土器碗、須恵器杯蓋・杯身・皿（32）・壺、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗などが出土した。

29は平坦な底部から口縁部が内弯気味に短く立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。調整は、底部・口縁部外面はケズリ、底部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデである。

30・31は口縁部と柱状部・裾部を芯棒技法で接合する。口縁部は浅く直線的に大きく開き、口縁部はわずかに外反して肥厚する。柱状部は断面を不整形な7角形に成形する。裾部は外反して開き、端部は肥厚する。調整は口縁部外面は放射状のケズリ、内面は一部にハケが残るが、表面の摩滅により不明瞭。柱上部外面はタテ方向のケズリ、裾部外面はナデののちヨコ方向の粗いミガキ、内面はヨコナデである。

32は底部から口縁部がわずかに内弯気味に開き、端部は外反する。調整は、底部外面は平底で糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。器壁は薄い。いずれも京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する。

溝80A出土土器（図版33、図31 33～60 表4） 土師器蓋（33）・碗皿類（34～41）・高杯・甕（42～48）、黒色土器碗、須恵器杯蓋（49）・杯身（50・51）・鉢（52）・壺・甕（53）、灰釉陶器碗・皿、緑釉陶器皿（54）・碗（55～59）・蓋（60）などが出土した。

33は円柱形のつまみが付く蓋である。天井部は丸みをもち、口縁端部はわずかにつまみ出す。調整は、天井部・口縁部外面はケズリ、天井部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデである。

34は杯である。口縁部は内弯気味に開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は、表面の摩滅のため

溝80A

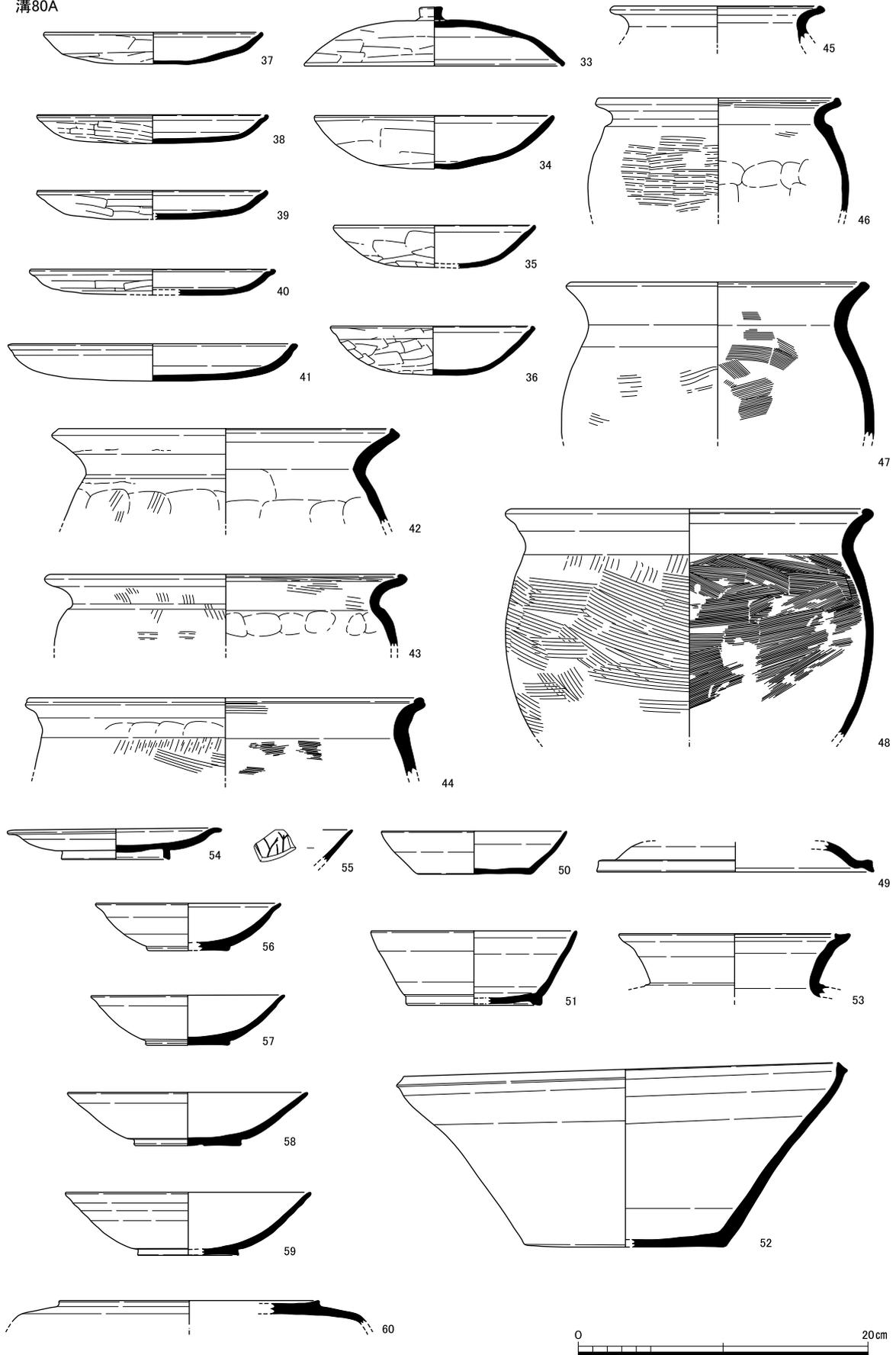


图31 土器实测图3 (1:4)

不明瞭であるが、底部・口縁部外面はケズリ、底部内面はナデ、口縁部外面はヨコナデである。

35・36は椀である。やや平坦な底部から口縁部が内弯して開き、端部はわずかに肥厚する。調整は、底部・口縁部外面はケズリ、底部内面はナデ、口縁部外面はヨコナデである。36は内面全面に漆が付着する。

37～41は皿で、41はやや大型である。平坦な底部から口縁部が内弯気味に短く立ち上がり、端部はわずかに屈曲・肥厚する。調整は、底部・口縁部外面はケズリ、底部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデである。

42～48は小型甕から大型甕まで大きさ・形態に差異がある。球形の体部から口縁部が屈曲して開くものが多いが、44・47・48は屈曲が緩やかである。いずれも口縁端部は肥厚する。調整は、体部外面はハケが多く、46はタタキ、体部内面は42・43・46がオサエののちナデ、44・47・48がハケ、45は不明である。口縁部内外面はヨコナデで、ヨコ方向のハケが残るものがある。

49は天井部が欠損しているため、つまみは不明である。口縁端部は小さく屈曲して垂下する。調整は、口縁部内外面はヨコナデである。

50は平坦な底部から体部が屈曲して開き、口縁端部はわずかに外反気味に丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、内面は回転ナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデである。

51は底部から口縁部が屈曲して直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののち高台を貼り付け、底部外面・口縁部外面は回転ナデである。

52は底部から体部が屈曲して直線的に開き、口縁端部は拡張して面を作る。調整は、底部外面はナデ、底部内面及び体部・口縁部内外面はヨコナデである。

53は体部から口縁部が強く屈曲して外反気味に開き、端部に面を作る。調整は、体部は不明、口縁部内外面は回転ナデである。

54は底部から口縁部が浅く開き、端部は外反して丸くおさめる。底部外面は回転ケズリで、削り出しにより輪高台を成形する。調整は、施釉のため不明瞭であるが、底部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデのちミガキである。内外面に厚く施釉する。岩倉産である。

55は椀の小片である。器壁は薄い。内面に陰刻があり、花文の一部と推定している。内外面に厚く施釉する。猿投産である。

56～59はやや小型のもの（56・57）とやや大型のもの（58・59）がある。底部から口縁部が内弯気味に開き、端部はわずかに外反する。底部外面は削

表4 溝80A出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	蓋	9	0.4	92.5
	椀・皿類	1874	85.1	
	高杯	2	0.1	
	甕類	281	12.7	
	不明	37	1.7	
	小計	2203	100.0	
黒色土器	椀・皿類	38	100.0	1.6
	甕	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	38	100.0	
須恵器	蓋	1	1.1	3.8
	椀・皿類	34	37.3	
	鉢	20	22.0	
	壺類	6	6.6	
	甕類	26	28.6	
	不明	4	4.4	
	小計	91	100.0	
灰釉陶器	椀・皿類	5	100.0	0.2
	壺・甕類	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	5	100.0	
白色土器	椀・皿類	0	—	0.0
	高杯	0	—	
	不明	0	—	
	小計	0	—	
緑釉陶器	椀・皿類	44	97.8	1.9
	壺・甕類	0	0.0	
	不明	1	2.2	
	小計	45	100.0	
輸入陶磁器	椀・皿類	0	—	0.0
	壺・甕類	0	—	
	不明	0	—	
	小計	0	—	
総数		2382		100.0

り出しにより、56・57・59は平高台、58は蛇の目高台を成形する。調整は、施釉のため不明瞭であるが、底部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデののちミガキである。内外面に施釉するが、剥離している部分がある。岩倉産である。

60は類例を見ない器形であるが、大型の蓋の可能性ある。平坦な天井部から、体部は内弯して垂下し、境界部分には突帯状に段がめぐる。調整は、天井部・体部内外面とも回転ナデののちミガキである。内外面に厚く施釉する。猿投産である。

溝80 Aからは今回の調査で最もまとまった量の土器・陶器が出土したので、表4に破片数をまとめた。各器種の食器類と土師器甕の割合が多い。時期は京都I期新段階のものが大部分、II期古段階のものが少量である。

流路630出土土器（図版32、図32 61～66） 土師器碗皿類（61）・高杯・甕、黒色土器碗、須恵器杯蓋・杯身（62）・稜碗（63）・鉢・壺蓋（64）・壺（66）・平瓶（65）・甕などが出土した。

61は大型杯で、口縁部は内弯気味に開き、口縁端部はわずかに肥厚する。調整は底部・体部外面はケズリ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデである。

62は底部から口縁部が屈曲して直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののち高台を貼り付け、底部外面・口縁部外面は回転ナデである。

63は金属器を模倣した製品である。底部から体部が内弯気味に開き、口縁部は外反して端部は丸くおさめる。体部外面には稜がめぐる。調整は、高台は貼り付けで強くつまみ出す。体部・口縁部内外面は回転ナデである。

64は小さな宝珠つまみが付くと考えられる。平坦な天井部から口縁部が強く屈曲し。短く垂下する。器壁が薄い。調整は、天井部外面は回転ケズリ、天井部内面、口縁部内外面は回転ナデである。

65は底部から体部が屈曲して直線的に開き、蓋部も強く屈曲する。調整は、底部外面はヘラ切りののち高台を貼り付け、底部外面・口縁部外面は回転ナデである。

流路630

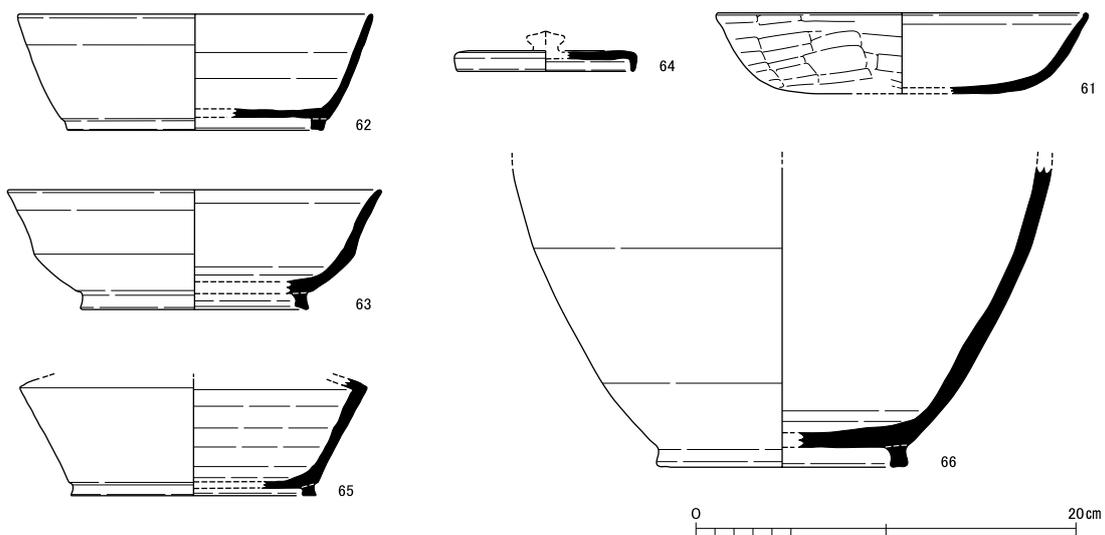


図32 土器実測図4（1：4）

66は大型品で、底部から体部が緩やかに内弯して立ち上がる。調整は、底部外面はヘラ切りののち高台を貼り付け、底部外面・口縁部外面は回転ナデである。

中層からは古墳時代から飛鳥時代の遺物が出土しているが、ここに図示したものは京都I期新段階に属すると考えられる。

姉小路路面・溝出土土器(図版32、図33 67~72) 姉小路路面800からは、土師器碗皿類・須恵器壺(67)が出土した。出土遺物は極少量で土器は10点に満たない。

67は口縁部は体部へ接合したのち、外反気味に開く。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。京都I期新段階までの遺物であろうか。

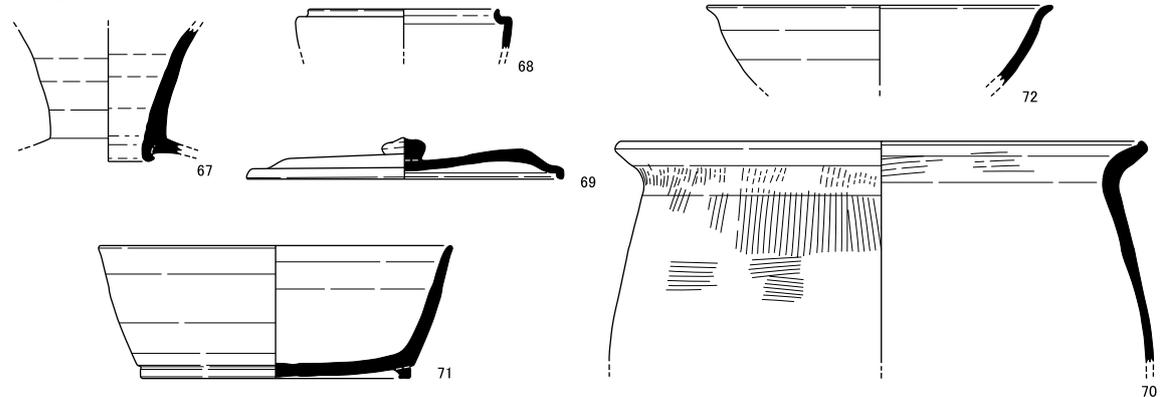
姉小路南築地内溝831からは、土師器碗皿類・高杯・壺(68)・甕、黒色土器碗、須恵器杯蓋(69)・杯身・鉢・壺・甕、灰釉陶器皿、緑釉陶器碗などが出土した。図示していないが、土師器甕には角閃石を多量に含む河内産のつば付き甕がある。

68は内弯気味に外傾する体部から口縁部が屈曲して立ち上がる。調整は、体部外面はミガキ、内面はヨコナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

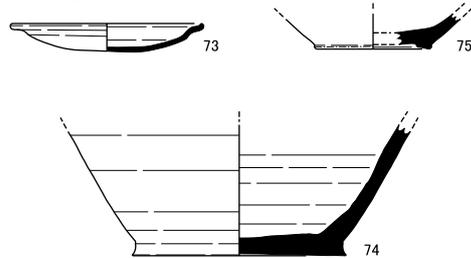
69は扁平な宝珠つまみが付く蓋で、やや焼けひずむ。天井部は平坦で、口縁端部は小さく屈曲して垂下する。調整は、天井部外面はヘラ切りののちナデ、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。京都I期新段階に属する。

姉小路北側溝799からは、土師器碗皿類・高杯・甕(70)、黒色土器碗、須恵器杯身(71)・壺・甕、灰釉陶器碗(72)が出土した。出土遺物は少量である。

姉小路路面・溝



溝(水路)801



溝(水路)807

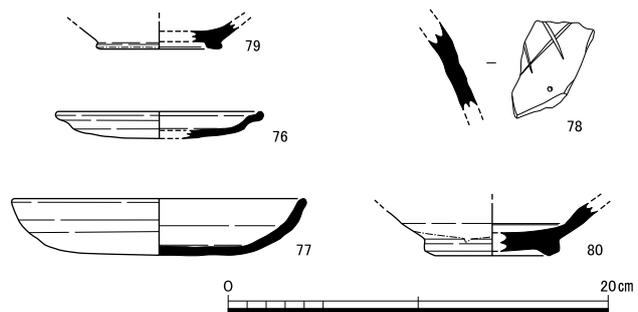


図33 土器実測図5 (1:4)

70は長胴気味の体部から口縁部が屈曲して短く開き、端部は肥厚する。調整は、体部外面はハケ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

71は底部から口縁部が屈曲して直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののち高台を貼り付け、底部外面・口縁部外面は回転ナデである。

72は内弯気味の体部から口縁部が外反して開く。調整は、体部・口縁部外面は回転ナデ、内面は厚く釉薬を施し、調整は不明である。京都Ⅰ期新段階に属する。

溝（水路）801出土土器（図版32、図33 73～75） 土師器皿（73）・高杯・甕、黒色土器碗、須恵器杯身・鉢（74）・壺（75）・甕、灰釉陶器碗・壺、緑釉陶器碗などが出土した。

73は平坦な底部から口縁部が強く屈曲して開く。器壁は薄い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

74は底部から体部が屈曲して直線的に開く。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・体部内外面は回転ナデである。

75は底部の小破片で、削り出し高台である。灰オリーブ色の釉薬を厚く施す。越州窯産である。

73は京都Ⅲ期古段階から中段階に属する。74・75は京都Ⅰ期からⅡ期の混入品である。

溝（水路）807出土土器（図版32、図33 76～80） 土師器皿（76・77）、須恵器壺（78）・甕、中国製青磁碗（79）・白磁碗（80）などが出土した。

76は平坦な底部から口縁部が強く屈曲して開く。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

77は底部から口縁部が内弯して開き、端部はわずかに外反する。器壁は厚い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

78は壺の肩部の破片である。内外面とも回転ナデで、外面にヘラで斜格子文を描く。色調は灰色である。

79・80は底部の小破片で、削り出し高台である。79は灰オリーブ色の釉薬を厚く施す。越州窯産である。80は透明釉を施し、にぶい白色を呈する。

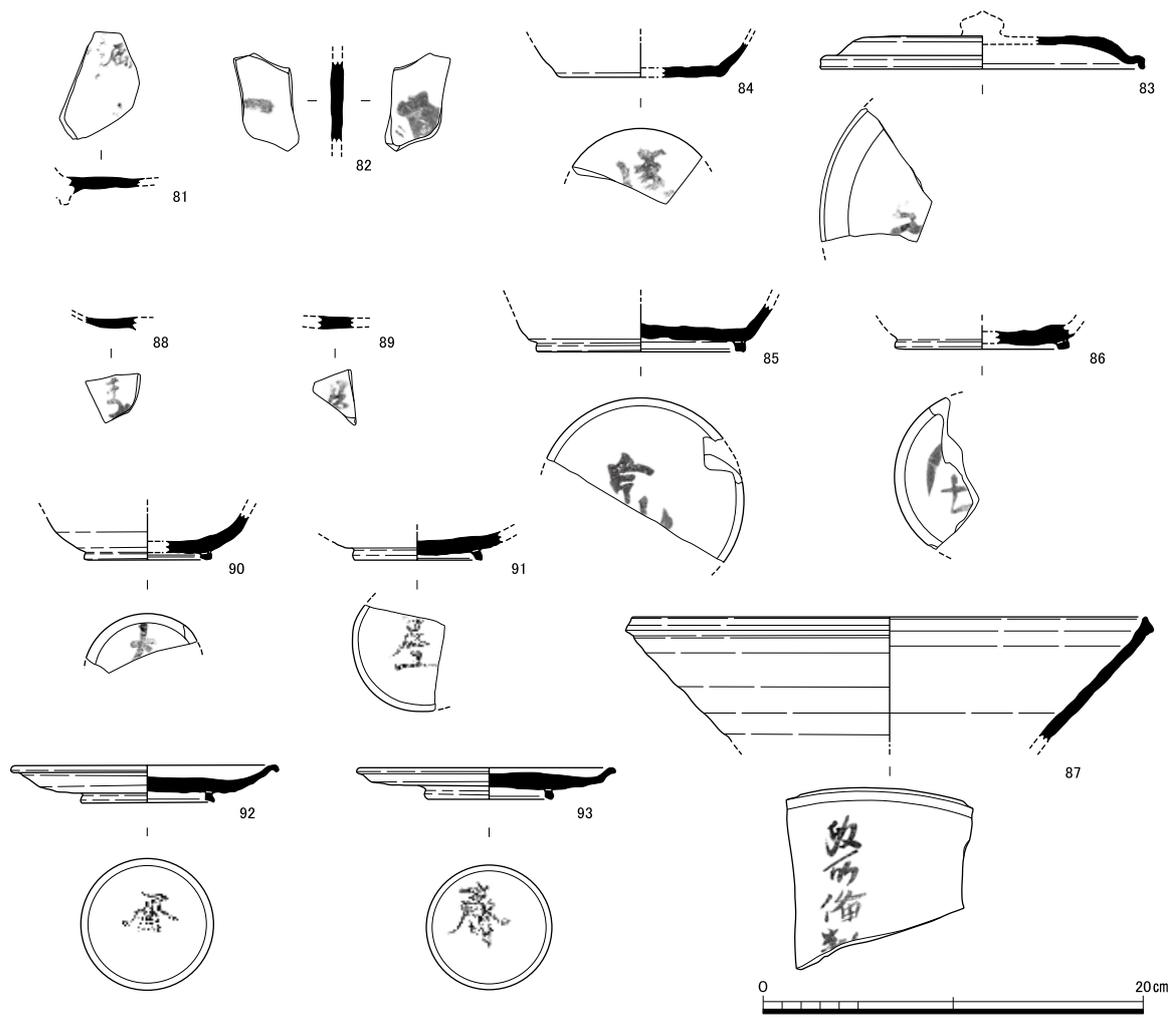
京都Ⅳ期新段階からⅤ期古段階に属する。79は京都Ⅰ期からⅡ期の混入品である。

墨書土器（巻頭図版2、図34 81～93） ここでは墨書土器をまとめて紹介する。墨書土器には、土師器杯（81）、須恵器杯蓋（83）・杯身（84～86）・鉢（87）、灰釉陶器碗（90）・皿（91～93）・碗皿類小片（88・89）がある。

出土遺構は、溝80A（84・86・91・92・93）、溝810（90）、溝831（82）、溝832（83・87）、流路630（85）、遺構検出中（81・88・89）で、いずれも建物2周辺から溝80Bにかけての区域より出土している。

判読できた文字には、邸宅内の建物の配置や機能を推測できる資料があり、その評価については第5章でまとめることとする。また、吉野秋二氏よりいただいた玉稿を付章2に掲載する。

転用硯（図版34 94） 溝80A・溝90を中心に須恵器杯蓋を転用した硯が多数出土した。天井部内面を使用しており、墨痕が残りものや使用により平滑になっているものも多い。



□	86	□	[泉力] 85	□	84	□	83	内面	外面	82	□	81	墨書 积文
□	十一							□	□				
齋	93	齋	92	屋	91	□	90	□	[屋力] 89	□	88	政所備	87
												□	[料力]

図34 墨書土器画像・実測図（1：4）、积文

漆が付着した土器（図版34 95）溝80 A・溝90を中心に出土した。溝80 Aから出土した土師器碗（36）を図示したが、他にも破片が多数出土している。

鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代から室町時代の土器・陶磁器は、主に耕作溝・耕作土から出土した。土師器皿・小型釜、瓦器鍋・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器壺・甕、施釉陶器大鉢・壺、中国製白磁皿・碗・壺、青磁皿・碗、青白磁皿・合子、褐釉陶器壺、緑釉陶器盤がある。ほとんどが小片のため図示していない。

土師器皿は大部分が京都Ⅶ期からⅧ期に属するもので、わずかにⅨ期のものが含まれる。須恵器は鉢・甕とも東播産、焼締陶器壺は備前産、焼締陶器甕には常滑産・信楽産・備前産がある。施釉陶器は大鉢・壺とも瀬戸産で、大鉢は灰釉、壺は灰釉や鉄釉を施す。

江戸時代

江戸時代の土器・陶磁器は、耕作溝・耕作土及び機械掘削後の遺構検出中に出土した。土師器炮烙、焼締陶器搗鉢、施釉陶器碗・皿・鉢・土瓶・蓋・甕、肥前産磁器皿・蓋などがある。いずれも小片のため図示していない。

（3）瓦（図版35、図35～38）

瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。ほぼすべてが平安時代前期に属し、以降の時期のものは極少量である。平安時代前期の遺構から出土した軒丸瓦・軒平瓦はいずれも平安京に先行する都城に類例があるものである³⁴⁾。

軒丸瓦（図35・36 瓦1～17）9種を確認した。瓦1は単弁8弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+4。連弁・間弁とも高く盛り上がる。外区に珠文、さらに外側に唐草文がめぐり、瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、多量の粘土を付加して包み込むように接合する。瓦当側面はケズリののちナデ、瓦当裏面は接合による指ナデである。丸瓦部凸面は縄目タタキののちケズリ、凹面は布目である。胎土は砂粒を少量含む。灰色で焼成は良好。大安寺6091型式³⁵⁾。遺構検出中に出土した。

瓦2は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は欠損するが、同范例から1+6と推定できる。子葉や間弁は中央で高く盛り上がる。間弁は楔状で弁端がわずかに分岐する。外区に珠文がめぐり、外区外縁は高い傾斜縁で線鋸歯文がめぐり、瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。瓦当側面上半は縄目タタキののちタテ方向のケズリ、下半はヨコ方向のケズリ、瓦当裏面はヨコ方向のナデである。丸瓦部凸面は縄目タタキののちナデ、凹面は布目ののちナデ、側面はケズリである。胎土は砂粒を少量含む。表面黒灰色、断面灰色で焼成は良好。平城宮跡6311 A型式³⁶⁾。遺構検出中に出土した。

瓦3は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は一部が欠損するが、同范例から1+5+9と推定できる。子葉は小ぶり、間弁は楔状で弁端が分岐する。外区は欠損する。瓦当部裏面上部を少しくぼめて、丸瓦をあてて接合する。瓦当裏面はナデである。胎土は砂粒を少量含む。灰白色で焼成は良好。藤原宮跡6273型式³⁷⁾。遺構検出中に出土した。

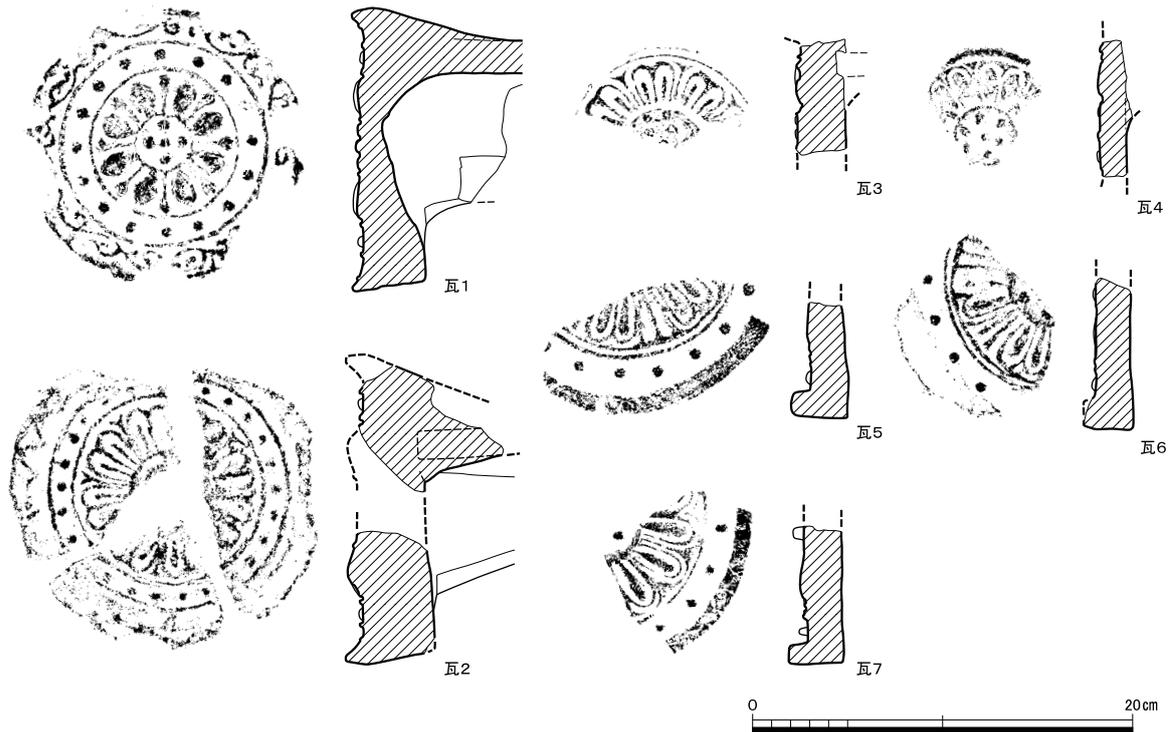


図35 瓦拓影・実測図1 (1 : 4)

瓦4は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。小破片のため型式の特定ができていない。瓦当裏面はナデである。蓮子は1 + 6。胎土は砂粒を少量含む。表面黒灰色、断面灰色で焼成は良好。畦806から出土した混入品である。

瓦5は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。小破片のため型式の特定ができていない。蓮子は欠損する。子葉は大きく、間弁は左右に開き、蓮弁端に接する。外区には珠文がめぐる。外縁は高い。瓦当側面はヨコ方向のナデ、瓦当裏面はナデである。胎土は砂粒を少量含む。表面黒灰色、断面灰色で焼成は良好。耕作溝から出土した混入品である。

瓦6は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。小破片のため型式の特定ができていない。蓮子は一部が欠損する。子葉は大きく、間弁は直線的に延びる。外区には珠文がめぐる。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。瓦当側面はヨコ方向のナデ、瓦当裏面はナデである。胎土は砂粒を少量含む。淡橙色で焼成は良好。建物5古柱穴986から出土した。

瓦7は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は高く、一部が欠損するが、同范例から1 + 6と推定できる。蓮弁は独立しており、子葉は大きい。外区に大きな珠文がめぐり、外縁は高い。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。瓦当側面、瓦当裏面はナデである。胎土は砂粒を少量含む。灰色で焼成は良好。溝(水路)801から出土した混入品である。

瓦8・9は同型式の単弁21弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は一部が欠損するが、同范例から1 + 8と推定できる。蓮弁は葉研状で弁端は鋭角的である。外区には珠文がめぐる。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。瓦当側面はヨコ方向のナデ、瓦当裏面は不定方向のケズリ・ナデである。胎土は砂粒を少量含む。表面黒灰色、断面灰色で焼成は良好。長岡宮式7171型

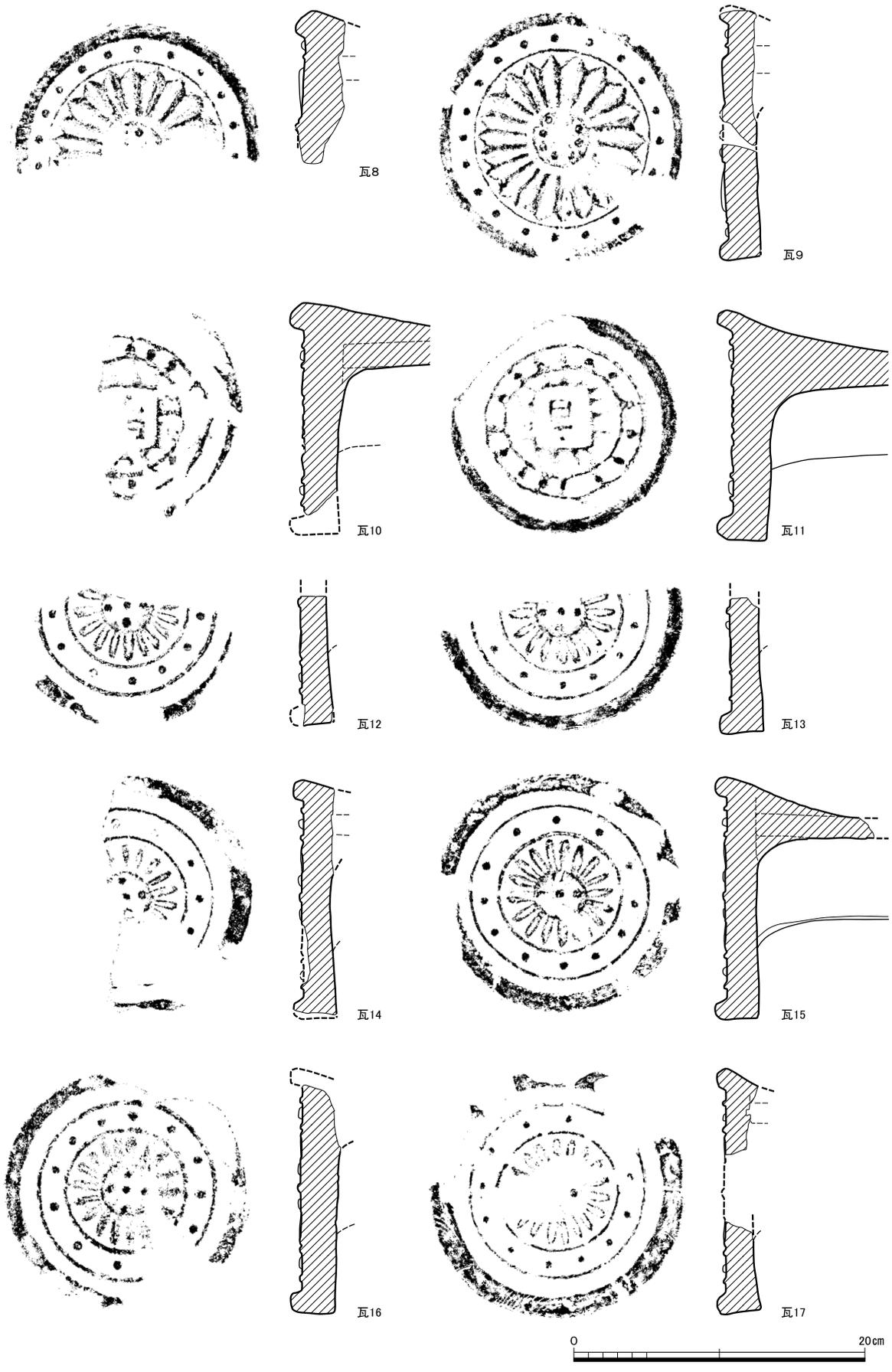


图36 瓦拓影·实测图2 (1 : 4)

³⁸⁾式。瓦8は耕作溝から出土した混入品、瓦9は建物5西側の整地土から出土した。

瓦10・11は同型式の軒丸瓦で、「旨」銘をもつ特徴的な瓦である。瓦当中央を長方形に区画して「旨」の異体字を表出する。瓦11では文字が倒立している。蓮弁は15弁で不揃いである。外区に珠文がめぐると、圈線と癒着する。全体に文様があまい。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。表面の摩滅により調整は不明瞭であるが、瓦当側面はケズリののちナデ、瓦当裏面は縦方向のナデである。丸瓦部凸面は縄目タタキののちケズリ、凹面は布目で、側面はケズリである。胎土は砂粒を少量含む。淡黄色で焼成は不良。「旨」の文字を記すことから天皇のための物資調達にあたった勅旨所との関係が注目されている。³⁹⁾長岡宮7193B型式。瓦10は建物4柱穴757、瓦11は建物5古柱穴938Bから出土した。

瓦12～17は同型式の単弁18弁蓮華文軒丸瓦で、瓦17はやや大きい。蓮子は1+4。蓮弁は子葉がなく菊花状である。外区には珠文がめぐると、瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合するが、接合が弱いため分離するものが多い。瓦当側面はヨコ方向のナデ、裏面は不定方向のナデである。丸瓦部凸面は縄目タタキののちケズリ、凹面は布目で、側面はケズリである。胎土は砂粒を少量含む。灰白色からで焼成はやや不良。乙訓寺OM-13型式。⁴⁰⁾瓦12は遺構検出中、瓦13は建物5に重複する耕作溝、瓦14・瓦17は建物5新柱穴924、瓦15は建物5新柱穴892、瓦16は溝80Bから出土した。

軒平瓦(図37 瓦18～22) 4種を確認した。瓦18・19は同型式の均整唐草文軒平瓦である。唐草の主葉・子葉は強く巻き込む。外区には珠文が密にめぐると、曲線顎。顎部凸面・裏面はヨコ方向のナデ、側面はケズリである。平瓦部凸面はナデ、凹面は布目である。胎土は砂粒を少量含む。表面は黒灰色・灰色、断面は灰白色で焼成はやや不良。平城宮6721型式。⁴¹⁾瓦18は流路630、瓦19は溝80Bから出土した。

瓦20は唐草文軒平瓦である。小破片のため型式の特定ができていない。外区には珠文がめぐると、曲線顎。胎土は砂粒を少量含む。灰色で焼成はやや不良。溝80Bから出土した。

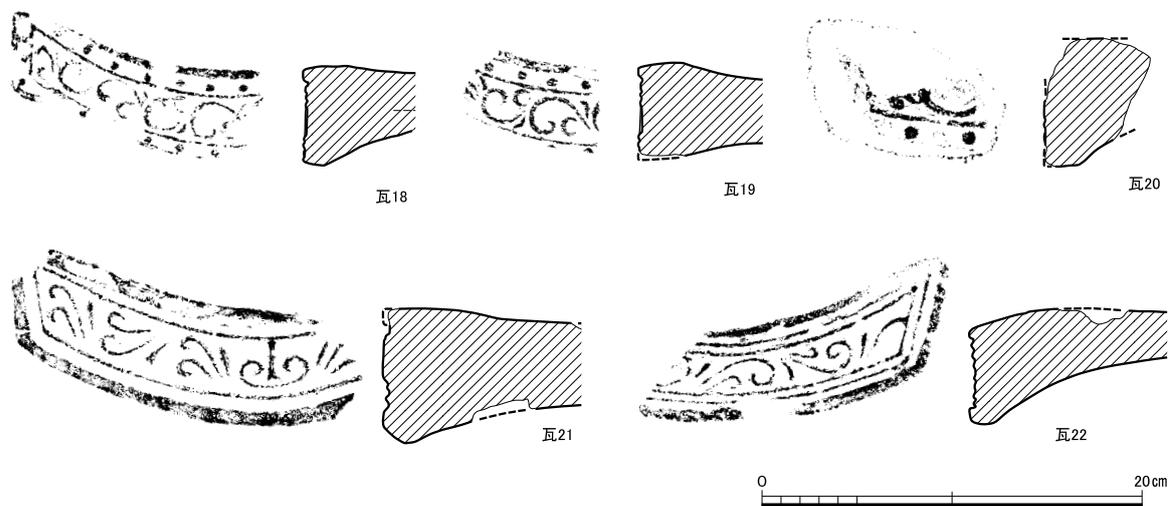


図37 瓦拓影・実測図3 (1:4)

瓦21は均整唐草文軒丸瓦である。中心飾りは巻き込みが強い上向きのC字文の中央に太い縦線状の花頭形を配する。唐草文は界線から分離して3転する。直線顎に近い曲線顎。顎部凸面・側面・凹面はケズリである。平瓦部凸面は縄目タタキ、凹面は布目である。胎土は砂粒を少量含む。灰色で焼成はやや不良。平城宮6702型式。建物1古柱穴720から出土した。

瓦22は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは欠損するが、同范例から上向きのC字文の中央に花頭形を配すると推定できる。唐草は3転する。曲線顎。表面の剥離により調整は不明な部分が多いが、顎部裏面はナデ、平瓦部凸面は縄目タタキである。平城宮6663⁴²⁾型式。建物5西側の整地土から出土した。

丸瓦(図38 瓦23) 玉縁を含む一部を欠損するが、ほぼ完形に復元できる。凸面は縄目タタキのちタテ方向のナデで、玉縁近くはヨコ方向のナデ、凹面は布目で小口側をケズリ、側面はケズリ、小口面はナデである。胎土は砂粒を少量含む。灰色で焼成はやや不良。建物5新柱穴996から出土しており、柱の根固めに使用されていた。

平瓦(図38 瓦24) 一部を欠損するが、ほぼ完形に復元できる。凸面は縄目タタキ、凹面は布目で、側面・小口面はケズリである。胎土は砂粒を少量含む。灰色で焼成はやや不良。建物4柱穴758から出土しており、柱の根固めに使用されていた。

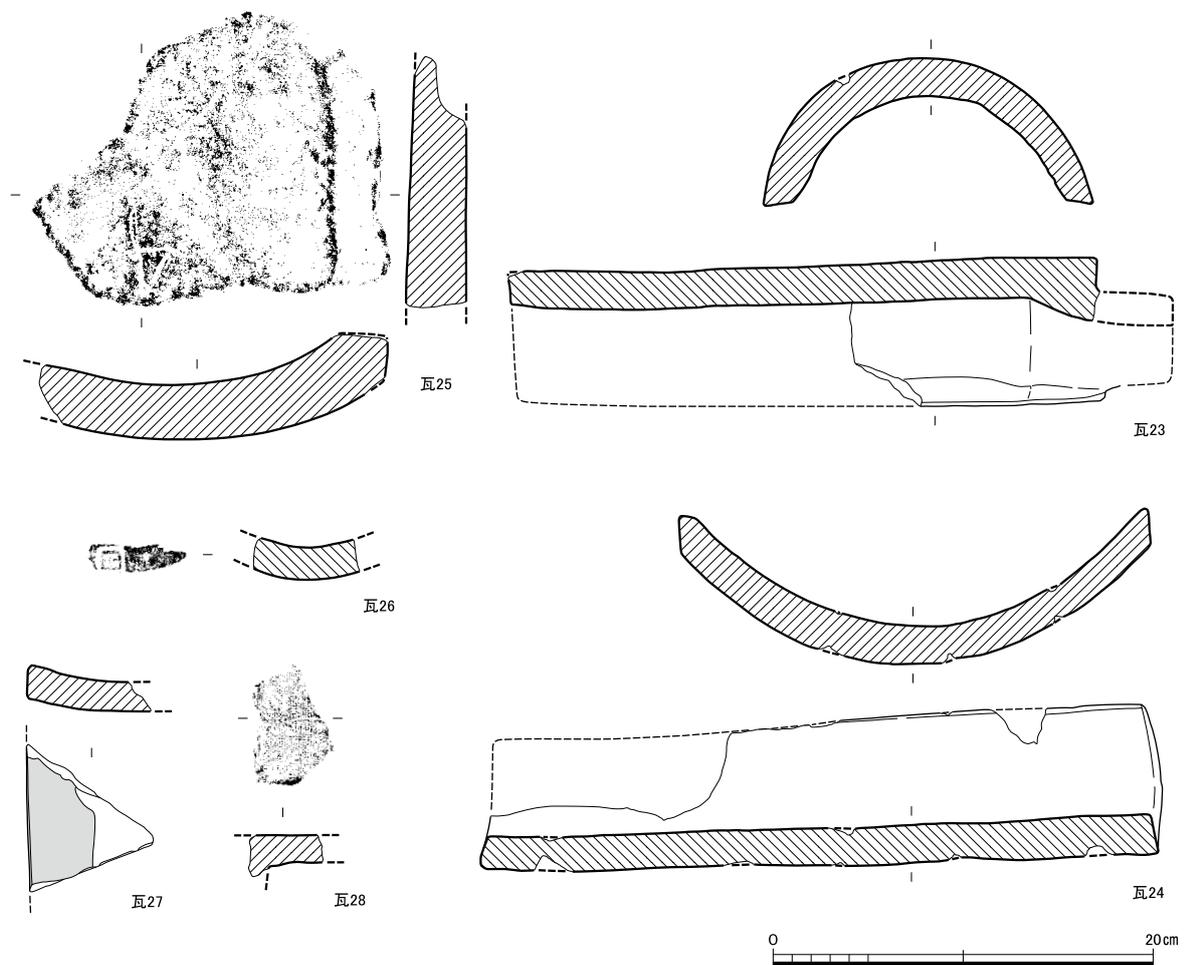


図38 瓦拓影・実測図4 (1:4)

ヘラ記号(図38 瓦25・28) 瓦25は平瓦の破片である。分厚い。表面が摩滅しているため詳細は不明瞭であるが、凸面は縄目タタキののちナデ、凹面は布目である。胎土は砂粒を中量含む。灰白色で焼成はやや不良。凹面に「4」字状のヘラ記号がある。遺構検出中に出土した。

瓦28は軒平瓦の平瓦部分の破片である。瓦当は欠損しているが、類例から折り曲げ技法で成形されていたと推定できる。凸面はナデ、凹面は布目である。胎土は砂粒を中量含む。灰白色で焼成は良好。凹面に「V」字形のヘラ記号がある。山城産。遺構検出中に出土した。平安時代後期に属する。

刻印(図38 瓦26) 丸瓦の破片である。凸面はナデ、凹面は布目で小口側をケズリ、小口面はナデである。胎土は砂粒を少量含む。灰白色で焼成はやや不良。小口面に刻印による「田」字形の陽刻がある。平城宮跡出土瓦に類例がある⁴³⁾。溝810から出土した。

赤彩のある瓦(図38 瓦27) 平瓦の破片である。凸面はナデ、凹面は布目、側面はケズリで、角部を面取りする。胎土は砂粒を少量含む。灰色で焼成は非常に良好。凸面の側面側ににぶい赤褐色の赤彩が残る。建物1新柱穴709から出土した。

椀瓦 小破片が機械掘削後の遺構検出中に出土した。凸面・凹面はミガキで、表面に炭素を吸着させる。島津製作所工場に使用されていたものであろう。大正年間以降に属する。

(4) 木製品(図版36・37、図39・40)

木製品には柱根・礎板・加工材・檜皮・付木・木製塔婆などがある。柱根などの建築部材は建物の柱穴、これら以外は溝・土坑から出土した。

柱根(図版36 木1～5) 建物2と建物5新の一部の柱穴に柱根が残されていた。建物2では柱穴103(木2)・柱穴104・柱穴105・柱穴789・柱穴790(木1)・柱穴792・柱穴793(木3)から出土した。全体に腐朽が進んでおり、上部が先細りしたり、断片化している。底面に切断痕がみられるもの(木1)があるが、側面はいずれも丸太材のままで顕著な加工痕は観察できない。大きさは木1が残存長31cm、最大径14.5cm、木2が残存長31cm、最大径11cm、木3が残存長29cm、最大径10cmである。樹種はいずれもヒノキまたはヒノキ属である。平安時代前期に属する。

建物5新では柱穴913(木4)・柱穴916A・柱穴962A(木5)から出土した。全体に腐朽が進んでおり、上部は先細りしている。底部は手斧により平坦に加工し、側面は八角形に粗く面取りする。また、木5には大きな割り込みがあることから、搬送時に穿たれた柄穴の痕跡と考えられる。大きさは木4が残存長37cm、最大径27cm、木5が残存長45cm、最大径28cmである。樹種はいずれもヒノキ属である。平安時代前期に属する。

礎板(図版37 木6～11) 建物1新・建物5古・建物5新の一部の柱穴に礎板が残されていた。建物1新では柱穴692(木10・11)・柱穴694(木9)、建物5古では柱穴874(木7・8)・柱穴880・柱穴903・柱穴991B(木6)・柱穴995B・柱穴1000、建物5新では柱穴900A・柱穴907・柱穴991A・柱穴1002から出土した。

大部分は不整形な板状で、木6は一端を圭頭状に加工する。全体に腐朽が進んでおり加工痕は不

明瞭である。木8・9は小口端部を切り落としてヘラ先状に加工する。また、木7は柄穴の痕跡とみられる割り込みがある。大きさは木10が残存長17.5cm、幅8.5cm、厚さ3cm、木7が残存長40.5cm、幅18.5cm、厚さ4.5cmである。樹種にはヒノキ属・コウヤマキがある。すべて平安時代前期に属する。

加工材 建物1古・1新、建物5古・5新の柱穴からは、礎板以外にも加工痕のある木材片が出土した。不整形な角柱状のもの、丸木材や角材を割ったような形状のものがあり、表面の一部には手斧による加工痕が観察できる。大きさは短辺が2～4cm、長辺が4～15cm程度である。柱あるいは礎板を加工した際の端材が柱穴内に残されたものとする。樹種にはヒノキ属・コウヤマキ・モミ属がある。すべて平安時代前期に属する。

檜皮 (図39 木12) ヒノキの樹皮の小片である。本来の形状は失われているが、5点を確認しており、2点は小口を切り揃えている。大きさは最大の破片で長さ4.9cm、幅0.8cm、厚さ0.5mm程度である。屋根の葺材である檜皮の破片と考えている。建物1新の柱穴713Aから出土した。平安時代前期に属する。

付木 木片を粗く割った細長い棒状の製品で、一端が炭化して焦げていることから火種として使用したことがわかる。4点が出土した。大きさは残存長9～21cm、幅0.5～1.0cmである。溝80B・流路630及び畦806から出土した。前者は樹種はヒノキで、平安時代前期、後者は樹種はサクラで、室町時代に属する。

木製塔婆 (図40 木13) 細長い板の上端部及び長側面両側に欠き込みを加工することで、五輪塔を表現する。表面の加工は割ったのみで、下端部の仕上げはやや粗い。完形で、大きさは長さ34.3cm・幅3.1cm・厚さ0.4cmである。片面に「南無妙法蓮□□」の墨書があり、題目を記していたことがわかる。「無」と「妙」の間隔は他の字間よりも広い。樹種はスギである。畦806掘り込んだ土坑底部から出土した。室町時代に属する。



図39 檜皮 (木12)

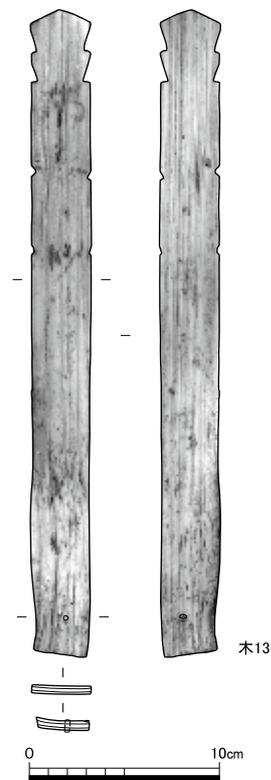


図40 木製塔婆画像・実測図 (1:4)

(5) その他の出土遺物

その他の出土遺物には土製品の埴輪・土馬・ふいご・土人形、石製品の砥石・石鍋、動植物遺体などがある。

円筒埴輪 (図41 土1) 体部の破片で、タガが1条めぐり。外面はタテ方向の粗いハケ、内面はヨコ方向のハケである。タガは指先でつまみながら圧着させる。焼成は須恵質で、表面は摩滅している。溝(流路)807から出土した。古墳時代後期に属する混入品である。

土馬 (図41 土2) 胴体から脚の破片である。頭部・尾部・脚先はすべて欠損する。表面には指オサエの痕が付く。流路630から出土した。平安時代前期に属する。

ふいご 羽口の破片が耕作溝から出土した。室町時代に属する。

土人形 小破片が機械掘削後の遺構検出中に出土した。江戸時代に属する。

窯業製品 レンガ・窯道具・タイルなどが機械掘削後の遺構検出中に出土した。レンガには刻印や胎土から「高山耕山」「品川白煉瓦」の製品がある。いずれも島津製作所工場に使用されていたもので、大正年間以降に属する。

砥石 小破片が溝799から出土した。石材は粘板岩である。平安時代前期に属する。

石鍋 小破片が機械掘削後の遺構検出中に出土した。石材は滑石である。室町時代に属する。

動物遺体 ウマの歯が溝(流路)801から出土した。平安時代中期に属する。また、シジミの貝殻が耕作溝・耕作土から出土した。室町時代以降に属する。

植物遺体 付章1にて詳述する。ただし、ほかにモモの種子が溝80B・溝810から出土した。平安時代前期に属する。また、ヒョウタンの果皮が土坑985から出土した。小破片に破損しているが、外面は平滑で光沢をもち、内面には葉脈がのこる。容器などの製品の可能性がある。平安時代前期に属する。

炭片 各時代の遺構・包含層から出土した。溝80B・C・Dからの出土が多い。細片が多く樹種の同定は実施していない。

赤色顔料 建物5柱穴990から埋土に混じった状態で出土した。分析の結果ベンガラであることが判明した。柱根に付着していたベンガラが混じり込んだと考える。

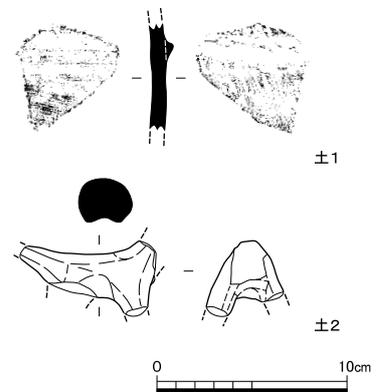


図41 土製品実測図(1:4)

5. まとめ

今回の調査では、平安京右京三条三坊五町の邸宅について、非常に多くの知見を得ることができた。

平安京造営前 調査で検出した最も古い遺構は、古墳時代から飛鳥時代の遺物が出土した流路630・落込み987である。姉小路路面下層でも平安京造営前の別の流路の痕跡を確認した。この時期の他の遺構は飛鳥時代の土坑811のみである。調査地周辺では、これまでの調査でも弥生時代から飛鳥時代の流路を検出しているものの住居などの遺構は見つかっていないことから、調査地付近が西ノ京遺跡の居住域からは離れた位置にあったことが推察できる。

流路630は調査区内を北東から南西方向に向けて流れるが、平安京造営段階には大部分が埋没していたようである。宅地の開発にあたっては浅く窪んでいた上層部分をブロック土で埋め立てて整地が施工された。瓦片の多くもこの時に混入されたものであろう。また、建物1・建物5はそれぞれ流路630に南岸・北岸に位置しており、建物は流路630を避けて建築位置が決定されたと考えられる。流路630最上層の埋土は、建物の造営後も湿地状の環境にあったことを示しており、流路630の上層に位置する北東部で検出した溝810は平面形・断面形が不整形であることから流路630が影響を与えた遺構であったと考えられる。

大型建物 今回の調査で検出した建物1新、建物1古は、平安京域でも最大級の建物である。また、建物5新、建物5古もこれに準じる大型建物である。これらの建物については、3時期の変遷が明らかとなった。最初は、のちの建物1の位置に建物4、のちの建物5の位置に建物6が建てられた。ともに庇をもたない比較的小型の建物である。それぞれの建物の機能は不明であるが、この段階で五町に邸宅が造営されていたとしても、規模からみて主要な建物ではなかったと推定できる。

次の段階に建物1古・建物5古が南北に並んで建てられた。2棟は中心軸がそろっていることから一組で使用されたことがわかる。建物5古の南庇柱列と建物1古の身舎北柱列の距離は、約13.8mで、おおよそ46尺となる。建物5の南西側で検出した東西方向の柱列1は、建物5新の位置に近すぎるので、建物5古に伴う塀か柵であったと考えられる。

建物5古の周囲には建築用足場穴の可能性のある柱穴列を検出した。建物1古の周囲にも同じ規模の柱穴が分布しており、同様の足場穴であった可能性がある。平安時代前期の建物建設の施工法を検討するうえで重要な発見である。

建物5古・建物1古の柱穴の中には、柱あたりや抜き取り穴が全く観察できないものがある。ブロック土が水平に堆積している状況の柱穴もある。

建物1古・建物5古を建て替えたものが建物1新・建物5新である。建物5新は、ちょうど柱間1間分南へ移動しての建て替えである。規模が同じであることから建築部材を再利用した可能性がある。一方、建物1新は、ほぼ同じ位置であるが、東西幅や庇の出を広げたことから床面積は増大した。建て替え後も中心軸が揃っていることから2棟一組で使用された状況は共通する。建物5

新の南庇柱列と建物1新の身舎北柱列の距離は約12mで、40尺となり、ここにも企画性が認められる。

建物1新の周囲には方形の溝がめぐる。雨落溝であったとすると軒先は柱筋から約1.2～1.3m張り出していたこととなる。建物1新の柱穴717からは、完形の土師器甕が出土した。また、建物5東側には完形の土師器椀が出土した土坑857、建物1の南側には独立した柱穴778があり、これらは建物の祭祀に関わる遺構であった可能性がある。

建物1新・建物5新の柱穴の多くには抜き取り穴があるので、更なる移築が行われたことがわかる。抜き取り穴の上面には河原石を意図的に置いた柱穴があり、この行為も何らかの祭祀であった可能性がある。建物5新の3基の柱穴には柱根が残されていたが、これらは再利用がかなわなかった部材であろう。

このように南北に並ぶ建物1・建物5が見つかったことから、五町の北西部に2棟の大型建物からなる区画があったこと、それらが短期間のうちに建て替えられたことが明らかとなった。

区画施設 建物2・建物3は溝80Bの東側に位置する。建物2は建物1・建物5と比較すると規模が小さいが、平安京全体でみると中・小規模宅地では主屋となるような建物である。次項に述べるように北側から「政所」の墨書が出土していることから、建物2が「政所」であった可能性がある。そうであれば、邸宅の生活を支える中枢施設であったことになる。

建物3は総柱建物で、柱穴掘形に石を詰め、さらにその石が地山にめり込んでいることから重量物を収納した倉庫であった可能性が高い。しかしながら、柱穴掘形の大きさに比べて深さが非常に浅いことに特徴がある。建物3の周囲は、調査区の中でも平安時代の遺物包含層が残っている部分で、後世の耕作により削平されたとは考え難い。また、礎石を据えた明瞭な痕跡も認めることはできない。建物の構造の復元は今後の課題としたいが、あるいは河原石の上に土台となる材を組んで柱を立てた構造も候補としたい。

「政所」・倉庫があり、これも次項に述べるが、厨房や工房の機能も合わせ持っていることから、溝80Bの東側は邸宅の生活を支える施設が集まる家政機関の区画であったと判断できる。

溝80Bは南に傾斜することから排水機能も持っていたが、建物3を囲むように屈曲することから、区画としての機能がより重視されていたことがわかる。なお、溝80Bに接続する東西溝210、さらにこれに接続する南北溝547は大きく建物1・建物5の南側・西側を囲んでおり、建物の周辺の水を集めて溝547により調査区外南西側へ排水する機能を持っていたと考えられる。溝80Bに平行する南北溝184・溝153は、これに接続する東西溝202・溝294とともに排水機能を補完していた可能性がある。

溝547の西側には顕著な遺構が見られないことから、空地として放置されていたようである。コ字形の溝549・土坑766は評価しがたい遺構である。流路化した溝631は流路630の痕跡を利用して、この部分から調査区外西側へ排水する機能を持っていたと考えられる。土坑484をはじめとする土坑群は土取り穴の可能性もある。馬代小路に近い位置にまばらな南北方向の柱穴列3があるが、少なくとも五町北西部では馬代小路からの進入経路は確認することができない。

出土遺物の特徴 溝80Bを境として出土遺物の傾向も明瞭に異なる。溝80B西側では、瓦の割合が多いのに対して土器・陶器類は非常に少ない。また、ほとんどが細片で製品をまとめて廃棄した状況はうかがえない。瓦の多くは平瓦・丸瓦の小破片である。建物の規模に比して出土した瓦の量が少ないことから、瓦葺屋根であったとは考えられない。ごく少量ではあるが、建物1新の柱穴から檜皮片が出土したことから、檜皮葺で屋根の大棟にのみ瓦を使用する薨棟の屋根を想定できる。軒丸瓦・軒平瓦は、いずれも平安京に先行する都城に類例があるもので、平安京造営後に製作されたものは含まない。中でも長岡京で使用された瓦が多数出土していることから、建物は屋根に葺かれた瓦とともに長岡京から移築されてきた可能性がある。特に「旨」銘のある軒丸瓦の存在は、邸宅の居住者が天皇家と極めて近い関係にあったこともうかがわせる。

溝80B東側では土器・陶器類がまとまって出土した。溝80A・溝90では土器・陶器類を一括して廃棄した状況を認めた。椀・皿などの食器が多くを占める中で、調理具の須恵器鉢や煮沸具の土師器甕なども多く、邸宅内の厨房に関わる遺物であった可能性が高い。溝80B東側の建物で食事の支度が行われ、大型建物へ運ばれた様子を想像できる。陶器類の中には、当時的高级品であった猿投産の灰釉陶器、岩倉産・猿投産の緑釉陶器が一定の割合を占めている。これらは成形が丁寧で釉薬の発色が良い優品である。灰釉陶器の陶硯や緑釉陶器唾壺など平安京域でも出土例が少ない遺物があり、邸宅の居住者がこれらの製品を所持することができた富裕な立場にあったことを示している。

一方、須恵器杯蓋を転用した硯が出土していることから、頻繁に書き物が行われたこと、漆が付着した土器が出土していることから、工房に類する施設があったことも推定でき、邸宅の運営に関わる様々な作業が行われていたことが明らかとなった。

また、土器・陶器類の中に13点の墨書土器が含まれていたことも大きな発見である。付章2にて吉野秋二氏が詳論されているように、「政所」の文字から溝80Bの東側に家政機関があったこと、「齋」の文字から、邸宅の居住者が齋宮・齋王であった可能性が推測できたことは、貴重な成果となった。

右京三条三坊五町の邸宅の構造 (図42) 今回の調査は、平安京左京三条三坊五町では3回目の発掘調査となる。付章3で紹介するように、東側の調査では建物、柵、姉小路南築地内溝、東西方向の溝などの遺構を検出した。今回の調査で検出した建物2・溝810・溝90・溝80Aはこれらと連続する遺構であり、2つの調査の結びつきが明らかとなった。また、南東側の調査では、大型建物2棟からなる区画があることが判明している。

3回の発掘調査成果を合わせると、五町に営まれた邸宅は、1町の北東部に家政機関、北西部と南西部の2箇所大型建物からなる区画を配置する構造であることが判明した。2箇所の大型建物の区画を1箇所の家政機関で運営する合理的な建物配置といえよう。

北西部の大型建物と南東部の大型建物を別の宅地として、五町を南北に分割する2分の1町規模の宅地利用を想定する意見があるかもしれないが、見つかった建物が平安京域でも最大級の建物であり、2分の1町規模の邸宅には似つかわしくないこと、未調査の南西部は五町内で最も低い

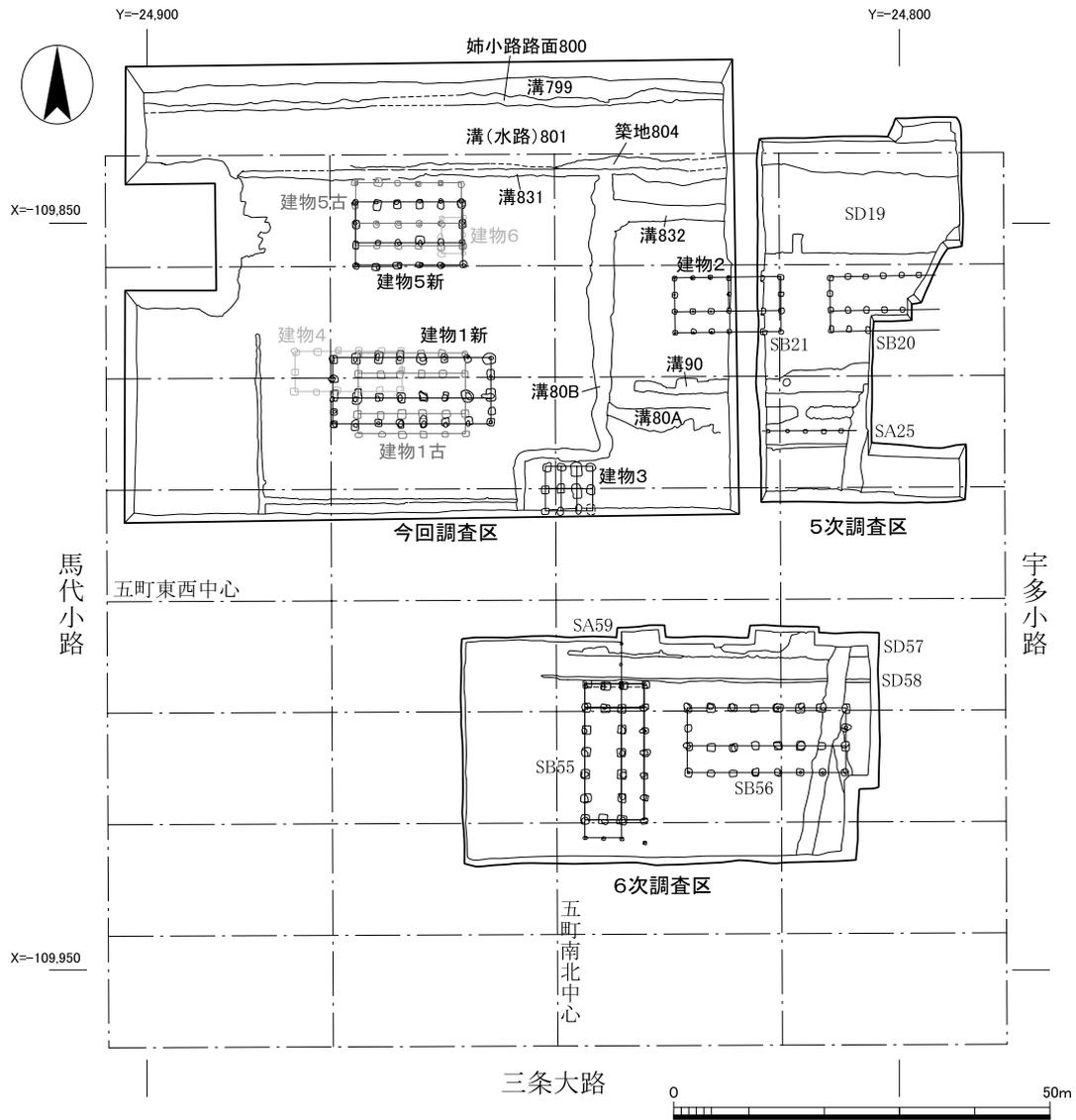


図42 右京三条三坊五町遺構概要図（1：1,000）

位置にあって敷地内の排水が集まることから、未発見の多数の建物があったとは考え難いことなどの理由から、やはり五町は1町規模の邸宅であったと判断する。1町内に2箇所的大型建物の区画を備えた邸宅は平安京域では初めての発見である。なお、東に隣接する四町でも3棟の大型建物が1町の北西部に位置することから、類似する構造であったことも考えられる。

姉小路の変遷 姉小路部分は平安京の条坊復原にほぼ一致する位置で検出した。調査区北端に北側溝である溝799と路面800の一部が残るのみで、大部分は東西方向の大規模な溝（水路）801・溝（水路）807となる。溝799南側も浸食され、姉小路の路面幅は1～2mに減じてしまう。条坊制の設計から見れば、隘路といってよい状況ではあるが、それでも人が歩いて通行できる道幅が維持されたことを評価したい。

調査地周辺では西堀川が埋没した後、野寺小路・道祖大路・宇多小路で路面に掘削された南北方向の大規模な溝（水路）が見つかっており、今回の姉小路の状況は東西方向の街路でも同様の掘削が行われたことが判明した。周辺地の排水や洪水対策を目的とした施工と考えられ、平安京右京

域の整備と変容の実態をうかがう貴重な手掛かりとなる。

邸宅の終焉 出土した平安時代の遺物は、大部分が京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属することから、大型建物が営まれた邸宅は、平安時代前期前半＝9世紀前半には廃絶したことがわかる。溝80B最上層からは京都Ⅱ期新段階の土器が出土していることから、溝などの施設もこの頃には埋没したものと考えられる。また、付章2で述べられているように、流路630周辺は湿地状の環境に戻ったようである。

姉小路路面に溝（水路）801が開削されるのは、邸宅が廃絶した頃に合わせたものと推定できる。溝（水路）801は、宅地跡への流入の痕跡はないことから、築地804の高まりは残されており堤防として機能したのかもしれない。溝（水路）801は京都Ⅲ期の土器が出土していることから、平安時代中期には埋没した。代わって南側に溝（水路）807が開削される。溝（水路）807南側には盛土809があり、調査区西部では築地804の南側に延びる。この頃には築地804の高まりが失われていたため、新たに宅地跡への水流を防ぐために造られた堤防状の施設と考えられる。調査区内では平安時代後期の耕作土を確認していないが、盛土809が整備されたことから、この頃には耕作地としての利用が開始されていたのであろう。

溝（水路）807は、平安時代後期には埋没が進み、その後は上部に畦806が形成される。畦806南側には耕作溝群が広がることから、邸宅の跡地が耕作地として利用されたことがわかる。少なくとも室町時代までは維持された大きな畦畔で、姉小路の位置が耕作地となった周辺地の区画となったのである。また、題目を書いた木製塔婆が出土したことから、調査地周辺は集落からは離れた葬送も行われるような土地へと変化したことが明らかとなった。

その後も幾度も紙屋川による氾濫の被害を受けながら継続して耕作は行われ、近代になって島津製作所の工場が建設されることとなる。

註

- 1) 歴史的状況については次の文献を参考にした。京都市編『京都の歴史』学芸書林、1968～1976年。『京都市の地名』平凡社、1979年。『平安京提要』角川書店、1994年など。
- 2) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年。
- 3) 「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1984年。
- 4) 『平安京右京三条二坊十一町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-24』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2007年。
- 5) 「平安京右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1979年。
- 6) 『平安京右京三条二坊十三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-19』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005年。
- 7) 『平安京右京三条二坊十四町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-1』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2006年。

- 8) 「平安京右京三条二坊2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
- 9) 「平安京右京三条二坊十四町跡 島津メディカルプラザ新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内5遺跡』財団法人古代学協会、2009年。
- 10) 「平安京右京三条二坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2000年。
- 11) 『平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-6』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。
- 12) 『平安京右京三条二坊十五町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-8』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年。
- 13) 『平安京右京三条二坊十五町跡・三坊二町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-5』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005年。
- 14) 「平安京右京三条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年。
- 15) 「右京三条二坊(2)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1983年。『平安京右京三条二坊十五・十六町跡-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。
- 16) 『平安京右京三条二坊十五・十六町跡-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。
- 17) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1990年。
- 18) 『平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-23』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年。
- 19) 『平安京右京三条三坊三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-4』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年。
- 20) 註17) に同じ。
- 21) 『平安京右京三条三坊四町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-4』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年。
- 22) 註17) に同じ。
- 23) 「平安京右京三条三坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993年。
- 24) 『平安京右京三条三坊六町・西ノ京遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント、2007年。
- 25) 「平安京右京三条三坊九町跡 島津本社内新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内5遺跡』財団法人古代学協会、2009年。
- 26) 註17) に同じ。
- 27) 「HR-145」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局、1990年。
- 28) 註17) に同じ。
- 29) 「平安京右京四条二坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年。

- 30) 註18) に同じ。
- 31) 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』角川書店 1994年ほか。
- 32) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」を「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」と表記した。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新	古中 新

- 33) 註32) に同じ。
- 34) 『向日市埋蔵文化財調査報告書第20集 長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年
- 35) 『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市教育委員会 1997年
- 36) 奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ』瓦編1 1974年
- 37) 奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅳ』瓦編4 1977年
- 38) 註34) に同じ。
- 39) 岩本崇「長岡京東院の屋瓦とその評価」『長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区』財団法人古代学協会 2002年
- 40) 中尾秀正「乙訓寺の瓦」『向日市埋蔵文化財調査報告書第20集 長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年。
- 41) 奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅸ』瓦編9 1984年
- 42) 註36) に同じ。
- 43) 奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅴ』瓦編5 1977年

付章 1 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、調査区とその周辺での古植生復元を目的に、発掘調査で検出された9世紀～10世紀代を中心とする溝（水路）埋土において花粉分析、種実分析を行ったので、その結果を述べる。

（1）試料

1）試料の採取状況

分析試料は、溝80B、流路630、溝799、溝（水路）801、溝810において採取した。

これらの埋没時期は、溝80Bが10世紀前葉、流路630が古墳時代から9世紀、溝799が9世紀前半、溝（水路）801が10世紀中頃、溝810が9世紀前半である。

分析試料は、上記の溝（水路）埋土から採取している。このうち、溝80B・溝799では、明確な層理面や再侵食面、さらに層相変化が認められず、溝埋土が単一の堆積層で充填される。流路630・溝810は、溝埋土を上層と下層の2層に区分している。流路630では、下層と上層に含まれる遺物について年代差が認められ、上層は9世紀、下層では古墳時代から9世紀の遺物が出土している。溝（水路）801・溝（水路）807については、再侵食面などによっていくかの堆積ユニットに区分される。このうち、分析を行ったのは、北肩部付近に累重する泥層が充填する埋土である。この泥層では層相変化に乏しく、埋土について明瞭な区分を行うことが難しい状況である。

以上の埋土の特徴と出土遺物の時期にもとづくと、今回の分析を行った溝では、年代が古いものから順に羅列すると、古墳時代から9世紀の流路630埋土下層、9世紀前半の溝799埋土、溝810埋土及び9世紀の流路630埋土上層、10世紀前葉の溝80B、10世紀中頃の溝（水路）801埋土となる。以下に各溝の埋没状況の詳細を記載する（図43～66）。

2）溝の埋没状況

溝（水路）801・溝（水路）807（図43・44）

本遺構は、層相と再侵食面から、大きく4つの堆積ユニットに大別される。ここでは、その堆積ユニットについてa～dの名称を与えて記載を行う（図45・46）。溝の北肩部付近には、上部にシルト質粘土～粘土質シルトの非常に泥質な埋土が充填されるユニットa（溝（水路）801）が存在する。分析は、ユニットa上半部の泥層部分から不攪乱柱状サンプルを採取して、最上部、上部、中部、下部の試料を採取した（図47）。泥層については、塊状無層理の層相をなし、明瞭な植物遺体や砂の葉理の挟在が認められない（図49・50のa1）。

ユニットa下半部では、礫混じりの砂層を挟在する。このような粗粒な層準は、a2、a4の2つの層準が確認できる。a2、a4では、ともに泥を多く含む、細礫（2.4mm）と細粒の中礫（4.8



図43 溝（水路）801東側セクション検出状況
（南東から）



図44 溝（水路）801東壁断面（東から）

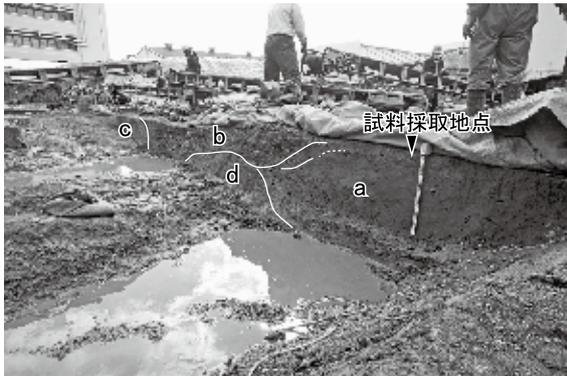


図45 溝（水路）801東壁断面（北東から）



図46 溝（水路）801東壁断面（北東から）



図47 溝（水路）801東壁試料採取地点断面
（東から）



図48 溝（水路）801東壁断面南肩部（東から）

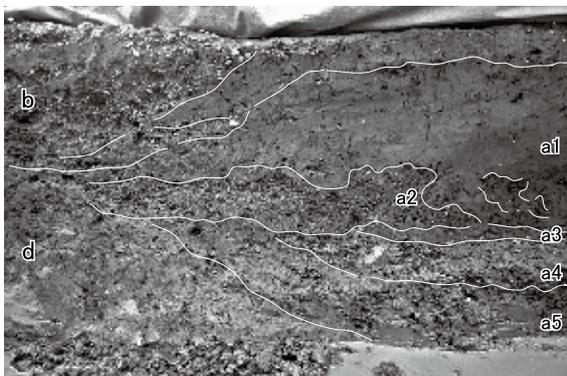


図49 溝（水路）801東壁試料採取地点南肩部付近
（東から）

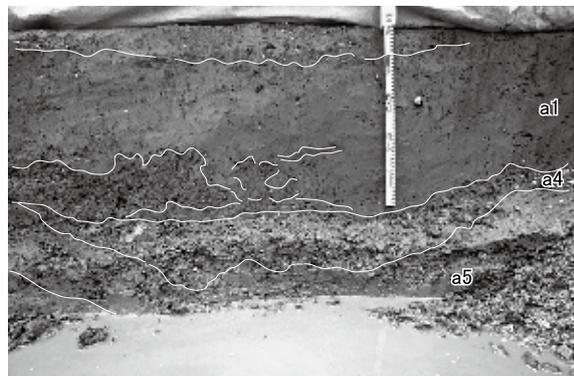


図50 溝（水路）801東壁試料採取地点堆積状況
（東から）



図51 溝799検出状況（西から）

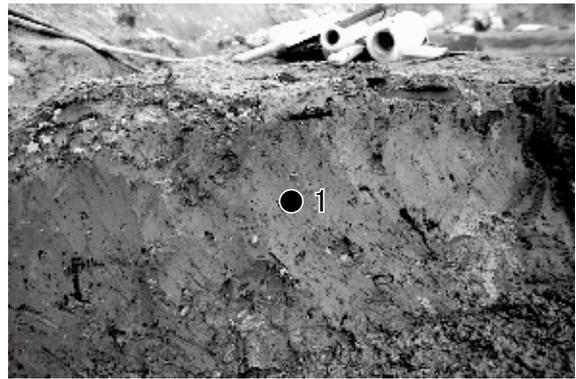


図52 溝799西壁断面（西から）



図53 溝80B検出状況（北から）



図54 溝80B北壁断面（北から）



図55 溝80B北壁試料採取地点断面（北から）



図56 溝80B北壁断面南肩部（北から）



図57 流路630検出状況（南西から）

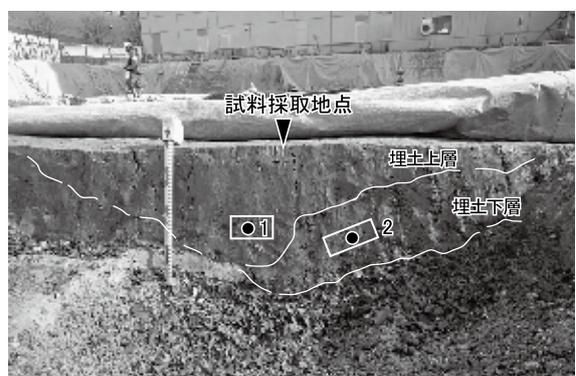


図58 流路630西壁試料採取地点堆積状況（西から）



図59 流路630試料採取層準肩部付近（西から）



図60 流路630北肩部付近（西から）



図61 溝810検出状況（北西から）

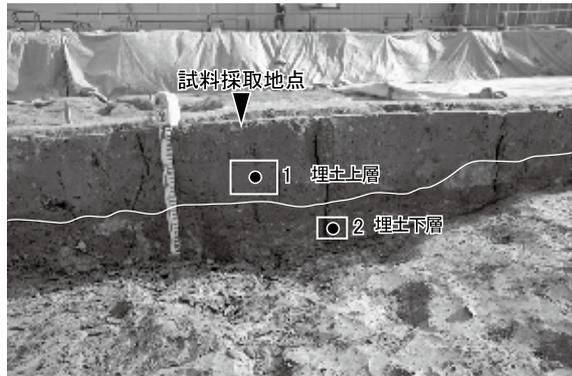


図62 溝810西壁試料採取地点断面（西から）



図63 溝810西壁断面（西から）



図64 溝810西壁試料採取地の北肩部付近（西から）



図65 溝810西壁断面北半部（西から）



図66 溝810西壁断面北肩部付近（西から）

mm) 前後の礫混じりの粗粒砂～極粗粒砂 (1/2～2mm) からなり、淘汰が非常に不良である。a 3 は、これらの粗粒堆積物に挟在する泥の薄層である。そして、ユニット a の溝埋土底部には、砂礫を多く含む砂質粘土質シルトが堆積する。

上記のような層相をふまえると、ユニット a 下半部のうち、粗粒堆積物の a 2、a 4 については、洪水や大雨などによって溝内へ流入したことが想定される。ユニット a 上半部では、粗粒堆積物の流入が認められず、泥質堆積物が連続的に累重する。このような層相変化から、ユニット a 上半部段階に溝内では、浮遊運搬されてきた堆積物が静水域もしくはそれに近い流況で沈降していくような、かなり安定した湿地もしくは浅い滞水域の堆積環境が維持されていたとみなされる。このような状況は、溝周囲などで顕著な地表攪乱が生じていなかったことや、溝の下流側でなんらかの理由で閉塞状況が強まったことなどに関係することが疑われる。ユニット a 上半部の泥層には、腐植質や泥炭質の層相及び植物遺体の挟在が認められないことから、埋没速度が大きかったと推定される。また、ユニット a については、上端部付近まで泥層で充填されていることから、10 世紀中頃に溝 (水路) 801 付近では、地下水位がかなり高い状態であったことも推測される。

ユニット a は、その南肩部を砂礫層で充填されるユニット b (溝 (水路) 807) で侵食される。ユニット b は、細礫～中粒の中礫 (8-16mm) を主体とする礫を多く含む砂礫層である。この砂礫層では、トラフ型斜交葉理が観察される。このことから、砂礫は、溝内へ流入した洪水流によって運搬・堆積した掃流堆積物と判断できる。挟在する泥層や再侵食面などから、砂礫層はさらに細分される可能性が高い。このような特徴は、砂礫がなんどかの土砂流出によって間欠的に累重した可能性を示唆するものである。なお、ユニット b の南肩部は、砂礫と同時異相をなす砂礫混じりの砂質シルトからシルト質砂が堆積している。

ユニット b は、湿地もしくは浅い滞水域の堆積環境下で累重した泥層を一部侵食ないし下刻して形成された凹地内を充填する砂礫である。このことから、溝内の堆積環境は、ユニット b 段階に急速に不安定化したとみなされる。砂礫が間欠的に流入したとみなされることから、この段階の溝 (水路) 807 は、砂礫を移動・運搬させるような流路や規模の大きな水路 (人工的な運河・流路を含む) に接続していたことが疑われる。また、このような流路や水路では、ユニット b 段階に河床が埋積傾向となっていたことも想像される。

ユニット b の南肩部は、泥の偽礫 (ブロック土) からなる客土のユニット c (盛土 809) が存在する。これらの偽礫は、層相や粒度組成さらに色調から、溝の基盤層に由来すると考えられる。ユニット c は、溝肩部付近の一段高くなった平坦面上に載る。このことから、この客土は、いったん地表を掘削して形成された平坦を形成した後に、肩部に充填された人為的堆積物と解釈される。このような充填の様子や砂礫質の溝埋土の南肩部に位置することなどふまえると、上端部が削平されているものの、ユニット c については、溝に対して堤状の高まりを形成していた可能性も想定される。

ユニット a と b の境界付近の溝底部に認められるユニット d は、偽礫含む砂質粘土質シルト層である。偽礫を含むことから、人為的堆積物の可能性がうかがえる。試料採取段階では、十分な観

察を行えず、現段階で本ユニットの検討が不十分な状態となっている。

以上述べてきた溝（水路）801・溝（水路）807の堆積環境変遷については、付近の発掘調査結果などをふまえ、さらに検討を進めていくことが課題と認識される。

ところで、本遺跡の弥生時代から平安時代前後の遺構が検出される基盤層については、深掘トレンチ断面の堆積層の記載と年代測定にもとづく地形学的検討により、放射性炭素年代値で約2.4万年前頃の最終氷期後半に活発な氾濫原の埋積が生じた更新統の扇状地堆積物を主体としていることが指摘されている（河角・小野, 2009）。また、この更新統の表層部には、完新統が被覆する可能性が示唆されているものの、本遺跡周辺では、最終氷期後半以降から完新世のある段階の長期間にわたって氾濫原の埋積がほぼ無い静穏な堆積環境下にあったとみなされている。さらに、調査区での堆積層の累重と微地形にもとづく立地的観点から、平安時代から鎌倉時代には、顕著な地形変化が生じていなかったという重要な知見も示されている。このような河角・小野（2009）の成果をふまえると、今回の調査区においても、9世紀から10世紀代までの長期間にわたって、その地表面では、離水傾向が維持されており、安定した氾濫原の堆積環境が継続していたと考えられる。

いっぽうで、10世紀中頃の溝（水路）801の埋没状況をふまえると、当該期には、調査区付近の地下水位が既に比較的高い状況にあったことが推測される。後述するように花粉化石の保存状態が比較的良好であった要因も、このような地下水位の高さと関連するとみなされる。ただし、今回及び既往の発掘調査結果から、9世紀前半に調査地とその周辺では、大型建物跡などが検出されており、宅地として利用されていたことが確認できる。削平の影響も考慮する必要があるものの、調査区に累重する基本層序をなす氾濫原堆積物では、少なくとも9世紀後半～10世紀中頃までの堆積層が認められず、離水傾向が維持されていた判断される。これらのことから、9世紀代を中心とした調査区周辺の氾濫原では、安定した堆積環境が維持されるとともに、地表の排水性が全体的には良く、そのため乾燥しやすいという状態が形成されていたとみなされる。このような宅地の選地される土地条件を有する地表環境は、本調査地周辺に広がっていたことが上述の河角・小野（2009）の研究成果から確認される。

調査地付近で氾濫原が顕著に埋没し始めるのは、室町時代以降であり、付近の流路の天井川化の影響によるものである（河角・小野, 2009）。しかし、今回の調査・分析結果から、付近の流路の下刻・埋積とも密接に関連する地下水位は、9世紀～10世紀段階に既に上昇傾向へと転じていた可能性も疑われる。後述する9世紀前半から10世紀中頃までの埋土では、深さが浅いものでも、特に花粉化石において水湿地性草本の花粉化石がやや目立つ産状を示し、同様の分類群に対応する種実遺体をともなう場合が確認される。このような埋土の埋没状況と産出する植物化石からは、浅い溝底でもあっても湿潤な状態が維持されるような状況であったことがうかがえる。溝底の湿潤状態は、調査地付近の地下水位が比較的高かったことや、調査区の遺構検出面の基盤層が泥質であるため地下への排水性が不良であったことなどに関連するとみなされる。実際には、地下水位の高さと泥質な基盤による地下浸透性の悪さの双方が連動するものであったと考えられる。このため、9世紀～10世紀段階には、溝などの凹地において底部で湿潤状態が維持されるとともに、泥も堆積し

やすい状況になっていたと推測される。

さらに、周辺の調査では、10世紀初頭頃までに相対的な水位上昇により池状の湛水域へと溝が人為的に変化させられたことが明らかにされている（南, 2013）このように、調査地周辺でも、9世紀から10世紀代に地表付近で水位が上昇することが確認される。

なお、局地的な地下水位の変動については、土地利用に影響を及ぼす要因の1つである地表排水などを規定するものである。特に、平安時代以降については、南（2013）が詳細に整理した本調査地付近での人工流路の埋没と開削は、局地的な地下水位の変動に大きな影響を及ぼすと考えられる。また、このような人工流路の整備を行う人間活動は、今回の調査地が位置する右京域での地形発達史とこれに連動した水文環境変動に対応したものであったことが想像される。調査地周辺では、弥生時代以降の人間活動が認められているが、この時期頃から以降の地下水位変動や氾濫原の堆積環境変遷と土地利用の関係については、既往及び今後の発掘や分析結果などから、さらに検討を試みていくことも重要と思われる。

溝799（図51）

本遺構のサンプル採取地点は、塊状無層理の砂礫混じりの粘土質シルトで構成される（図52）。砂礫の混入は、上部で相対的に少なくなる。このような層相から、溝799の分析地点は、周囲から砂礫が流入するような不安定な湿地もしくは極浅い滞水域であったと解釈される。埋土では、腐植質や泥炭質の層相及び植物遺体の挟在が認められないことから、埋没速度が大きかったと推定される。

溝80B（図53・54）

本遺構は、層相からa、b、cの3つの堆積ユニットに大別される。サンプル採取地点は、塊状無層理の泥の偽礫が混じる粘土質シルトで構成されるユニットaである（図55・56）。層相から、本ユニット堆積時には、湿地もしくは極浅い滞水域であったと解釈されるとともに、周囲で偽礫が生じるような掘削行為などの人間活動が行われていたと推測される。溝基底部には、偽礫が多く含まれるユニットcの薄層が存在する。多数の偽礫が含まれることから、ユニットcは、溝の掘削時に生じた層準の可能性がうかがわれる。また、南肩部にも、泥の偽礫からなる層準のユニットbが認められる。この偽礫には、古土壌由来と思われる黒褐色のものも含まれる。なお、これらの偽礫は、ユニットa、cに比べ小さい。ユニットcは、溝南肩部に人為的に充填された客土と考えられる。

流路630（図57）

本遺構は、北肩部付近に砂礫層、中央部付近に偽礫を多く含む泥層、南端部付近に泥層が存在する。分析試料は、南端部付近に泥層から採取した。この部分の溝埋土は、塊状無層理の泥層を主体としており、層相から下層と上層の2層に区分される（図58）。このうち、下層は砂礫を多く含む粘土質シルトである。上層は、砂質粘土質シルトである。埋土では、腐植質や泥炭質の層相及び植物遺体の挟在が認められないことから、埋没速度が大きかったと推定される。層相から、分析試料採取地点の溝埋土は、周囲から砂礫が流入するような不安定な湿地もしくは極浅い滞水域であったと考えられる。

北肩部付近に砂礫層では、斜交葉理が観察される（図60）。このことから、この砂礫層は、洪水流などの流水によって運搬・堆積した碎屑物と考えられる。中央部付近に偽礫を多く含む泥層は、人間の掘削土などを多く含む客土の可能性がある（図59）。

溝810（図61）

本遺構は、西半部に泥層、東半部に偽礫を多く含む泥層と砂礫層が存在する。分析試料は、西半部に泥層から採取した。この部分の溝埋土は、偽礫を多く含む泥層からなる下層と、塊状無層理の砂質粘土質シルト層の下層と上層の2層に区分される（図62・63）。埋土下層は、溝掘削時や間もない段階に生じた堆積層であることが想定される。層相から、埋土上層は、湿地もしくは極浅い滞水域であったと推定される。

東半部については、砂礫層で斜交葉理が観察される（図64）。このことから、この砂礫層は、洪水流などの流水によって運搬・堆積した碎屑物と考えられる。偽礫を多く含む泥層については、その堆積時の環境として、客土もしくは周囲で人間の掘削行為のような偽礫を多く生産するよう人間活動が展開していたことが推測される（図65・66）。

（2）分析方法

1）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdtman（1952, 1957）、Faegri & Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

2）種実分析

堆積物から種実遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗選別する。篩内に残った試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。同定は、現生標本や笠原（1982）、藤下（1984）、角野（1994）、石川（1994）、谷城（2007）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）、勝山（2015）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表と図で示す。また、種実遺体各分類群の写真を添付し、状態良好な一部の種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測した結果等を一覧表に併記して同定根拠とする。分

析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、70%エタノール溶液で液浸保存する。

(3) 結果

1) 花粉分析

結果を表5、図67に示す。花粉化石は、全ての試料から多く検出される。分析残渣はいずれも100 μ l程度と普通である。残渣は微粒炭や未炭化の植物片である。花粉化石の保存状態は、堆積物の時代性と比べるとやや悪い。

溝（水路）801の4点は、組成が類似する。木本花粉は、マツ属（特に複維管束亜属）が多く木本花粉全体の40%程度を占める。次いでスギ属が多く、モミ属、ツガ属、アカガシ亜属、コナラ亜属と続く。下部のみイボタノキ属が多い。草本花粉は、木本花粉よりやや少ない。イネ科が多く、イネ属花粉を含む。その他、カヤツリグサ科、サナエタデ節ウナギツカミ節、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属、ベニバナ属を含む。オモダカ属、イボクサ等水生植物を含む。イネ属以外の栽培種は、ソバ属、アズキ属、ベニバナ属を含む。種類数が多いのも特徴の一つである。

溝799は、溝（水路）801と組成が類似する。

溝80Bは、スギ属、アカガシ亜属が20%程度検出し、モミ属、ツガ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ亜属がこれについて多いが、際だって多い種類はない。草本花粉は木本花粉よりやや少ない。イネ属花粉を含むイネ科が多いなど、溝（水路）801や溝799に似る。

流路630は、上層、下層ともに溝80Bの組成に類似する。

溝810も、上層、下層ともに溝80Bの組成に類似する。

2) 種実分析

結果を表6、図68に示す。分析に供された5遺構10試料を通じて、被子植物54分類群（ムクノキ、ヒサカキ属、キイチゴ属（大・小）、アカメガシワ、ゴンズイ、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科、オモダカ科、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、イネ、イヌビエ属、エノコログサ属（アワ？）、イネ科（シバ類近似）、イネ科、スゲ属、テンツキ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属A、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科A、カヤツリグサ科B、イヌタデ近似種、ボントクタデ近似種、タデ属（3面粗面）、タデ属、ザクロソウ、スベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、タガラシ、キジムシロ類（隆条斜上・隆条点在）、ヤブヘビイチゴ近似種、カタバミ属、エノキグサ、コミカンソウ、スミレ属、モモルディカメロン型、スズメウリ、アリノトウグサ、チドメグサ属、セリ科（ヤブジラミ属）、オカトラノオ属、シソ属-イヌコウジュ属、イヌコウジュ属、トウバナ属、ナス、タカサブロウ、ヤブタバコ、キク科）748個の種実遺体が抽出同定された。分析残渣は、木材、炭化材、植物片、昆虫類、砂礫類などが確認された。

種実遺体の出土個数は、溝（水路）801の下部が319個、中部が224個、上部が120個、最上部が13個、溝80Bが15個、溝810の下層が1個、上層からは検出されず、溝799が20個、流路630の下層が5個、上層が31個であった。溝（水路）801が分類群・個数ともに最も多く、特に下部が最多

表5 花粉分析結果

種 類	溝（水路）801				溝799	溝80B	流路630		溝810	
	最上部	上部	中部	下部			上層	下層	上層	下層
木本花粉										
マキ属	1	-	-	-	-	-	2	1	1	1
モミ属	19	19	28	9	24	23	17	21	25	33
ツガ属	24	20	19	13	17	29	11	10	14	29
トウヒ属	2	-	-	-	-	2	-	1	-	1
マツ属複雑管束亜属	29	49	54	17	70	18	15	18	30	27
マツ属（不明）	54	37	48	56	40	14	13	28	31	22
コウヤマキ属	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	54	43	27	35	23	47	55	53	29	49
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2	5	3	3	4	22	15	7	4	2
ヤナギ属	-	2	-	-	1	-	-	1	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
サワグルミ属-クルミ属	6	-	1	-	1	1	2	2	1	1
クマシデ属-アサダ属	-	-	4	6	5	3	5	3	4	10
ハシバミ属	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1
カバノキ属	-	4	-	2	6	2	3	4	4	3
ハンノキ属	2	-	1	3	-	2	-	1	-	1
ブナ属	4	5	4	1	3	2	-	4	4	3
コナラ属コナラ亜属	9	9	4	7	11	13	6	10	4	12
コナラ属アカガシ亜属	14	20	17	18	18	41	62	52	57	36
クリ属	-	1	1	1	-	2	1	1	-	-
シイ属	1	-	2	4	-	7	8	1	4	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	1	1	3	6	4	2	-	6
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	1	1	-	-	1	1	-
キハダ属	-	-	-	-	-	-	12	-	-	-
センダン属	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
ツゲ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ウルシ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2
トチノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	-	1	3	2	-	-	-	-	-	-
ツタ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	1	2	5	35	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-
草本花粉										
サジオモダカ属	-	-	-	-	-	3	-	-	4	-
オモダカ属	1	-	-	1	1	2	1	1	-	-
イネ属型	10	8	10	9	9	7	19	16	8	39
他のイネ科	83	64	55	59	65	74	73	97	52	110
カヤツリグサ科	23	17	6	4	5	13	31	21	12	14
イボクサ属	-	2	1	1	-	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	-	-	-	-	31	2	-	1	-	-
クワ科	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	6	12	6	3	12	6	-	1	13	-
タデ属	1	-	2	-	4	-	-	-	-	-
ソバ属	3	-	1	2	1	-	-	-	1	-
アカザ科	3	3	2	3	3	4	-	-	-	-
ナデシコ科	4	3	7	4	3	4	1	-	1	-
キンボウゲ属	-	1	-	-	-	12	-	-	2	-
アブラナ科	2	2	-	2	-	4	-	-	1	-
ワレモコウ属	-	1	-	1	-	-	2	2	-	-
バラ科	1	1	-	1	1	1	-	-	-	-
アズキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ノアズキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マメ科	-	2	-	2	-	-	-	1	-	-
カタバミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	3	-	2	1	7	1	-	1	1	2
セリ科	7	11	2	1	4	2	2	1	-	1
ガガブタ	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ネナシカズラ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカネ属-ヤエムグラ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属	-	3	-	3	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	21	19	13	12	7	26	20	33	17	5
ベニバナ属	-	1	-	1	16	-	-	-	-	-
キク亜科	3	1	4	-	1	6	-	4	-	2
タンポポ亜科	3	11	5	5	3	7	2	4	2	4
不明花粉										
不明花粉	5	7	10	6	2	5	1	7	1	3
シダ類孢子										
デンジソウ属	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
ゼンマイ属	-	2	-	-	2	-	1	-	-	-
イノモトソウ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
アカウキクサ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	216	191	134	140	113	109	110	186	73	167
合 計										
木本花粉	225	220	224	217	232	236	231	223	215	241
草本花粉	174	164	117	117	176	175	152	183	114	177
不明花粉	5	7	10	6	2	5	1	7	1	3
シダ類孢子	216	193	135	140	120	109	111	186	73	167
合計(不明を除く)	615	577	476	474	528	520	494	592	402	585

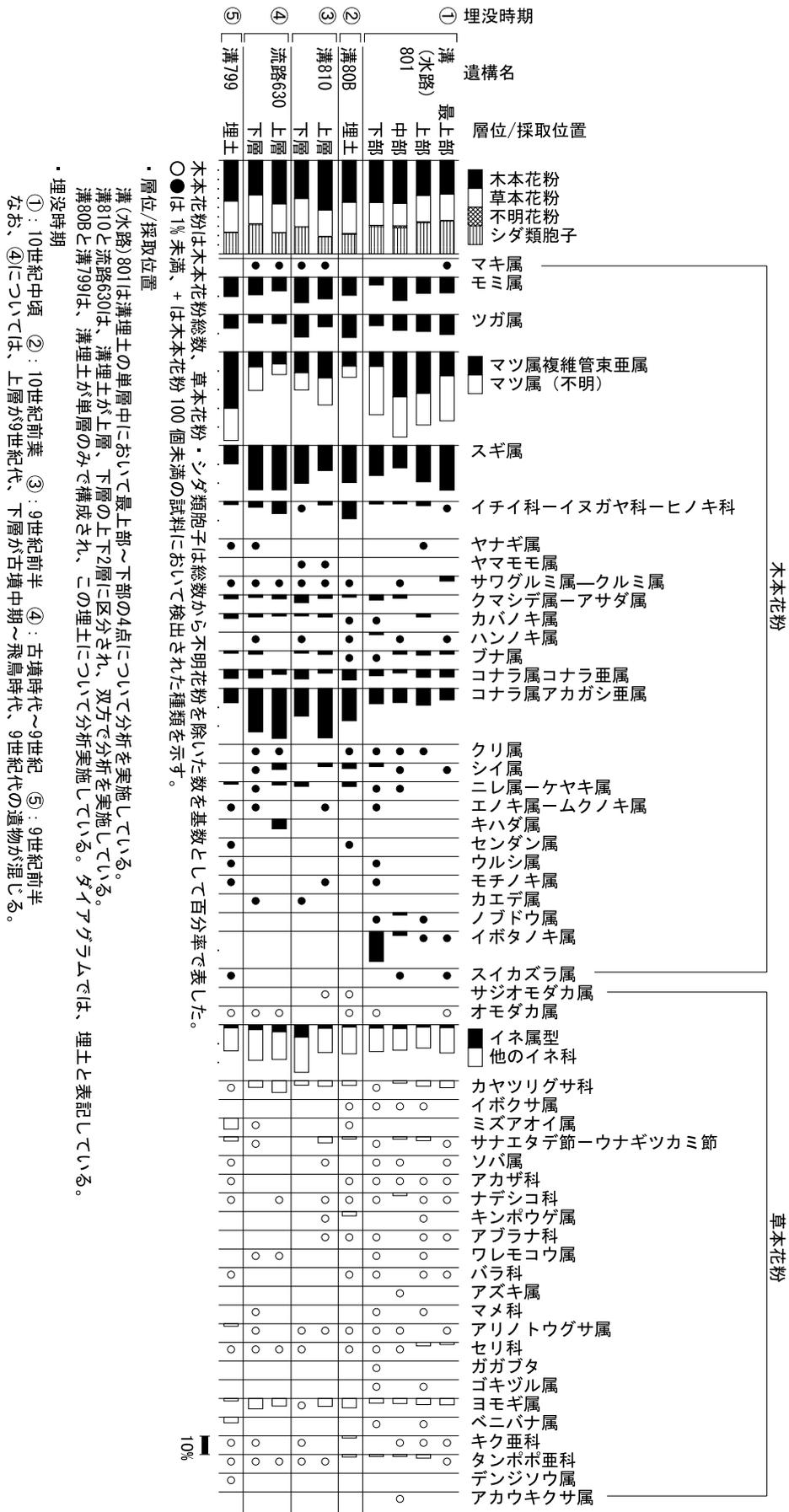


図67 花粉化石群集

表6 種実分析結果

分類群	部位・状態	10世紀中頃				10世紀前葉	9世紀前半		9世紀前半	古墳～9世紀		備考
		溝(水路)801				溝80B	溝810		溝799	流路630		
		最上部	上部	中部	下部		上層	下層		上層	下層	
木本												
ムクノキ	核	破片	-	-	7	-	-	-	-	-	-	最大4.5mm
ヒサカキ属	種子	完形	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
キイチゴ属(大型)	核	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
		破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
キイチゴ属(小型)	核	完形	-	-	-	5	-	-	-	-	-	
アカメガシワ	種子	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
		破片	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ゴンズイ	種子	破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属	種子	完形	-	-	1	1	-	-	-	-	-	下部:長さ4.0,幅3.0,厚さ2.2mm
		破片	-	1	1	-	-	-	-	-	-	
ノブドウ	種子	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ブドウ科	種子	破片	1	4	15	-	-	-	-	-	-	
草本												
オモダカ科	種子	完形	2	1	1	7	9	-	1	7	11	1
ミズアオイ近似種	種子	完形	-	-	1	2	-	-	-	7	-	-
		破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
コナギ近似種	種子	完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
イボクサ	種子	完形	-	4	31	2	-	-	-	1	2	3
		破片	-	3	11	2	1	-	-	-	-	-
イネ	炭化類(基部)	破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	類(基部)	破片	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
	類	破片	-	-	1	16	-	-	-	-	-	1
イヌビエ属	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
エノコログサ属(アワ?)	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	1	28	-	-	-	-	-	-
イネ科(シバ類近似)	果実	完形	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
イネ科	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
スゲ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
テンツキ近似種	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ホタルイ属	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	15	-
カヤツリグサ属A	果実	完形	-	2	5	100	-	-	-	1	-	-
		破片	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ属	果実	完形	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科A	果実	完形	-	11	12	16	-	-	-	-	-	-
		破片	-	3	11	8	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科B	果実	完形	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イヌタデ近似種	果実	完形	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	5	4	2	-	-	-	-	-	-
ボントクタデ近似種	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
タデ属(3面粗面)	果実	完形	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	果実	破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ザクロソウ	種子	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
スベリヒユ	種子	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	種子	完形	-	1	-	13	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヒユ属	種子	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
タガラシ	果実	完形	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	3	11	4	-	-	-	-	-	-
キジムシロ類(隆条斜上)	核	破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
キジムシロ類(隆条点在)	核	完形	-	-	9	6	-	-	-	-	-	-
		破片	-	1	4	-	-	-	-	-	-	-
キジムシロ類	核	破片	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
ヤブヘビイチゴ近似種	核	完形	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カタバミ属	種子	完形	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	7	5	-	-	-	-	-	-
エノキグサ	種子	完形	2	5	5	2	-	-	-	-	-	-
		破片	8	17	6	2	-	-	-	3	-	-
コミカンソウ	種子	完形	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
スマレ属	種子	完形	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
モモルディカメロン型	種子	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
スズメウリ	種子	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ	核	破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
チドメグサ属	果実	完形	-	-	4	5	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	4	3	7	-	-	-	-	-
セリ科(ヤブジラミ属)	果実	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オカトラノオ属	種子	完形	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-

分類群	部位・状態	10世紀中頃				10世紀前葉	9世紀前半		9世紀前半	古墳～9世紀		備考	
		溝(水路)801				溝80B	溝810		溝799	流路630			
		最上部	上部	中部	下部		上層	下層		上層	下層		
シソ属-イヌコウジュ属	果実	完形	-	3	7	1	-	-	-	-	-		
		破片	-	8	17	6	-	-	-	-	-		
イヌコウジュ属	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
トウバナ属	果実	完形	-	2	-	-	-	-	-	-	-		
ナス	種子	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	長さ2.8mm, 幅2.5mm	
		破片	-	-	2	1	-	-	-	-	-		
タカサブロウ	果実	完形	-	4	7	11	-	-	-	-	-		
		破片	-	14	17	10	-	-	-	-	-		
ヤブタバコ	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
		破片	-	-	1	2	-	-	-	-	-		
キク科	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	2	-		
合計													
木本種実			1	12	18	9	5	-	-	1	-	-	合計46 個
草本種実			12	108	206	310	10	-	1	19	31	5	合計702 個
種実合計			13	120	224	319	15	-	1	20	31	5	合計748 個
分析残渣													
木材			+	+	+	+	+	-	-	+	-	-	
炭化材			+	+	+	+	+	-	-	+	++	+	
植物片			+	+	++	++	+	-	-	+	++	+	
昆虫類			+	+	+	+	++	-	-	+	+	+	
砂礫類			++	+	+	+	+	++	+++	++	++	+++	
分析量													
			200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	容積(cc)
			355	355	370	374	353	346	340	361	365	322	湿重(g)

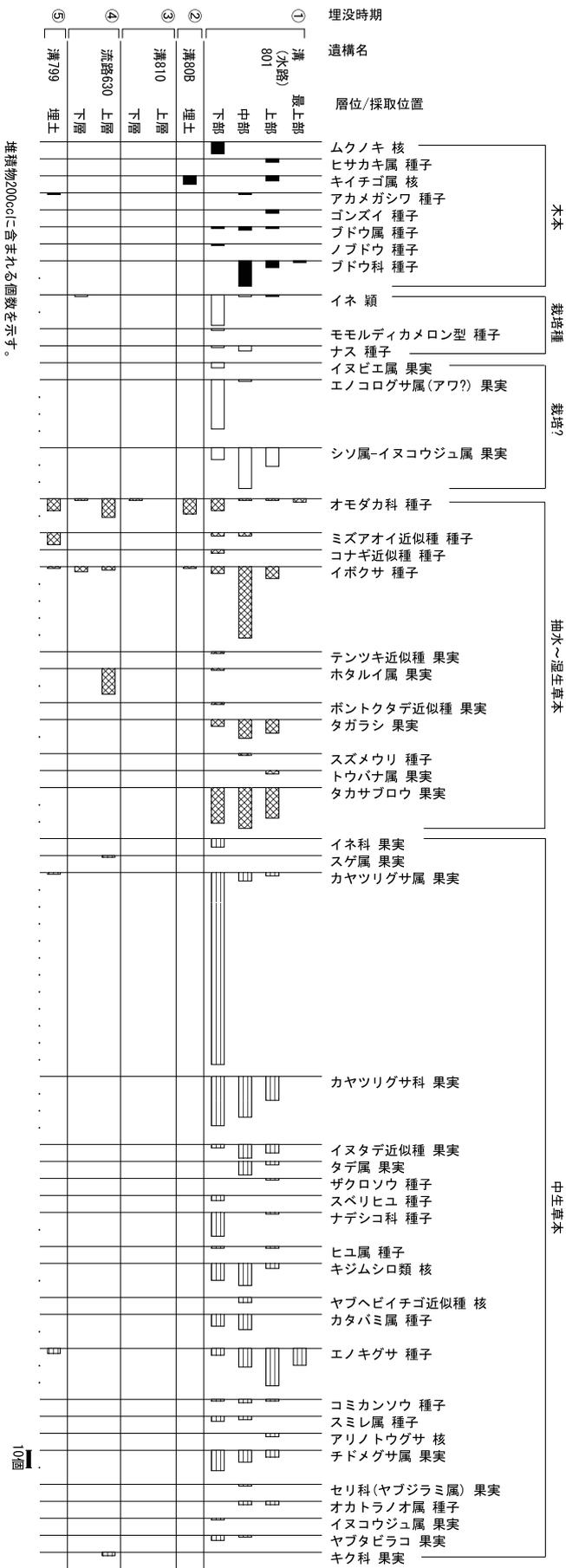
注)「+」:少量、「++」:中量、「+++」多量

で、上部、中部が次いで多い。一方、溝80B、溝810、溝799、流路630は少なく、抽水性草本を主体とする。

栽培種は、イネの類が21個（溝（水路）801下部～上部、流路630下層）と、モモルディカメロン型の種子が1個（溝（水路）801下部）、ナスの種子が4個（溝（水路）801下部、中部）と、栽培の可能性があるイヌビエ属の果実が3個（溝（水路）801下部）、エノコログサ属（アワ?）の果実が30個（溝（水路）801下部、中部）、シソ属-イヌコウジュ属の果実が42個（溝（水路）801下部～上部）の、計101個が確認された。

栽培種と栽培の可能性を除いた分類群は、木本9分類群46個、草本39分類群601個から成り、草本主体の組成を示す。木本は、溝80Bのキイチゴ属5個と溝799のアカメガシワ1個を除いた40個が溝（水路）801から検出され、落葉広葉樹で高木になるムクノキ、アカメガシワ、小高木のゴンズイ、低木のキイチゴ属、籐本のブドウ属、ノブドウ、ブドウ科などの林縁などの明るく開けた場所に生育する分類群と、照葉樹林の林床などに生育する常緑広葉樹で小高木～低木のヒサカキ属が確認された。

草本も、溝（水路）801からの検出が9割（536個）を占め、下部のカヤツリグサ属の多産（113個）に特徴づけられる。中生植物のイネ科、スゲ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、イヌタデ近似種、タデ属、ザクロソウ、スベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、キジムシロ類、ヤブヘビイチゴ近似種、カタバミ属、エノキグサ、コミカンソウ、スマレ属、アリノトウグサ、チドメグサ属、セリ科（ヤブジラミ属）、オカトラノオ属、イヌコウジュ属、ヤブタバコ、キク科が確認され、これらは明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多い。また、抽水植物のオモダカ科、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ホタルイ属、湿生植物のテンツキ近似種、ボントクタデ近似種、タガラシ、スズメウリ、トウバナ属、タカサブロウも多く検出される。



堆積物200cmに含まれる個数を示す。

・層位/採取位置

溝(水路)801は溝埋土の単層中において最上部～下部の4点について分析を実施している。
溝810と流路630は、溝埋土が上部、下部の上下層に区分され、双方で分析を実施している。
溝808と溝799は、溝埋土が単層のみで構成され、この埋土について分析実施している。ダイアグラムでは、埋土と表記している。

・埋没時期

①：10世紀中頃 ②：10世紀前半 ③：9世紀前半 ④：古墳時代～9世紀 ⑤：9世紀前半
なお、④については、上部が9世紀代、下部が古墳中期～飛鳥時代、9世紀代の遺物が埋む。

図68 種実遺体群集

(4) 考察

1) 9世紀前半(溝799)

今回の遺構埋土の分析試料の時期は、9世紀から10世紀代のものを中心とする。そのなかで、最も時期が古いのは、9世紀前半の溝799である。本遺構埋土の花粉分析結果では、古墳時代から9世紀の流路630、9世紀前半の溝810よりも、マツ属の多産が顕著であることに着目される。マツ属の割合は、10世紀中頃の溝(水路)801と同等かもしくは多産傾向を示す。

既往の花粉分析結果の検討から、平安京域の古代の木本花粉の組成は、以下のような変遷を示すことが指摘されている(パリノ・サーヴェイ, 2013)。平安時代初期のおよそ9世紀初頭～前半頃では、アカガシ亜属やコナラ亜属といった広葉樹が比較的多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹を伴う組成であったものが、時代を追う毎にマツ属が漸増し、12世紀頃には高率となる。ただし、今回の調査地付近やその他でも宅地としての土地利用が活発な場所では、9世紀前半に既に増加している事例が多く、植栽など由来することが示唆される。

今回の分析結果では、溝799の9世紀前半に既にマツ属が高率である。今回の調査区では、当該期の大型建物跡が検出されており、さらに、周辺の調査でも建物跡が確認されている。これらのことから、溝799でのマツ属の多産は、パリノ・サーヴェイ(2013)が指摘した9世紀代の宅地域で認められる群集の特徴を有していると認識される。ただし、本調査地では、その後の9世紀代にマツ属が減少して、スギ属さらにアカガシ亜属が増加するという、周辺及び宅地域で得られている既往の花粉化石群集の変遷パターンと異なる傾向があることが認識できる。

花粉化石群集については、堆積物に化石が取り込まれる際の堆積過程や、堆積後の土壌化などによる分解の影響を大きく受ける。さらに、上記の古代の花粉化石群集の変遷にもとづくと、9世紀から10世紀代は、植生変化の過渡期に相当し、花粉化石群集に多少のばらつきは生じる可能性もうかがえる。したがって、今回得られた各時期の溝埋土のマツ属花粉の産出状況は、遺構の時代差に直結するわけではない。

花粉化石群集に影響を与える要因のうち、堆積過程については、いずれの試料も、分析試料が泥質な溝埋土である。このような層相から、ほとんど試料では、埋没過程に顕著な差異が生じていたとは考えられない。また、堆積後の分解については、分析結果から、極端に保存状態が悪いものは含まれず、残渣から残存状況が普通であることが確認できることから、今回の分析試料では、保存状態にも顕著な差が生じていないとみなされる。よって、9世紀から10世紀代の溝埋土の分析結果については、試料間での堆積過程及び堆積後の風化の双方の影響に関して差異が小さいと考えられる。これらのことから、9世紀前半の溝799のマツ属の多産は、当該期の局地的な植生を反映している可能性が示唆される。

溝799から特徴的に産出するマツ属(ニヨウマツ類もしくはゴヨウマツ類)は、有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安時代の邸宅の庭園でも植栽されていたことが、文献等の調査により明らかにされている(飛田, 2002)。9世紀前半に本調査地とその近傍で

は、大型建物跡が検出されており、社会的に特権を有する階層を含む構成員が居住していたとみられる宅地が広がる。このような検出遺構の解釈と上記した飛田（2002）庭園史などの成果をふまえると、その空閑地に植栽が存在していたことも想定される。

植物化石については、井戸ないし土坑のような表面積が小さい閉鎖系の凹地（堆積盆）では、風媒花でもあっても、そこへ供給される花粉化石の飛来範囲が極めて小さく、分析地点近傍の局地的な植生を反映する種類が多く含まれる可能性があることが示されている（高原，2007）。溝799の堆積盆としての閉鎖性は、井戸や土坑に比べれば弱い。ただし、分析試料の採取地点は、小規模な凹地をなすことから、基本層序を構成するような洪水堆積物や流路と比べた場合、その閉鎖性がかなり強いとみなされる。また、堆積物中の植物化石は、その粒度組成や層相と挙動をともしめる場合があることが確認されており（百原・吉川，1997、中嶋その他，2004など）、一般的に泥などの細粒堆積物において局地性が高まるとされる（辻，2000）。これらのことから、溝799の分析層準に含まれる植物化石は、局地性を反映している可能性が、遺構の形態充填される堆積層の特徴から示唆される。

以上の述べてきた分析層準に関係する植物化石の移動・運搬と堆積、さらに堆積後の続成作用といった化石が形成される全過程に関する総合的な観点（百原・南木，1988）であるタフォノミー（化石成因論）を考慮すると、9世紀前半の溝799でのマツ属多産の要因の1つとしては、当該期の宅地に存在したマツの植栽に由来することが想定される。また、飛田（2002）にもとづくくと、マツ以外の植栽樹としては、花粉分析結果で確認されるセンダン属もその候補としてあげられる。

ただし、種実分析では、植栽の候補として予想されるマツ属とセンダン属が産出しない。溝799では、種実遺体がほとんど産出しない状況である。花粉の保存状態が比較的良好であることや、層相観察から溝埋土が湿性状態にあったとみなされるため、種実遺体については、溝の堆積過程及び埋没後の分解・消失の影響が小さかったと思われる。

この点をふまえると、特に植栽の可能性が示唆されるマツ属については、溝799の近傍には存在していなかったことが想定される。ただし、溝799をとりまく宅地領域には、ある程度の量のマツ属が植栽として存在していたことが推測される。溝799については、なんらかの要因で種実遺体を取り込まれにくい状況下にあった可能性もある。現段階においては、9世紀前半の植物化石に関する情報が1地点のみしか得られておらず、詳細な空間的な検討を行うことが難しい。本調査地やその付近での9世紀前半での植栽の可能性は、今後さらに地点数を増やして継続的に検討を試みていく必要があると思われる。

なお、今回分析を行っている溝埋土については、溝（水路）801を除き規模がいずれも小さい。溝799と同様にこれらの溝埋土では、いずれも種実遺体の産出が不良である。具体的な要因は不明であるが、規模の小さい溝では、種実が取り込まれにくい何らかの堆積状況が存在していたことがうかがえる。

溝799については、機能・埋没時期に溝周辺が宅地として土地利用されており、明るく開けた場所であったことが発掘結果から確認できる。花粉化石では、草本類において、イネ科やヨモギ属、

タデ類など、このような場所に生育する種類が目立っており、当時の土地利用とも調和的である。種実遺体については、産出が不良で、当時の植生を検討できるような結果が得られていない。そのようなか、溝799埋土では、花粉化石で水湿地生草本のオモダカ属、ミズアオイ属、イボクサ属、種実遺体でもわずかであるがこれら対応するオモダカ科、ミズアオイ近似種、イボクサが産出する。層相をふまえると、溝底部では、機能及び放棄段階に、湿潤な状態となっており、上記のような草本が生育していたとみられる。

また、栽培種としては、イネ属、ソバ属、ベニバナ属が確認できる。このうち、イネ属の割合は、イネ科花粉において少量である。これらは耕地から飛来もしくは流されてきた可能性もある。ただし、当時の土地利用からは、近傍に広い水田が存在していたとは考えられない。また、イネの花粉は、花の構造上、籾殻の中にも多く残存する。これらのことから、溝799埋土から産出するイネ属は、宅地域に持ち込まれ稲穂の中に残存していたものに由来する可能性もある。ベニバナ属は、溝799埋土で相対的に産出が目立つ。このような産状についても、当該期に存在した宅地でのなんらかの利用に由来することが想定される。10世紀代の宅地での検討結果ではあるが、近傍の調査では、当該期に宅地ともに耕作地が存在したことが、発掘結果と古植物学的分析結果から示唆されている(南, 2013)。この見解にもとづくと、9世紀前半の溝799、さらにその他の9世紀から10世紀代の他の遺構で産出している栽培種は、持ち込まれていたものだけでなく、耕作地での栽培に由来するものも含まれると考えられる。

2) 9世紀代(流路630、溝810)

9世紀代に収まる流路630上層と溝810上下層の埋土は、上記した既往の平安京域の当該期の花粉化石群集の特徴と調和的である。流路630の埋土については、上層が9世紀、下層が古墳時代から9世紀の遺物が検出され、異なる遺物の出土状況が確認される。ただし、花粉化石群集は、下層と上層で変化が認められない。下層の花粉化石群集は、9世紀前半の溝810とも非常に類似する。さらに、下層では、9世紀の遺物も含まれる。これらのことから、流路630の埋土下層の堆積物は、9世紀代に帰属するとみなされる。

9世紀代の流路630、溝810での木本花粉についてみると、スギ属とアカガシ亜属が多いことが認識される。このうちスギは、現在では植栽を除けば山沿いの谷筋などに分布することが多いが、埋没林や遺跡出土材の調査によって、かつては扇状地や低地などにも分布していたことが明らかになっている(鈴木, 2002)。いっぽう、アカガシ亜属とシイ属は、山地や丘陵を中心に分布する安定した常緑広葉樹林の主要な構成要素である。

これらのことから、9世紀代には、盆地をとりまく山地や丘陵を中心にカシ類の森林がある程度は未だ存在していたと考えられる。さらに、これらの山地、丘陵の谷筋、谷頭、麓の台地や扇状地といった土砂生産及び堆積域となる不安定な場所には、スギ属をはじめ、モミ属、ツガ属、マツ属、ヒノキ類などの針葉樹、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹が生育していたとみられる。

ただし、今回検出されたスギ属をはじめとする針葉樹は、風媒花の中でも特に花粉生産量が多く、遠くまで飛散する。また、花粉外膜は分解に対する耐性も強い。このことから、当時の森林中の割合は、花粉化石の割合ほど多くなかったとみられる。このように、生産量が多く飛散能力に優れた花粉化石が、実際の植生よりも多くなる傾向は、花粉化石の堆積機構に関してしばしば論じられる (Faegri & Iversen, 1989 など)。

草本花粉の特徴は、9世紀前半の溝799と同様に、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科など、開けた場所に生育する種類を中心とする組成を示す。このような草本花粉の群集は、これまでの発掘結果にもとづく当該期の土地利用状況とも矛盾のない分析結果とみなされる。水湿地生草本は、溝810埋土下層で産出せず、上層でサジオモダカ属のみが認められる。また、本溝の種実遺体でも、下層でオモダカ科が1点産出したのみである。下層は、偽礫を多く含む層相を示しており、溝の深さも浅い。これに対し、流路630は、産出が不良ながら、オモダカ科、イボクサ、ホタルイ属(上層のみ)といった水湿地生草本が認められる。これらの植物化石の産状から、溝810では、安定した湿地や滞水域が形成されていなかったと考えられる。そのような傾向は、特に埋土下層で顕著であったとみられる。

栽培種については、イネ属がすべての埋土で産出するものの、溝799で比較的目的立つベニバナ属が産出せず、さらにソバ属も溝810上層のみで確認されるのみである。このような栽培種の産状が、流路630、溝810の時期の土地利用と関係するかどうかについては、現段階で検討に至っておらず、今後の課題である。

3) 10世紀前葉～中頃(溝80B、溝(水路)801)

当該期には、9世紀代の範疇に収まる時期よりもマツ属が多産するようになる。マツ属は生育の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから二次林の代表的な種類である。スギ属は、モミ属、ツガ属等とともに温帯針葉樹林の構成要素であるとともに、前述したように土地条件が悪くても生育可能である。また、木本花粉では、常緑広葉樹林の主要構成要素であるシイ属、さらにヤマモモ属やセンダン属をともない、減少傾向にあるもののアカガシ亜属も産出も確認できる。これらのことから、平安京域の盆地周囲の山地・丘陵の森林植生は、9世紀前半以降から10世紀中頃にかけて劇的な変化が存在していなかったことが想定される。いっぽうで、マツ属の増加が認識されることから、盆地周囲の山地・丘陵では、植生破壊が進んで二次林が増加していたことも推測される。

近傍の調査地では、10世紀初頭の井戸埋土から同様の傾向が得られており、宅地域を中心とする植栽樹のマツに由来する影響とみなされる (パリノ・サーヴェイ, 2013)。このことから、溝80B、溝(水路)801での10世紀前葉～中頃段階でのマツ属の多産については、山林での植生破壊だけでなく、宅地域での植栽に由来する可能性も視野に入れる必要があると思われる。

いっぽうで、草本花粉は、9世紀代の溝埋土と同様で、開けた場所に生育する種類を中心に産出する。栽培種は、既に確認されているイネ属、ソバ属、アベニバナ属に加え、アズキ属が溝(水路)801で確認できる。

ところで、溝（水路）801では、多くの種実遺体の産出が確認される。発掘結果から、本溝は、他の溝と異なり相対的に溝も深く、さらに集水域も大きいと考えられる。種実が溝（水路）801で多産するのは、上記のような溝の性質によるものと想定される。種実遺体は、最下部で最も多く、上部に向かって堆積物中に含まれる産出数が減少する。これは、産出数の多い下部、中部付近の層準で相対的に溝内の堆積環境が安定しており、埋没速度が小さかったため、より多くの植物遺体が堆積物へ集積したためと考えられる。

溝（水路）801での種実群集については、圧倒的に草本類が優占する。わずかに産出した木本類は、林縁や河畔などに明るい林地で主要構成要素となるムクノキ、林縁等の明るく開けた場所に先駆的に侵入する中・低木類のアカメガシワ、ゴンズイ、籐本類のブドウ属（科）、ノブドウである。花粉化石においても、種実遺体に対応する種類が産出する。さらに下部で多産したイボタノキ属も、林縁などに分布する二次林要素の低木である。この他、花粉分析結果において河畔等によく認められる種類としては、ヤナギ属、クリ属、ニレ属－ケヤキ属があげられる。種実遺体と花粉化石で産出する主要な種類は、すべて成長が早く、萌芽による再生も容易な生態性を持つものが多く、そのために障害に強く、攪乱の頻度・強度の高い場所に生育可能な二次林要素が強い木本類である。なお、他の溝埋土では、溝80Bでキイチゴ属が5点、溝799でアカメガシワ1点と、溝（水路）801で同様の生態性を示す木本類がわずかに産出するのみである。

これらの遺構及び既往の古植物学的分析結果と発掘結果から、10世紀に調査地周辺では、ほとんど樹木が生育していなかったと考えられる。溝（水路）801では、この溝の集水域に、わずかに上記した木本類が生育するのみであったと推定される。

いっぽうで豊富な種類数が産出した草本類では、花粉化石と種実遺体ともに人里植物を主体とする。当時の周辺の草地に生育していたと考えられる。また、種実遺体では、抽水性～湿生植物のオモダカ科、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ホタルイ属、テンツキ近似種、ボントクタデ近似種、タガラシ、スズメウリ、トウバナ属、タカサブロウといった多くの種類が認められる。また、花粉化石においても、オモダカ属、イボクサ属、ガガブタ、ゴキズル属といった種実遺体とも対応する種類を含む水湿地生の草本が産出している。これらの草本類は、溝内を中心とした水湿地に生育していたと考えられる。

引用文献

Erdtman G., 1952, Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I) .Almqvist&Wiksell, 539p.

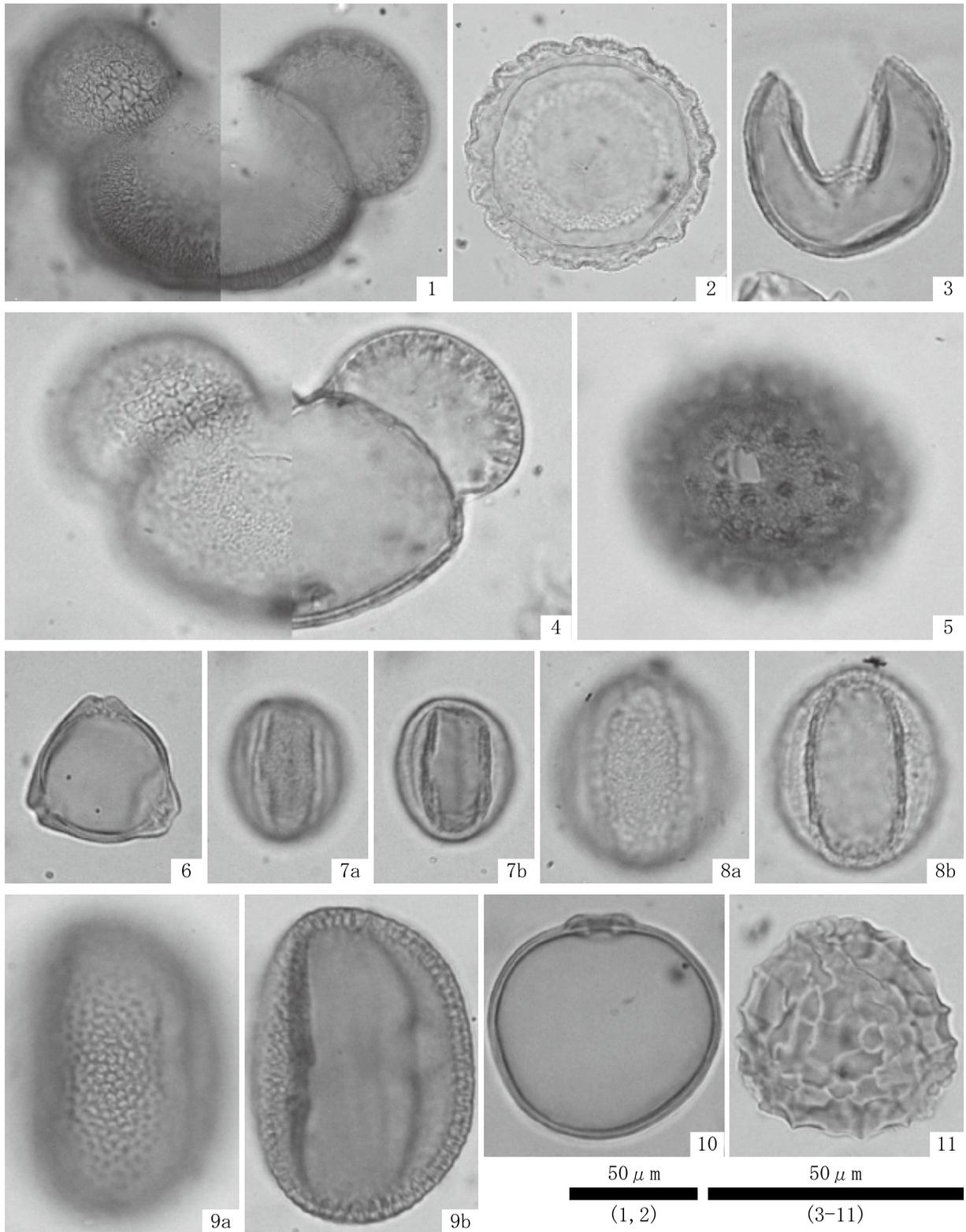
Erdtman G., 1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) .Almqvist&Wiksell, 147p.

Faegri K. & Iversen J., 1989, Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.

藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.

藤下典之, 1984, 出土遺体よりみたり科植物の種類と変遷とその利用法. 古文化財の自然科学的研究. 古文化財編集委員会編. 同朋舎, 638-654.

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 角野康郎, 1994, 日本水草図鑑. 文一総合出版, 178p.
- 笠原安夫, 1982, 鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実タール状塊について. 鳥浜貝塚1980年度発掘調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2－. 福井県教育委員会, 65-87.
- 勝山輝男, 2015, 日本のスゲ 増補改訂 (ネイチャーガイド). 文一総合出版, 392p.
- 河角龍典・小野映介, 2009, 平安京右京三条三坊三町の発掘調査から見た最終氷期以降の紙屋川 (天神川) 扇状地の地形発達史. 平安京右京三条三坊三町跡. 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 63-66.
- 南 孝雄, 2013, まとめ. 平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡. 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 38-47.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 82p.
- 百原 新・吉川昌信, 1997, 蛇行河川内での大型植物化石群の堆積過程. 植生史研究 5, 15-27.
- 百原 新・南木陸彦, 1988, 大型植物化石群集のタフオノミー. 植生史研究 3, 13-23.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12・13集, 91p.
- 中嶋雅宏・中山勝博・百原 新・塚腰 実, 2004, 中新統土岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動一岐阜県多治見市大洞地区の例一. 地質学雑誌 110, 204-221.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- パリノ・サーヴェイ, 2013, 自然科学分析. 平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 49-62.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－. 誠文堂新光社, 272p.
- 鈴木三男, 2002, 日本人と木の文化. 八坂書房, 255p.
- 高原 光, 2007, 花粉分析による植生復元と気候復元. 低温科学 65, 97-102.
- 谷城勝弘, 2007, カヤツリグサ科入門図鑑. 全国農村教育協会, 247p.
- 飛田範夫, 2002, 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会, 435p.
- 辻 誠一郎, 2000, 種実類：大型植物遺体. 考古学と植物学. 同成社, 111-149.



- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. モミ属 (溝810; 下層) | 2. ツガ属 (溝(水路)801; 中部) |
| 3. スギ属 (溝(水路)801; 中部) | 4. マツ属複維管束亜属 (溝(水路)801; 中部) |
| 5. ベニバナ属 (溝799) | 6. ヤマモモ属 (溝810; 上層) |
| 7. アカガシ亜属 (溝(水路)801; 中部) | 8. コナラ亜属 (溝810; 上層) |
| 9. ソバ属 (溝810; 上層) | 10. イネ属 (溝(水路)801; 中部) |
| 11. アズキ属 (溝(水路)801; 中部) | |

図69 花粉化石



1. ムクノキ 核 (溝(水路)801;下部)
3. ヒサカキ属 種子 (溝(水路)801;上部)
5. キイチゴ属 核 (溝80B)
7. ゴンズイ 種子 (溝(水路)801;上部)
9. ブドウ属 種子 (溝(水路)801;中部)
11. オモダカ科 種子 (流路630;上層)
13. コナギ近似種 種子 (溝(水路)801;下層)
15. イヌビエ属 果実 (溝(水路)801;下部)
17. イネ 穎 (溝(水路)801;下部)
19. イネ 炭化穎(基部) (溝(水路)801;上部)

2. ヒサカキ属 種子 (溝(水路)801;上部)
4. キイチゴ属 核 (溝(水路)801;上部)
6. アカメガシワ 種子 (溝(水路)801;中部)
8. ブドウ属 種子 (溝(水路)801;下部)
10. ノブドウ 種子 (溝(水路)801;下部)
12. ミズアオイ近似種 種子 (溝799)
14. イボクサ 種子 (溝(水路)801;中部)
16. エノコログサ属(アワ?) 果実 (溝(水路)801;下部)
18. イネ 穎(基部) (溝(水路)801;下部)

図70 種実遺体 1



20. イネ科 果実 (溝(水路)801;下部)
 21. イネ科(シバ類似) 果実 (溝(水路)801;下部)
 22. スゲ属 果実 (流路630;上層)
 23. テンツキ近似種 果実 (溝(水路)801;下部)
 24. ホタルイ属 果実 (溝(水路)801;下部)
 25. カヤツリグサ属A 果実 (溝(水路)801;下部)
 26. カヤツリグサ属 果実 (溝(水路)801;下部)
 27. カヤツリグサ科A 果実 (溝(水路)801;下部)
 28. カヤツリグサ科B 果実 (溝(水路)801;下部)
 29. イヌタデ近似種 果実 (溝(水路)801;中部)
 30. ボントクタデ近似種 果実 (溝(水路)801;下部)
 31. タデ属 果実 (溝(水路)801;下層)
 32. ザクロソウ 種子 (溝(水路)801;上部)
 33. スベリヒユ 種子 (溝(水路)801;下部)
 34. ナデシコ科 種子 (溝(水路)801;下部)
 35. ヒユ属 種子 (溝(水路)801;上部)
 36. タガラシ 果実 (溝(水路)801;上部)
 37. キジムシロ類 核(隆条斜上) (溝(水路)801;上部)
 38. キジムシロ類 核(隆条点在) (溝(水路)801;中部)
 39. ヤブヘビイチゴ近似種 核 (溝(水路)801;中部)
 40. カタバミ属 種子 (溝(水路)801;下部)
 41. エノキグサ 種子 (溝(水路)801;上部)
 42. コミカンソウ 種子 (溝(水路)801;中部)
 43. スミレ属 種子 (溝(水路)801;下部)
 44. モモルディカメロン型 種子 (溝(水路)801;下部)
 45. スズメウリ 種子 (溝(水路)801;中部)
 46. アリノトウグサ 核 (溝(水路)801;上部)
 47. セリ科(ヤブジラミ属) 果実 (溝(水路)801;中部)
 48. チドメグサ属 果実 (溝(水路)801;下部)
 49. オカトラノオ属 種子 (溝(水路)801;中部)
 50. シソ属-イヌコウジュ属 果実 (溝(水路)801;中部)
 51. イヌコウジュ属 果実 (溝(水路)801;下部)
 52. トウバナ属 果実 (溝(水路)801;上部)
 53. ナス 種子 (溝(水路)801;中部)
 54. タカサブロウ 果実 (溝(水路)801;下部)
 55. ヤブタバコ 果実 (溝(水路)801;下部)

図71 種実遺体2

付章2 墨書土器と文献史料

吉野秋二

平安京右京三条三坊五町跡の発掘調査の成果、特に出土した墨書土器について、文献史学の立場から、基本情報を整理する。

『拾芥抄』「西京図」は、右京三条三坊五町を、隣接する右京三条三坊十一町、十二町と共に「栖霞寺領」とする¹⁾。『拾芥抄』は、『口遊』『二中歴』などの系列に属する百科全書で、成立は鎌倉時代後期から南北朝期である。

棲霞寺（栖霞寺）は、左大臣源融の別業、棲霞観に由来する。融の一周忌にあたる寛平8年（896）、融の子息、堪と昇は、棲霞観に仏殿を造立し、阿弥陀三尊像を安置した。これが棲霞寺の始まりで、10世紀中期には堂舎が整備された。その後、長和5年（1016）、裔然が宋から持ち帰った釈迦像が釈迦堂に安置され、釈迦堂は清凉寺とも呼称された。鎌倉期には、清凉寺釈迦像が信仰を集め、棲霞寺は清凉寺の阿弥陀堂として扱われるようになった。

平安期の史料には、平安京右京三条三坊五町に関する記述は見あたらない。今回の発掘調査結果に鑑みると、右京三条三坊五町は、9世紀前半には、皇族・貴族の邸宅地として利用され、以後のある段階で、棲霞寺に寄進されたと推定される。寄進主体は不明だが、第一に想定されるのは、棲霞寺関係者（檀越など）である。したがって、9世紀前半の居住者としては、源融の関係者、例えば嵯峨天皇の親族などが第一に想定される。

中世以後、右京三条三坊五町の北東には、北野社神人が居住する「保」が展開し、「西京（西之京）」と呼ばれるようになる。網野善彦は、弘安6年（1283）の北野宮寺公文得分注文に、「三月保」「北保」「中保」「馬代保」「七月保」「九月保」「二三条保」「栖霞寺田保」がこの順に列挙されている点に着目し、「栖霞寺田保」を除く七保が戦国期以後の「西京七保」に継承された、と推測する²⁾。しかし、三枝暁子が指摘するように、「二三条保」は、二条以南三条以北にあった保で、一条以南・二条以北の「西京七保」（戦国期は「上下保」）との系譜的連関は想定できない³⁾。

「栖霞寺田保」は、『拾芥抄』が右京三条三坊五町・十一町・十二町に存したとする「栖霞寺領」に由来する可能性が高い。前述の北野宮寺公文得分注文が「二三条保」の次に「栖霞寺田保」を記すのは、地理的状況を反映したものと見てよからう。

以上、右京三条三坊五町に関する文献史料について概述した。続いて、今回の発掘調査で出土した墨書土器について概説する。

今回の発掘では、①「政所備□〔料カ〕」、②「齋」（2点）、③「屋」と墨書されたものなどが出土した。この内、墨書内容の意味が明快なのは、①「政所備□〔料カ〕」である。

「政所」は、財政や訴訟など日常的政務を処理する機関（部署）で、官司や寺社、皇族・貴族の家などに置かれる。平安中期の貴族で、右大臣をつとめた藤原実資の家には、「政所」をはじめ、「侍所」「隨身所」「雑色所」「小舎人所」「牛飼所」といった構成員の伺候空間、「膳所」「進物所」

「大盤所」「修理所」「別納所」「厩司」などの所々の設置が確認される⁴⁾。

同時期の文学作品『うつほ物語』吹上上の絵指示には、紀伊国の長者神奈備種松邸の様子として、諸部署の活動を描いた部分がある（この箇所は、設定とは異なり、都の貴族宅をモデルとしたと考えられている⁵⁾）。「政所」に関しては、

これ政所。家司ども三十人ばかりあり。家どもの預かり、百人ばかり集まりて、今年の生業、蚕飼ひすべきこと定む。炭焼、樵夫などいふ者ども集まりて奉れり。せうじばかり、男ども五十人ばかり並み居て、台盤立てて物食ふ。

とある。「家司」は家政機関の上級職員。「預」は各部署の職務を専当する職員である。「政所」では、彼らにより、家政全般が協議される。貢納物もここで監査された。また、構成員が待機する空間が存在し、食事が行われた。したがって、「政所」には、多くの食器が恒常的に保管されていたと考えられる。

「政所」に関しては、出土文字史料も多い。特に、平城京跡左京三条二坊一・二・七・八坪の長屋王邸跡の発掘調査で、溝状土壇SD4750から出土した「長屋王家木簡」は、長屋王家「政所」（長屋王家木簡では、「家令所」、「司所」、「務所」とも呼称されている）を廃棄元とする一大木簡群である⁶⁾。伴出遺物には、封緘木簡、文書木箱、算木など、文書・帳簿を管理する「政所」に相応しいものが含まれる⁷⁾。長屋王家木簡出土遺構は、四坪の宅地の東北端部にあたる。

今回の発掘調査で出土した「政所備□〔料カ〕」の墨書土器は、皇族・貴族の家政機関の存在を直接的に示すものである⁸⁾。また、平城京長屋王邸の事例に鑑みると、出土遺構（溝4）付近に「政所」が存在した可能性を示唆するものといえる。

次に「齋」と記された墨書土器2点について述べる。1字しかなく、確たることは言い難いが、ひとまず二つの見方を提示する。

一つは、「齋食」、「齋会」などの略と見る理解である。「齋会」は、僧尼を招いて仏事を修し、齋食（とき）を施す法会を意味する。平城宮出土墨書土器には、「□〔齋カ〕食」（平城宮跡第10次調査）、「□〔齋カ〕會」（平城宮跡第21次調査）などの事例がある⁹⁾。

もう一つは、「齋王」（いつきのみこ）、「齋宮」（いつきのみや）の略と見る理解である。

平安京右京三条二坊十六町跡（現京都市立西京高等学校）の貴族邸宅跡の発掘調査では、建物跡・池跡と共に、「齋宮」2点、「齋雑所」2点、「齋舎所」2点などの墨書土器が出土している¹⁰⁾。邸宅は、9世紀後半に造営され、900年前後に再整備、池は10世紀後半まで存続する。また、900年前後の邸宅再整備は、齋宮点定に関係する可能性がある。

この事例では、「齋宮」2点が出土したことで、「齋雑所」、「齋舎所」の「齋」も「齋宮」の略で、「齋宮雑色所」、「齋宮舎人所」などの意と推測できた。今回の発掘調査の場合は、「齋」1字の事例のみで、確たることは言い難い。ただし、器種（灰釉陶器）、墨書位置（底部外面）などの共通点が存する。

嵯峨天皇の子女で齋王となったのは、以下の二人である。

一人は、有智子内親王である。母は、山口王の娘の従五位上交野女王。弘仁元年（810）に初代

の賀茂齋王に卜定され、天長8年(831)12月に賀茂齋院から退下するまで21年奉仕した。しかし、承和14年(847)10月に死去している。

もう一人は、仁子内親王である。母は女御大原浄子で、大同4年(809)伊勢齋王に卜定、弘仁2年9月に伊勢に赴き、同14年6月、天皇讓位により伊勢齋宮から退下している。死去したのは、寛平元年(889)正月である。

ただし、両者とも、右京三条三坊五町との関係を直接に示す史料は存在しない。

以上、「齋」の墨書土器について、二つの見方を例示してみた。前述した通り、断定は困難で、他の見方が成立し得る可能性もある。発掘調査成果の活用と共に、中・近世史料も含めた広域的・通時代的検討が必要と思われる。今後の課題として、付記しておきたい。

註

- 1) 『新訂増補版 故実叢書22 禁秘抄考証・拾芥抄』(明治図書出版、1952年)、前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成17 拾芥抄』(八木書店、1998年)。
- 2) 網野善彦「西の京と北野社」(『網野善彦著作集第十三卷中世都市論』岩波書店、2007年、初出1991年)。北野宮寺公文得分注文(『北野社家日記』第七卷、269～278頁)の性格に関しては、網野論文に説明がある。
- 3) 三枝暁子「北野社西京七保神人の成立とその活動」(『比叡山と室町幕府』東京大学出版会、2011年、初出2007年)。
- 4) 渡辺直彦『日本古代官位制度の基礎的考察 増訂版』(吉川弘文館、1978年)。
- 5) 櫛木謙周「首都における手工業の展開」(『官営工房研究会年報』5、1997年)。
- 6) 寺崎保広『長屋王』(吉川弘文館、1999年)。
- 7) 吉野秋二「食器の管理と饗応」(『日本古代社会編成の研究』塙書房、2010年、初出2005年)。
- 8) 『類聚三代格』卷19禁制事貞観9年(849)12月20日付太政官符には、承和2年段階で、嵯峨院・淳和院に「政所」が設置されていたことを示す記述がある。嵯峨院跡では、大規模な発掘調査が実施され、「薬用所」と書かれた木簡、「御膳所」と書かれた墨書土器などが出土している(大覚寺『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告』1997年)。緑釉陶器の出土など、遺物の性格も共通点が多い。冷然院跡の発掘調査事例とあわせ、今回の発掘調査結果との比較検討が必要である。
- 9) 奈良国立文化財研究所『平城宮出土墨書土器集成I』(1983年)墨書土器No19、147。
- 10) 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 平安京右京三条二坊十五・十六町-「齋宮」の邸宅跡-』(2002年)。

付章3 島津製作所5次・6次調査の成果

山本雅和

(1) はじめに

本章では、今回の調査地がある平安京右京三条三坊五町で、これまでに実施した2回の発掘調査の成果を紹介する。五町には1町規模の邸宅があったと考えており、都合3回の調査成果を結び付けることで邸宅の構造の理解を深めることとした¹⁾。

なお、検出遺構については初出の報告の遺構番号を準用する。

(2) 島津製作所5次調査

調査経過

今回の調査地東側に位置する工場(W70号館)建設工事に伴い1985年10月から12月に実施した発掘調査で、島津製作所内で当研究所が実施した5次調査にあたる²⁾。

調査地は右京三条三坊五町北東部及び姉小路南端部にあたる。調査区は南北約49m、東西約27mの長方形に設定した。南東側の紙屋川(天神川)旧流路を避けたため、調査面積は約1,115㎡である(図72)。

層位(図73)

調査区全体に約1.1～1.3mの厚さで既存の建物建設に伴う盛土が行われている。

盛土の下層には0.4～0.7mの厚さで江戸時代の耕作土であるにぶい黄褐色砂泥(西壁5層)・灰色砂泥(西壁6層・10層、南壁2層・3層)などが堆積する。この下層には直径約5cmの礫を含む大規模な洪水に伴う砂礫層(南壁10層、西壁12層)がある。この砂礫層は13次調査で検出した砂礫層(13次調査南壁38層)と同一の紙屋川の氾濫に伴う堆積層であろう。

この下層には、約0.2mの厚さで鎌倉時代から室町時代の耕作土である黒褐色砂泥(西壁24層、南壁29層)などが堆積する。この層の下面は地山となる。

なお、南壁東部では紙屋川旧流路と堤防の構築状況を観察できた。旧流路埋土は直径1～5cmの礫を含む砂礫層や砂泥層で、これらを母材として幅5～6mの堤防が構築されたが、度重なる洪水によって何度も造り替えや補修が行われている。また、堤防の下層部分にも旧流路が広がっていることから(南壁34層)、平安京が造営される段階にあっても紙屋川が土地の利用に影響を与えていた可能性が推測できる。

遺構の概要(図72)

調査では地山上面で遺構検出を行った。鎌倉時代以降の遺構には耕作溝、平安時代の遺構には建物・柱穴列・井戸・溝などがある。

耕作溝群 耕作溝はSD19南側の調査区ほぼ全域で検出した。複数の溝が平行・重複しており、全体としては南北方向が優位である。幅約0.2～0.7m、深さ約0.1～0.2mのものが大部分を占める。

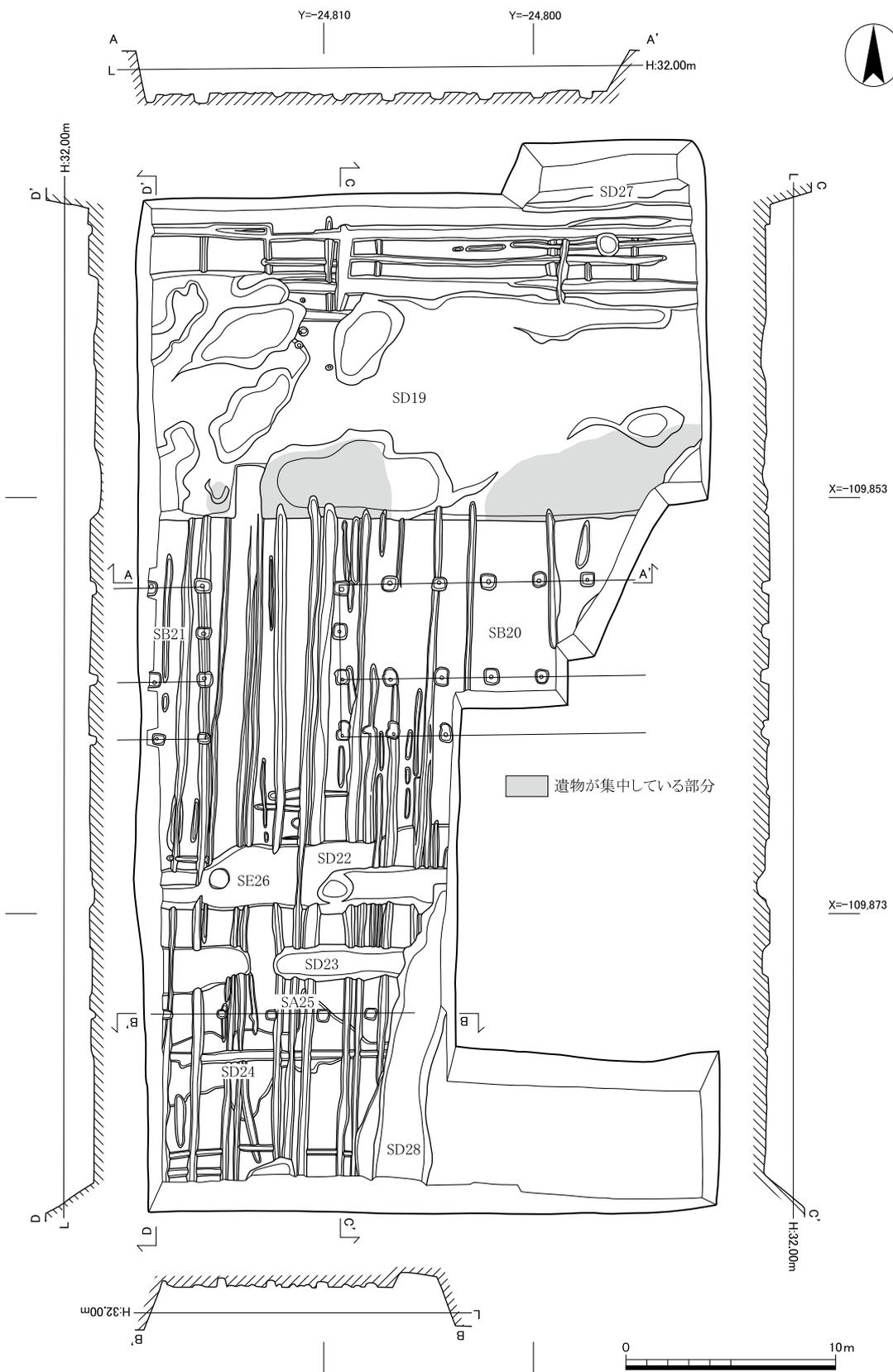


図72 5次調査遺構実測図 (1:300)

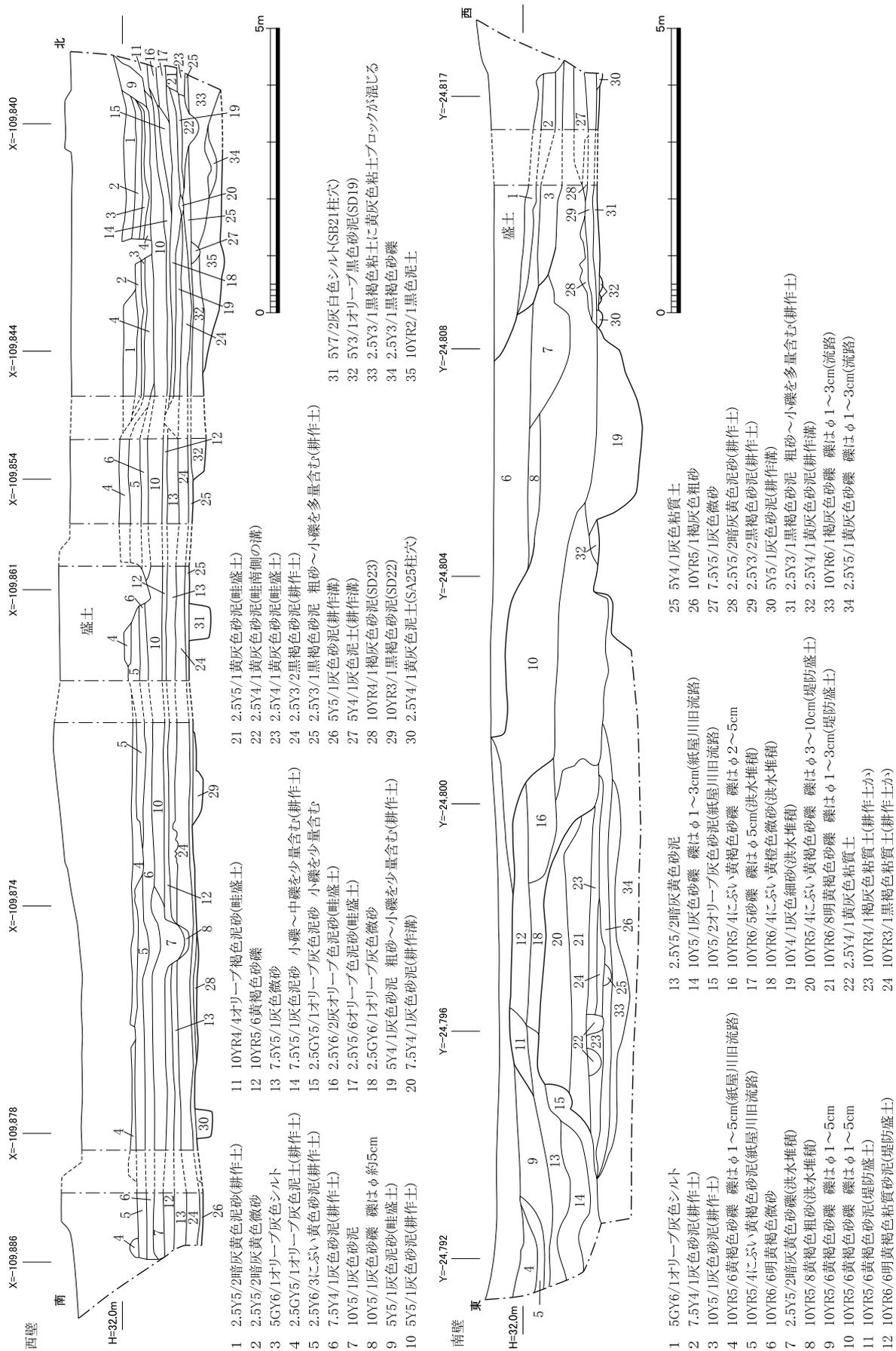
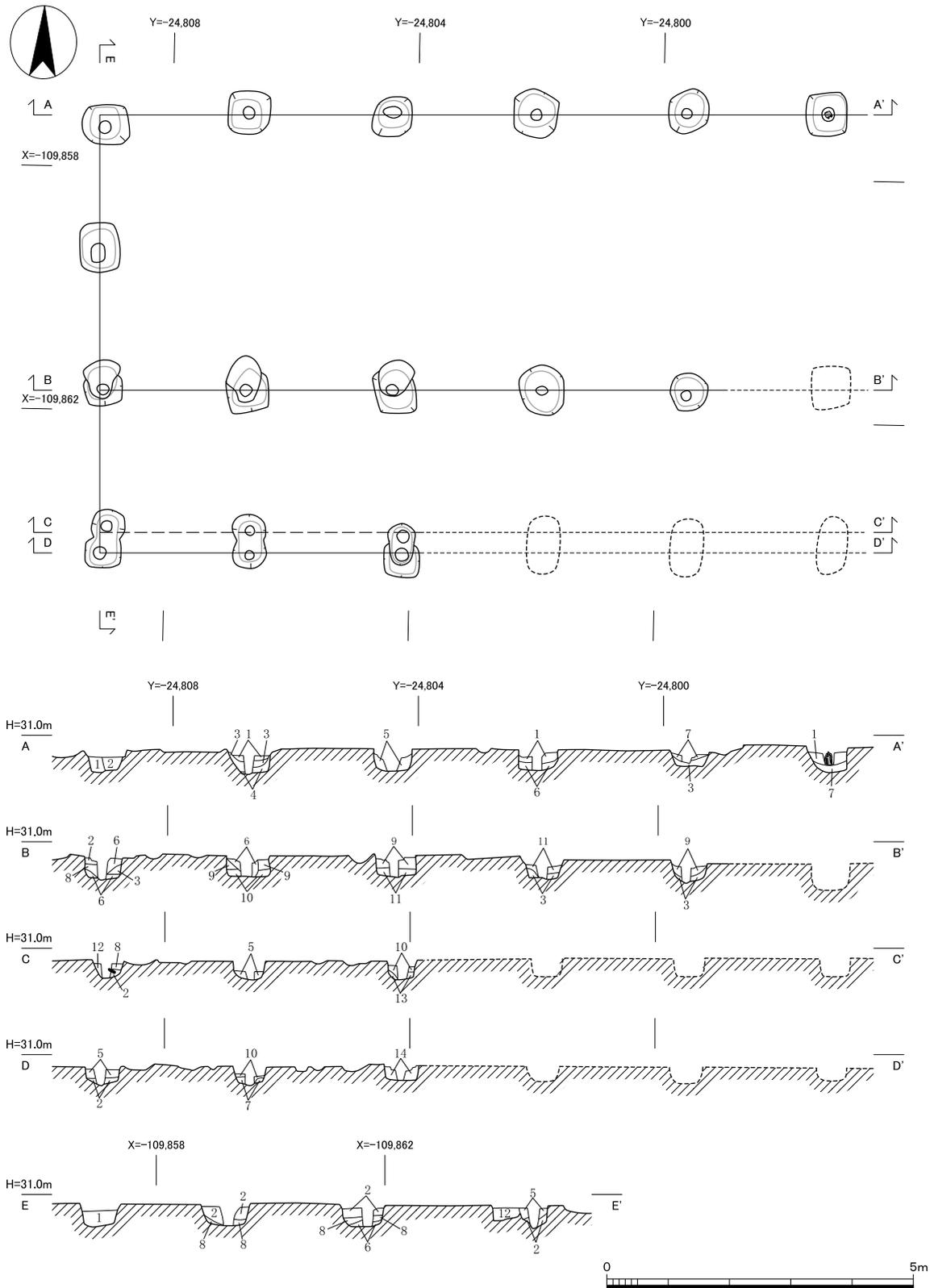


図 73 5次調査西壁・高壁断面図 (1:100)



- | | | |
|------------------|------------------|---------------------|
| 1 2.5Y5/1灰色粘質土 | 6 7.5Y8/3淡黄色粘土 | 11 5Y3/1オリーブ黒色粘土 |
| 2 10YR3/2黒褐色粘質土 | 7 10YR3/1黒褐色粘質土 | 12 10YR7/2にぶい黄橙色粘質土 |
| 3 5Y5/1灰色砂礫 | 8 10YR4/1褐色粘質土 | 13 2.5Y3/1黒褐色粘質土 |
| 4 2.5Y7/4浅黄色粘質土 | 9 5Y5/1灰色粘土 | 14 10YR3/2黒褐色粘土 |
| 5 10YR4/2灰黄褐色粘質土 | 10 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 | |

図74 5次調査S B 20平面図・柱穴断面図 (1 : 100)

13次調査の状況と共通する。

S B 21 西部中部で検出した東西棟の掘立柱建物である。西側は調査区外となるが、13次調査で検出した建物2が該当する。

S B 20 (図74) 中央部で検出した東西棟の掘立柱建物である。南東側は調査区外となるが、桁行5間以上×梁行2間の身舎の南面に庇が付く建物に復元できる。規模は柱穴の芯々間で東西の検出長が約12.0m、南北約7.2mで、身舎の柱間は桁行8尺・梁行7.5尺、庇の出は9尺である。庇の柱列には付け替えの痕跡があり、付け替え前の柱列では庇の出は8尺となる。柱列は北で2度西へ振る方位を取る。柱穴の平面形は、ほぼ方形で、規模は一辺0.5～0.7m、深さ0.2～0.3mである。すべて柱穴の中央には直径約15cmの柱あたりの痕跡があり、北東隅の柱穴には柱根が残されていた。礎板は使用していない。掘形の埋土は灰色粘質土・黒褐色粘質土などである。S B 21 (建物2)と東西に並ぶ位置にあり、柱間がS B 21 (建物2)と共通することから、同一規模の桁行6間×梁行2間の身舎の南面に庇が付く建物であった可能性が高い。

S A 25 南部で検出した東西方向の柱穴列である。東側は紙屋川旧流路に攪乱され、西側は調査区外へ延長する。検出した柱穴は5基で、検出長は約9.6m、柱間は8尺等間である。柱穴は一辺0.4～0.5mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。柱穴の中央には直径約20cmの柱あたりの痕跡があるが、柱根は残っていない。13次調査で検出した南北方向の柱穴列2が関連する遺構である可

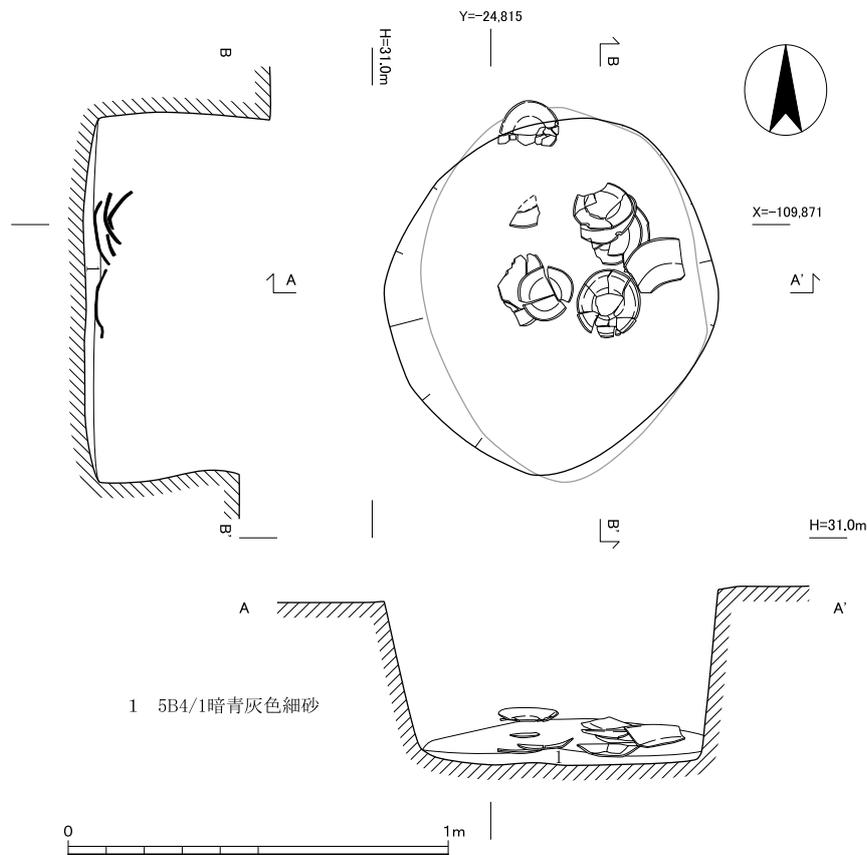


図75 5次調査S E 26実測図 (1 : 20)

能性がある。

SD 19 北部で検出した東西方向の溝状の落込みで、東側は紙屋川旧流路に攪乱され、西側は調査区外へ延長する。幅11.0～12.0m、深さ0.2～0.3mで底面には凹凸がある。埋土は暗灰色砂泥・暗青灰色シルトで、下部には淡灰褐色砂礫が堆積する。13次調査の溝810に対応する。京都I期新段階の土器・陶器類が大量に出土した。

SD 22 中央部で検出した東西方向の溝で、東側は紙屋川旧流路に攪乱され、西側は調査区外へ延長する。断面形は北側が浅くなるU字形で、検出長約13.5m、幅約1.8m、深さ0.2～0.4mである。埋土は暗褐色砂泥である。13次調査の溝90に対応する。

SD 23 南部で検出した東西方向の溝で、東側は紙屋川旧流路に攪乱され、西側は調査区外へ延長する。また、調査区内でいったん途切れる。断面形は皿型で、検出長約11.4m、幅約1.8m、深さ0.2～0.4mである。埋土は暗褐色砂泥である。13次調査の溝90に対応する。

SD 24 南部で検出した東西方向の溝で、東側は紙屋川旧流路に攪乱され、西側は調査区外へ延長する。断面形は浅いU字形で、検出長約10.8m、幅約0.6m、深さ0.1～0.2mである。埋土は暗茶褐色砂泥である。13次調査の溝46に対応する。

SE 26 (図75) 西部中央で検出した素掘りの井戸で、SD 22と重複するが、SE 26のほうが古い。平面形は直径約0.9mの円形で、深さ約0.5mである。埋土は底部に厚さ約5cmの暗青灰色細砂、他は腐植土をわずかに含む暗青灰色シルトである。細砂層上面から京都I期新段階の土師器・須恵器が重なって出土した。これまでの調査で五町域にて検出した唯一の井戸である。

(3) 島津製作所6次調査

調査経過

今回の調査地南東側に位置する工場(W13号館)建設工事に伴い1988年8月から11月に実施した発掘調査で、島津製作所内で当研究所が実施した6次調査にあたる³⁾。

調査地は右京三条三坊五町中央部南東寄りにあたり、東部には紙屋川(天神川)旧流路が重複する。調査区は一部に拡張部分を含む南北約30m、東西約55mの長方形に設定した。調査面積は約1,650㎡である(図76)。

層位(図77)

調査区全体に約0.8～1.0mの厚さで既存の建物建設に伴う盛土が行われている。

盛土の下層には0.4～0.7mの厚さで江戸時代の耕作土である褐色泥砂(北壁7層、西壁3層)・黄褐色泥砂(北壁20層、西壁5層)などが堆積する。この下層には洪水に伴う砂礫層(北壁21層、西壁6層)で、13次調査や5次調査で検出した砂礫層(13次調査南壁38層、5次調査南壁10層)と同一の紙屋川の氾濫に伴う堆積層であろう。

この下層には、別の洪水堆積層(北壁41層・44層、西壁7層・9層)を挟んで、約0.2～0.3mの厚さで鎌倉時代から室町時代の耕作土である灰色泥砂(北壁47層・西壁13層)や灰色砂泥(北壁50層・西壁16層)などが堆積する。この層の下面は地山となる。

なお、5次調査と同様、北壁東部では紙屋川旧流路と堤防の構築状況を観察できた。旧流路は断面形が漏斗形で、幅8m以上、深さ約2mになる。埋土は大きな礫を含む砂礫である。旧流路西側にはこれらを母材として最大幅約4m、高さ約1mの堤防が構築されたが、度重なる洪水によって何度も造り替えや補修が行われている。また、堤防の嵩上げに伴い紙屋川が天井川化している様子も看取できる。

遺構の概要 (図76)

調査では地山上面で遺構検出を行った。鎌倉時代以降の遺構には耕作溝、平安時代の遺構には建物・柱穴列・溝などがある。

耕作溝群 図示していないが、耕作溝は調査区ほぼ全域で検出した。複数の溝が平行・重複しており、全体としては南北方向が優位である。幅約0.2～0.7m、深さ約0.1～0.2mのものが大部分を占める。13次調査・5次調査の状況と共通する。

S B 55 (図78・79) 中央部西寄りで検出した南北棟の掘立柱建物である。桁行5間×梁行2間の身舎の東面に庇、南北それぞれに縁が付く。規模は柱穴の芯々間で南北約20.7m、東西約7.8mで、身舎の柱間は桁行10尺・梁行8尺、庇の出は10尺である。北縁の柱穴列は付け替えられており、付け替え前では縁の出は9尺、後では11尺となる。また、南縁の出は8尺で、身舎に対応して3基の柱穴が並ぶが、庇の延長上の柱穴は間隔が10尺で異なっている。柱穴の平面形は抜き取り穴により攪乱されている部分があるが、ほぼ方形で、規模は身舎が一辺約1.2m、深さ0.4～0.8m、庇が一辺約0.8m、深さ0.3～0.5m、縁が一辺0.4～0.5m、深さ約0.2mである。柱は大部分が抜き取られていたが、柱根や礎板が残る柱穴もある。埋土は抜き取り穴がオリーブ黒色粘土など、掘形が灰白色粘土やオリーブ黒色粘土のブロック土などで、掘形には河原石や瓦を充填している状況から根固めに利用されたことが推測できる。

S B 56 (図80・81) 西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。桁行7間×梁行2間の身舎の南面に庇が付く。規模は柱穴の芯々間で東西約21.0m、南北約8.4mで、身舎の柱間は桁行10尺・梁行8尺、庇の出は12尺である。柱穴の平面形は抜き取り穴により攪乱されている部分があるが、ほぼ方形で、規模は身舎が一辺約1.2m、深さ0.4～0.8m、庇が一辺約0.8m、深さ0.3～0.5mである。柱根・礎板、柱穴埋土の状況はS B 55と共通する。

なお、S B 55とS B 56それぞれの身舎北側の柱筋は一直線に並ぶことから2棟の建物が計画的に配置されたことがわかる。

S A 59 S B 55北側で検出した南北方向の柱穴列で、S B 55身舎東側柱筋に並び、北側は調査区外へ延長する。検出した柱穴は2基で、検出長は約5.4m、柱間は9尺である。平面形は一辺約0.4の隅丸方形で、深さは約0.3mである。柱穴の1基には直径約15cmの柱あたりの痕跡があるが、柱根は残っていない。

S A 60 S B 56南側で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は13基で、検出長は約10.4mである。柱間は不揃いで、同一線上に並ばない。平面形は一辺0.3～0.4mの隅丸方形もしくは長方形で、深さは約0.1mである。柱穴の中には直径約10cmの柱あたりの痕跡があるが、柱根は

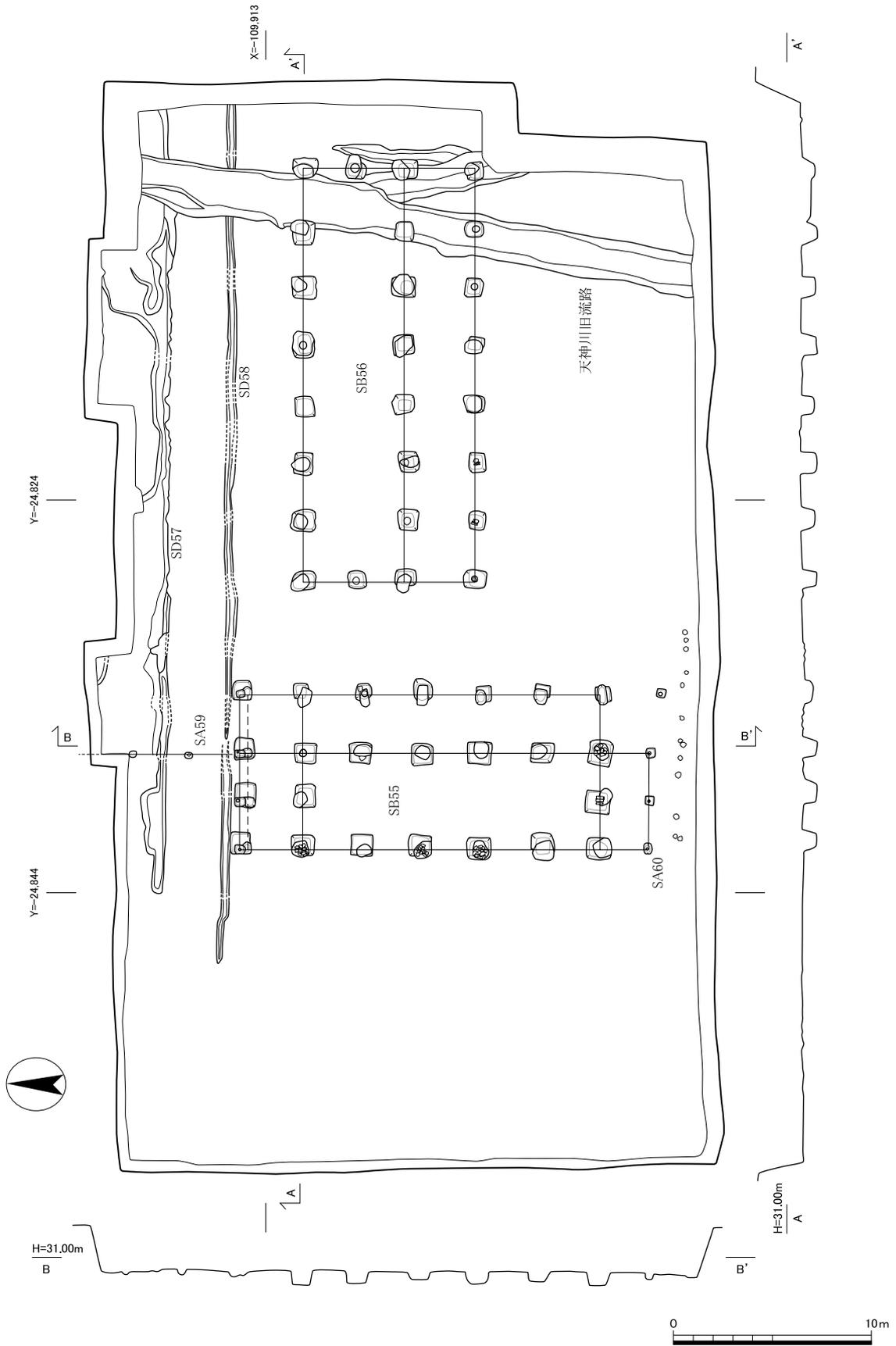


图76 6次調査遺構実測図 (1 : 300)

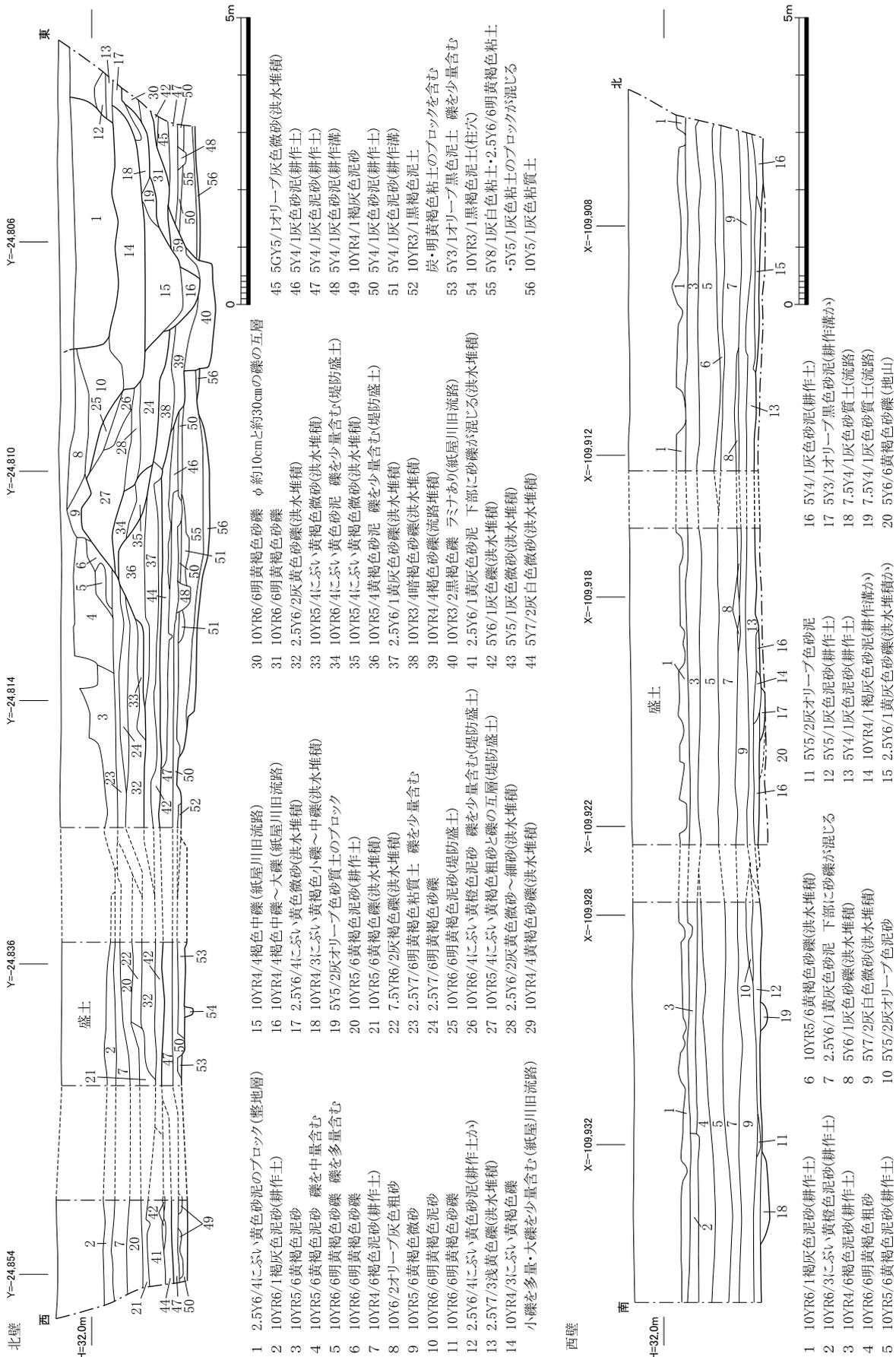


図 77 6次調査北壁・西壁断面図 (1 : 100)

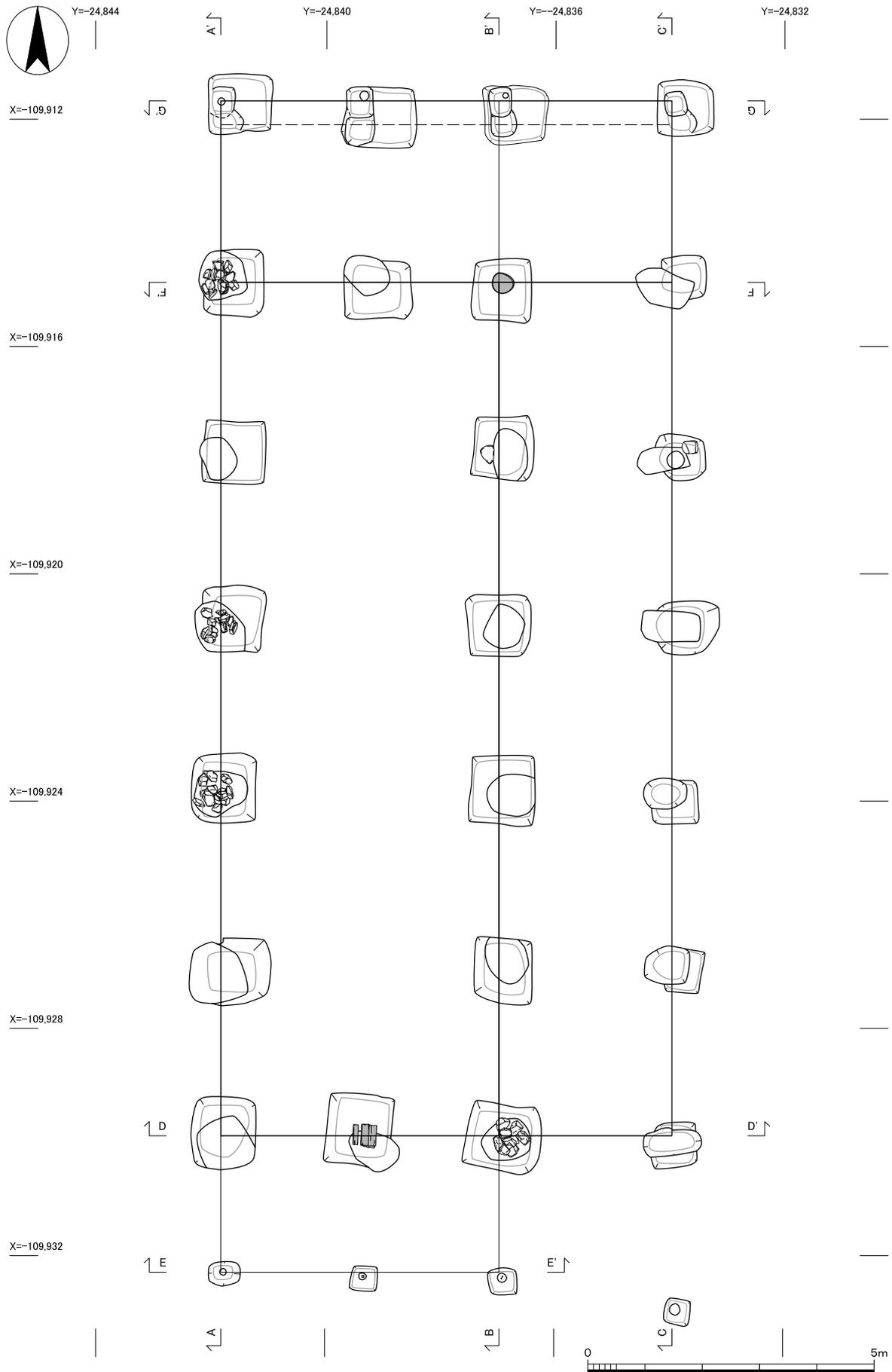


图78 6次調査S B 55平面図 (1 : 100)

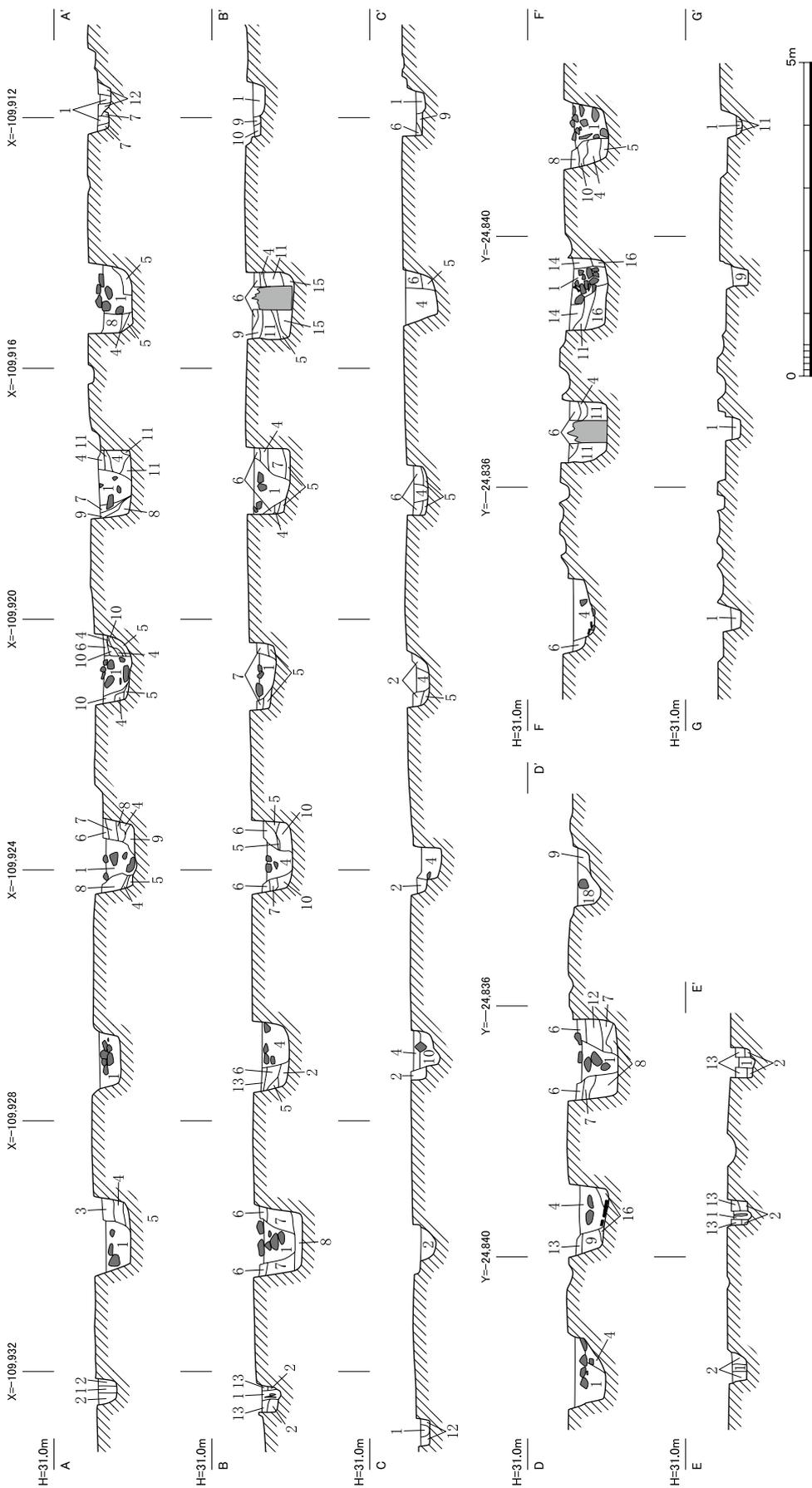


図79 6次調査S B 55柱穴断面図 (1 : 100)

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 5Y3/1オリーブ黒色粘土 2 2.5Y3/1黒褐色砂泥 3 5Y6/1灰色砂礫に5Y3/1オリーブ黒色粘土のブロックが混じる 4 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 5 5G7/1明緑灰色砂礫 6 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 7 5Y3/1オリーブ黒色粘土と5Y8/1灰白色粘土のブロックが混じる 8 5Y8/1灰白色粘土 | <ul style="list-style-type: none"> 9 5Y3/1オリーブ黒色粘土のブロック土 10 2.5Y7/4浅黄色砂泥 11 2.5Y8/6黄色粘土 12 2.5Y8/8黄色粘土と5Y8/1灰白色粘土のブロックが混じる 13 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 14 10YR7/2にぶい黄褐色砂泥 15 5B6/1草灰色粘土 16 5Y8/3淡黄色粘土 |
|---|--|

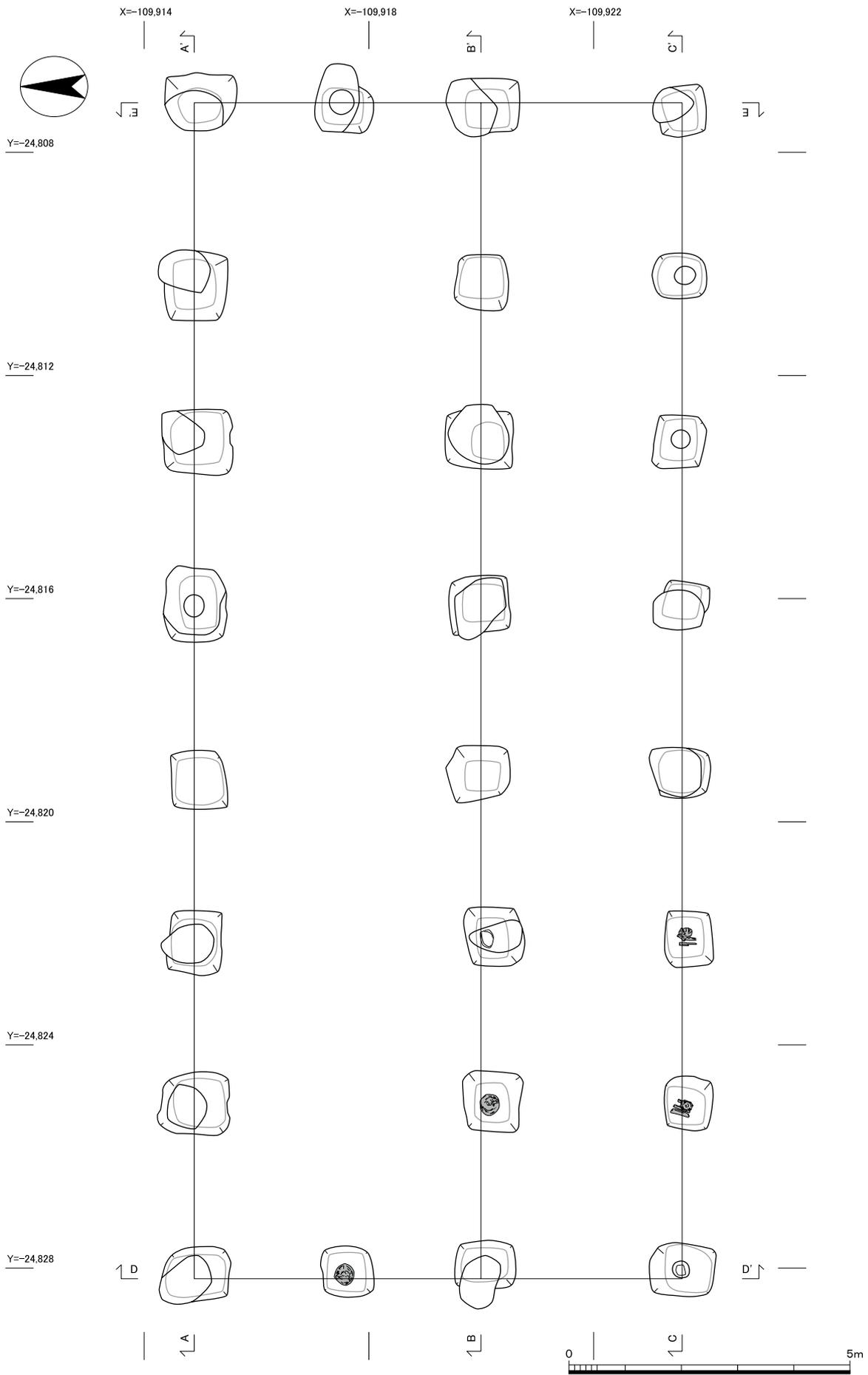
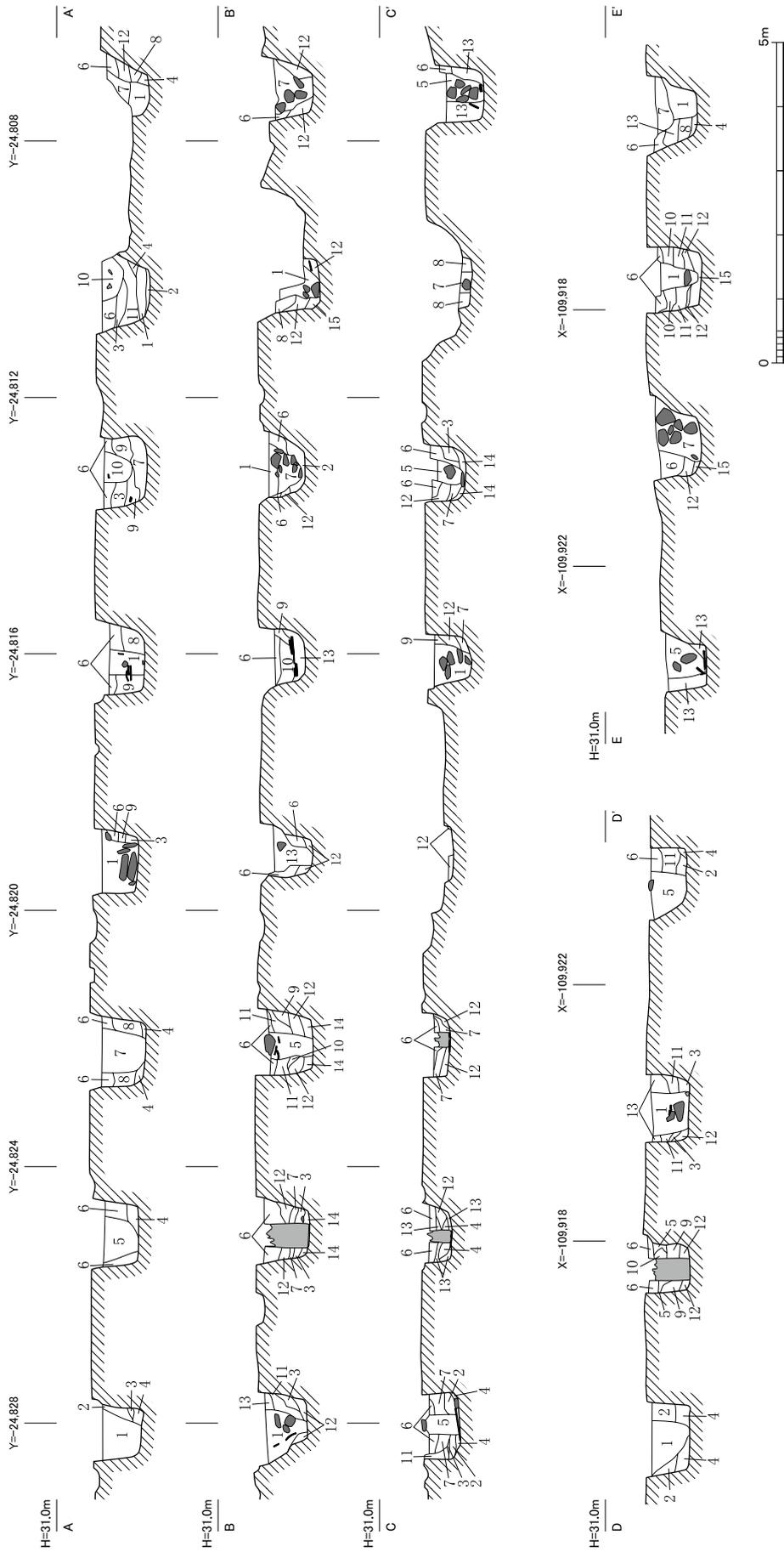


图80 6次調査S B 56平面図 (1 : 100)



- 9 7.5Y7/1灰白色粘土と7.5Y3/1オリープ黒色粘土のブロックが混じる
- 10 7.5Y3/1オリープ黒色粘土に10YR6/4にふい、黄褐色粘土ブロックが混じる
- 11 7.5Y3/1オリープ黒色粘土に2.5Y8/8黄褐色粘土ブロックが混じる
- 12 7.5Y3/1オリープ黒色粘土(砂礫を含む)
- 13 10YR6/4にふい、黄褐色砂泥に7.5Y3/1オリープ黒色粘土ブロックが混じる
- 14 7.5GY7/1明緑灰色泥砂
- 15 5G7/1明緑灰色粘土

- 1 7.5Y3/1オリープ黒色粘土
- 2 10Y5/1灰色砂泥
- 3 7.5Y3/1オリープ黒色粘土のブロック土
- 4 10Y6/1灰色砂礫
- 5 7.5Y3/1オリープ黒色粘土に7.5Y7/1灰白色粘土ブロックが混じる
- 6 10YR6/4にふい、黄褐色砂泥
- 7 10YR4/2灰黄褐色粘土
- 8 7.5Y7/1灰白色粘土に7.5Y3/1オリープ黒色粘土ブロックが混じる

図81 6次調査S B 56柱穴断面図 (1 : 100)

残っていない。

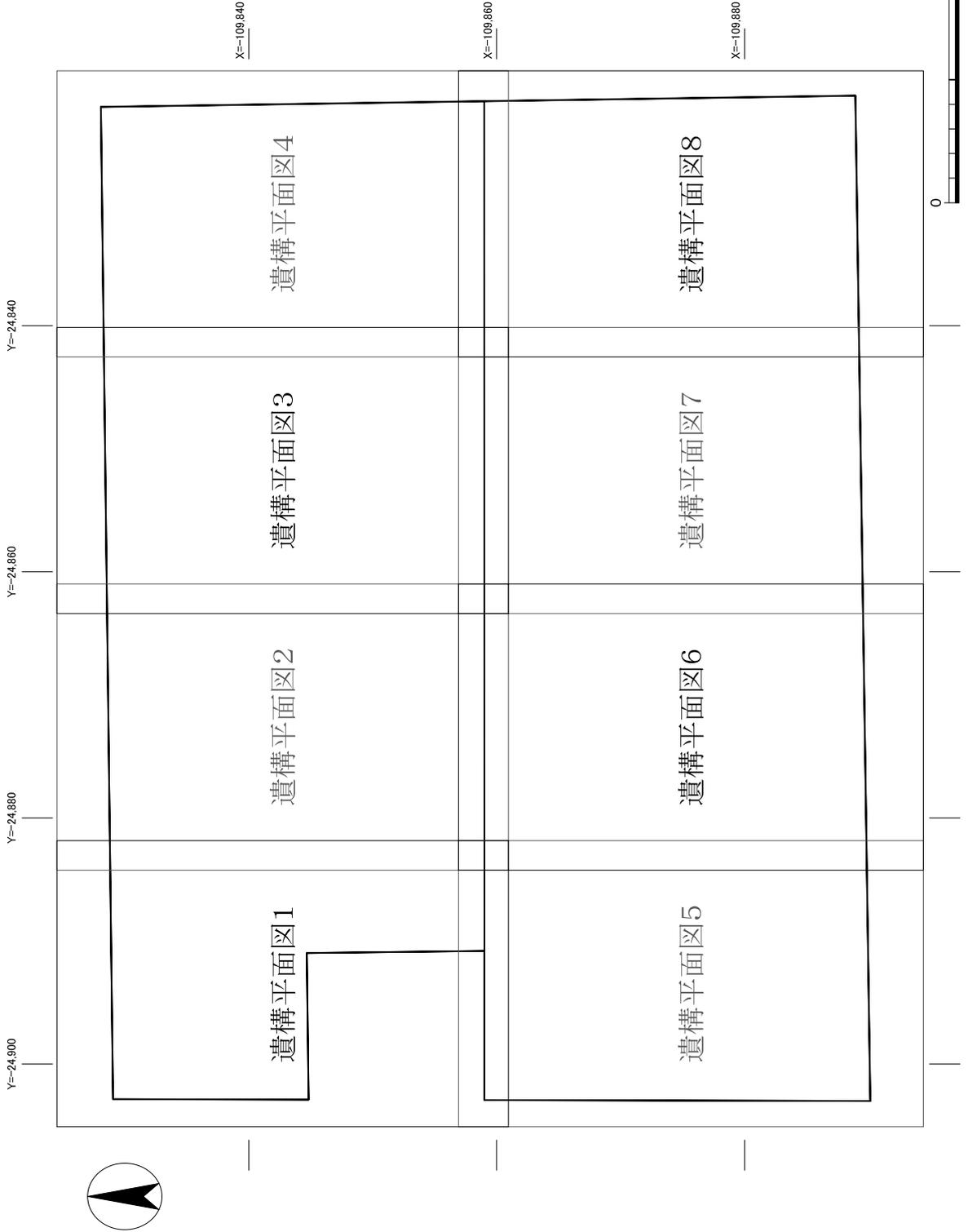
S D 57 北部で検出した東西方向の溝で、東側は調査区外へ延長し、西側は調査区内で途切れる。断面形は浅いU字形で、部分的に北側で広がっており、検出長約39.5m、幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2mである。

S D 58 北部で検出した東西方向の溝で、東側は調査区外へ延長し、西側は調査区内で途切れる。断面形は浅いU字形で、検出長約44.5m、幅0.3～0.4m、深さ約0.1mである。S B 55の北縁に接しており、S D 57とは芯々間で約2.2mの間隔で平行する。S D 57・S D 58は邸宅内の通路の側溝であった可能性もある。

註

- 1) 5次調査・6次調査の調査状況や遺構の時期・評価については、調査担当者の平尾政幸氏より御教示をいただいた。
- 2) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1990年にて概要を報告している。
- 3) 「平安京右京三条三坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993年にて概要を報告している。

圖 版



遺構平面図割付図 (1 : 500)



Y=-24,900

Y=-24,890

X=-109,830

溝799

路面800

溝(水路)801

X=-109,840

盛土809

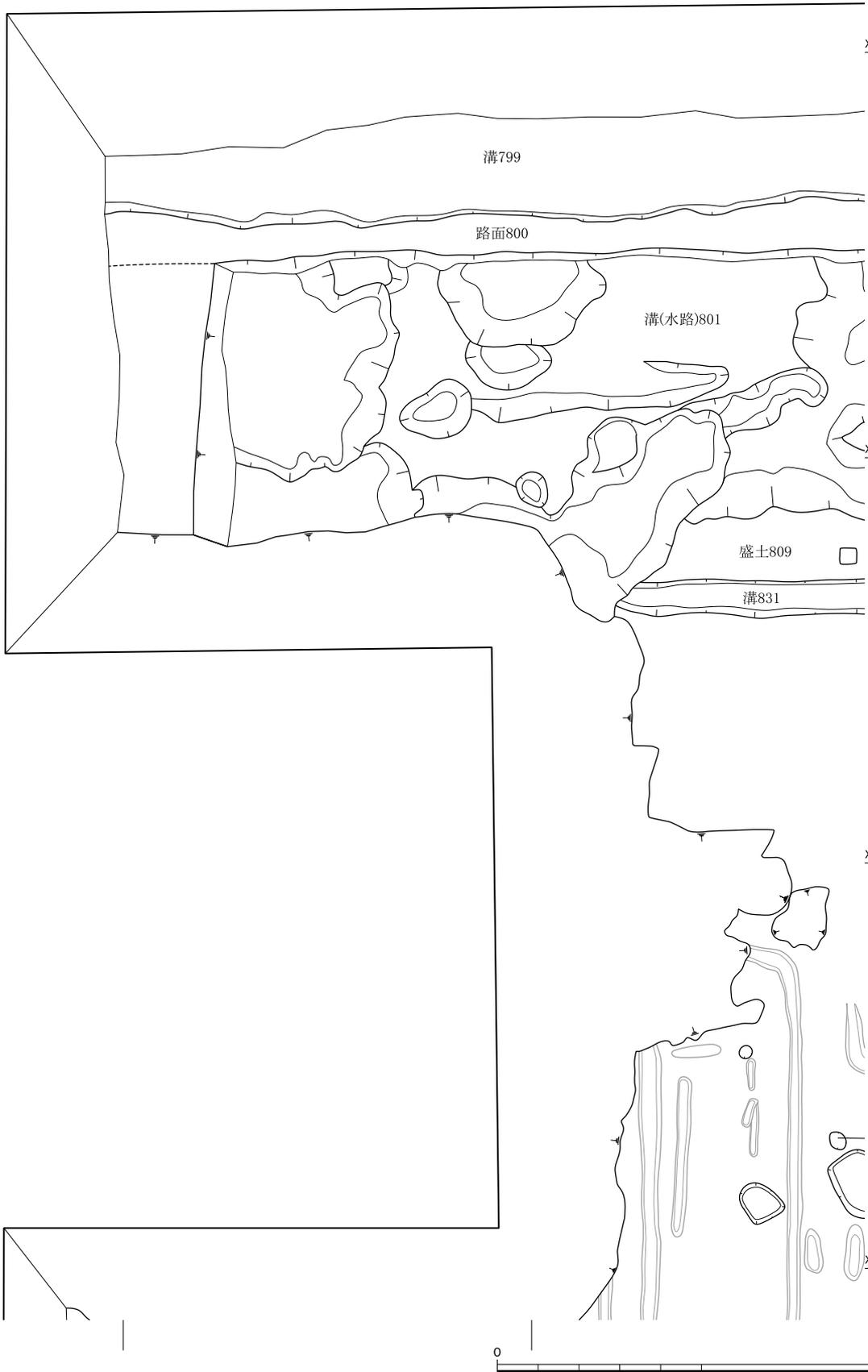
溝831

X=-109,850

X=-109,860

0 10m

遺構平面図1 (1 : 150)





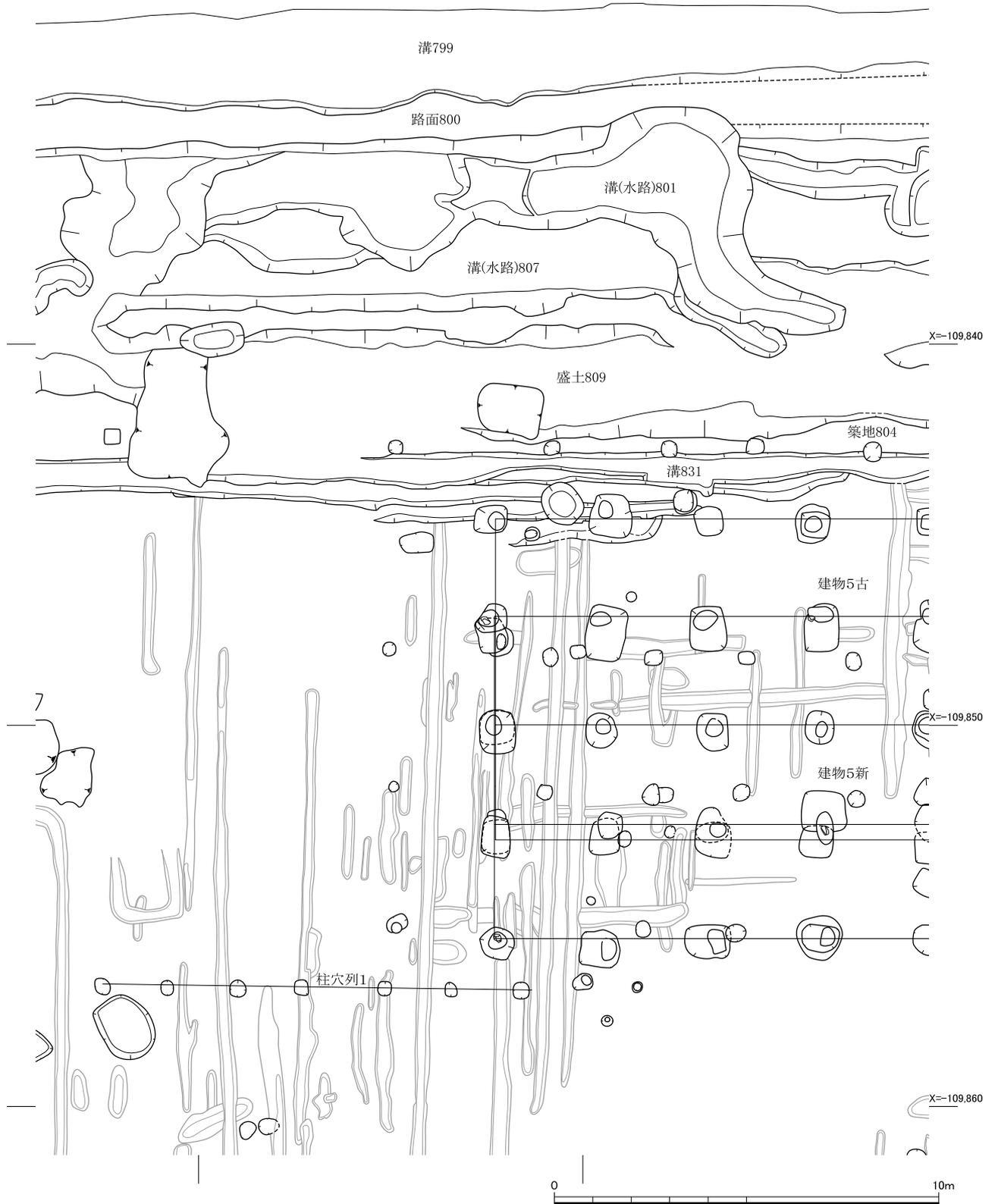
Y=-24,880

Y=-24,870

図版
3

遺構

X=-109,830



遺構平面図2 (1 : 150)

図版4
遺構



Y=-24,860

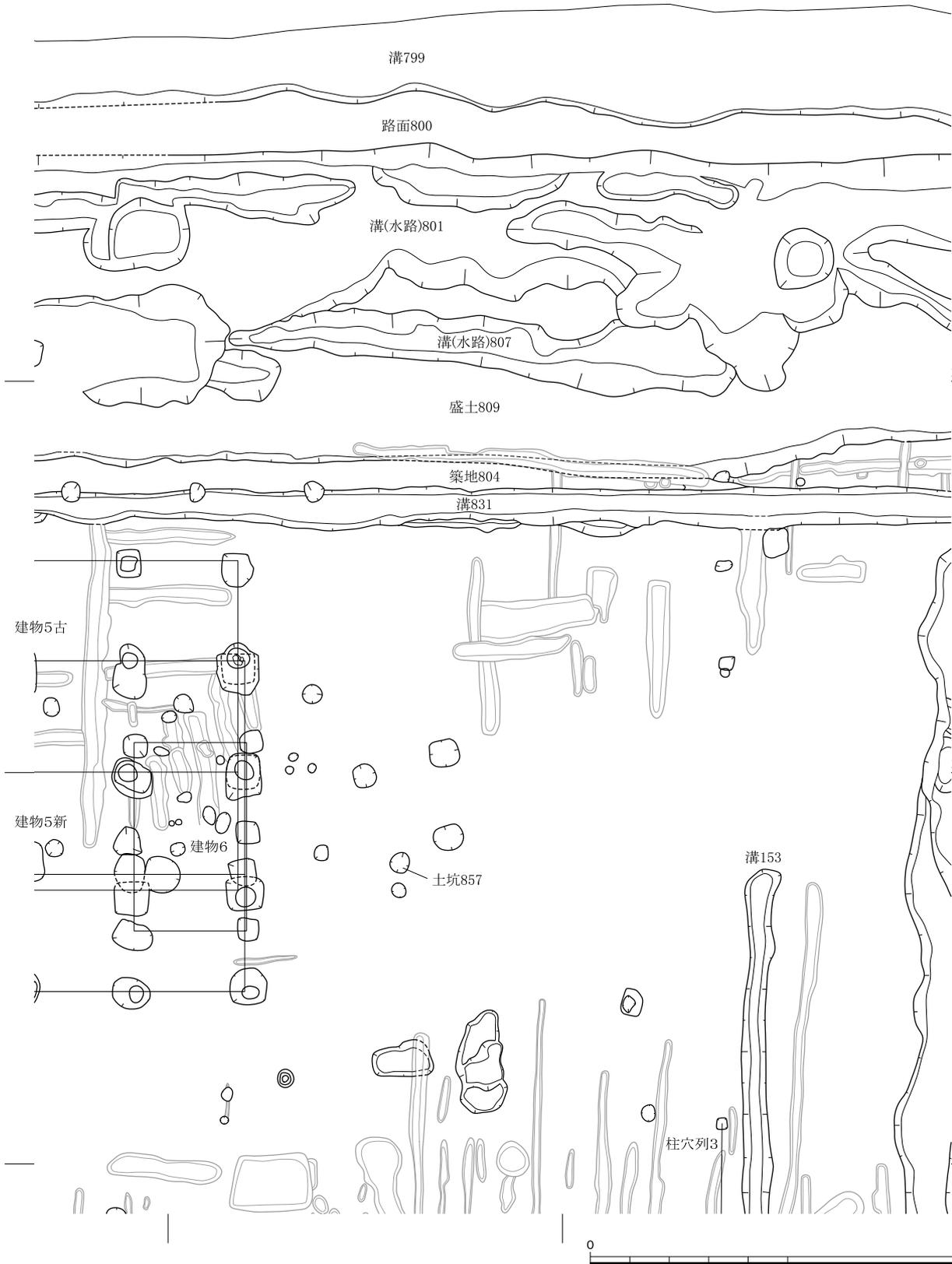
Y=-24,850

X=-109,830

X=-109,840

X=-109,850

X=-109,860



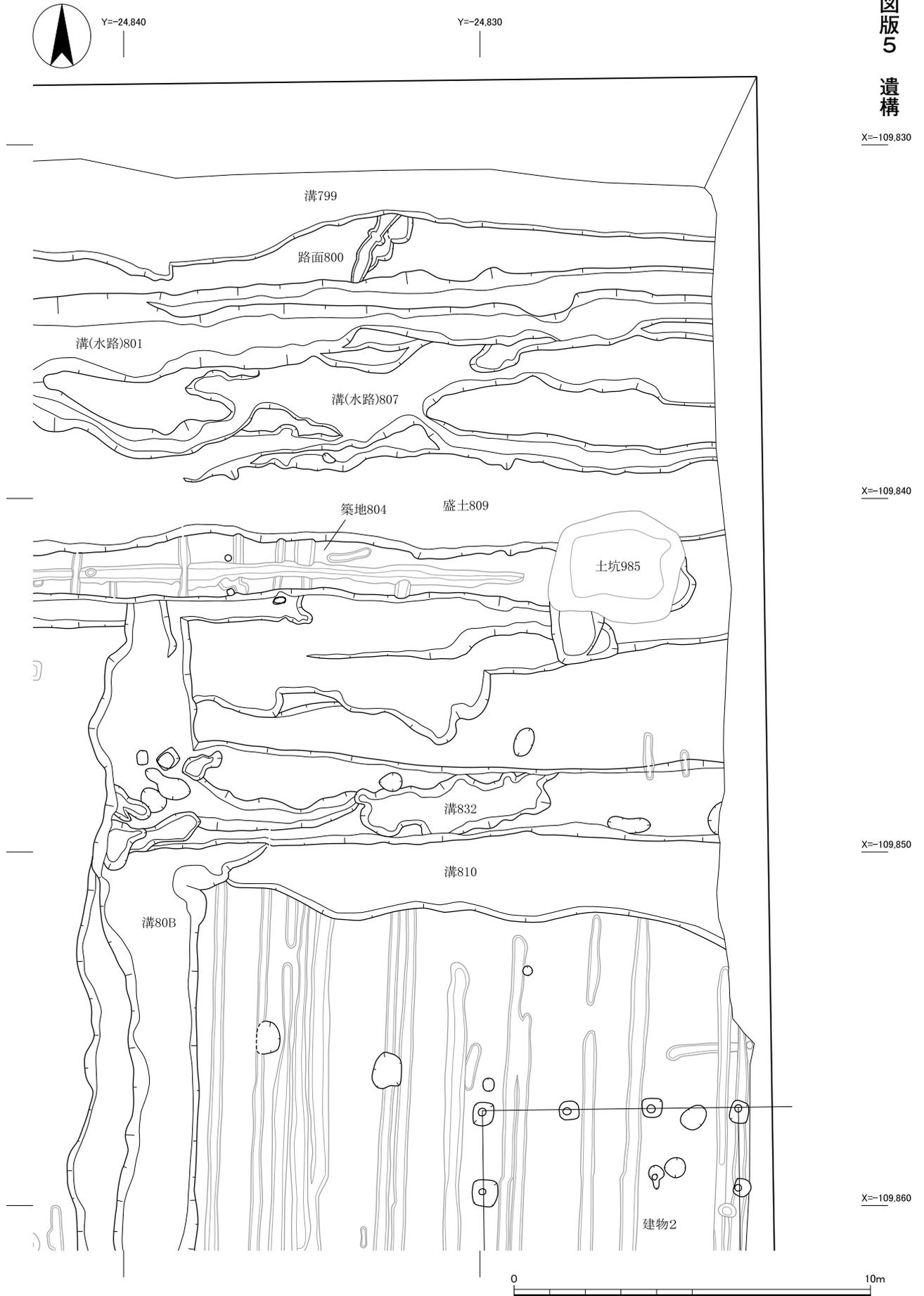
遺構平面図3 (1 : 150)

X=109.830

X=109.840

X=109.850

X=109.860



遺構平面図4 (1 : 150)



Y=-24,900

Y=-24,890

X=-109,860

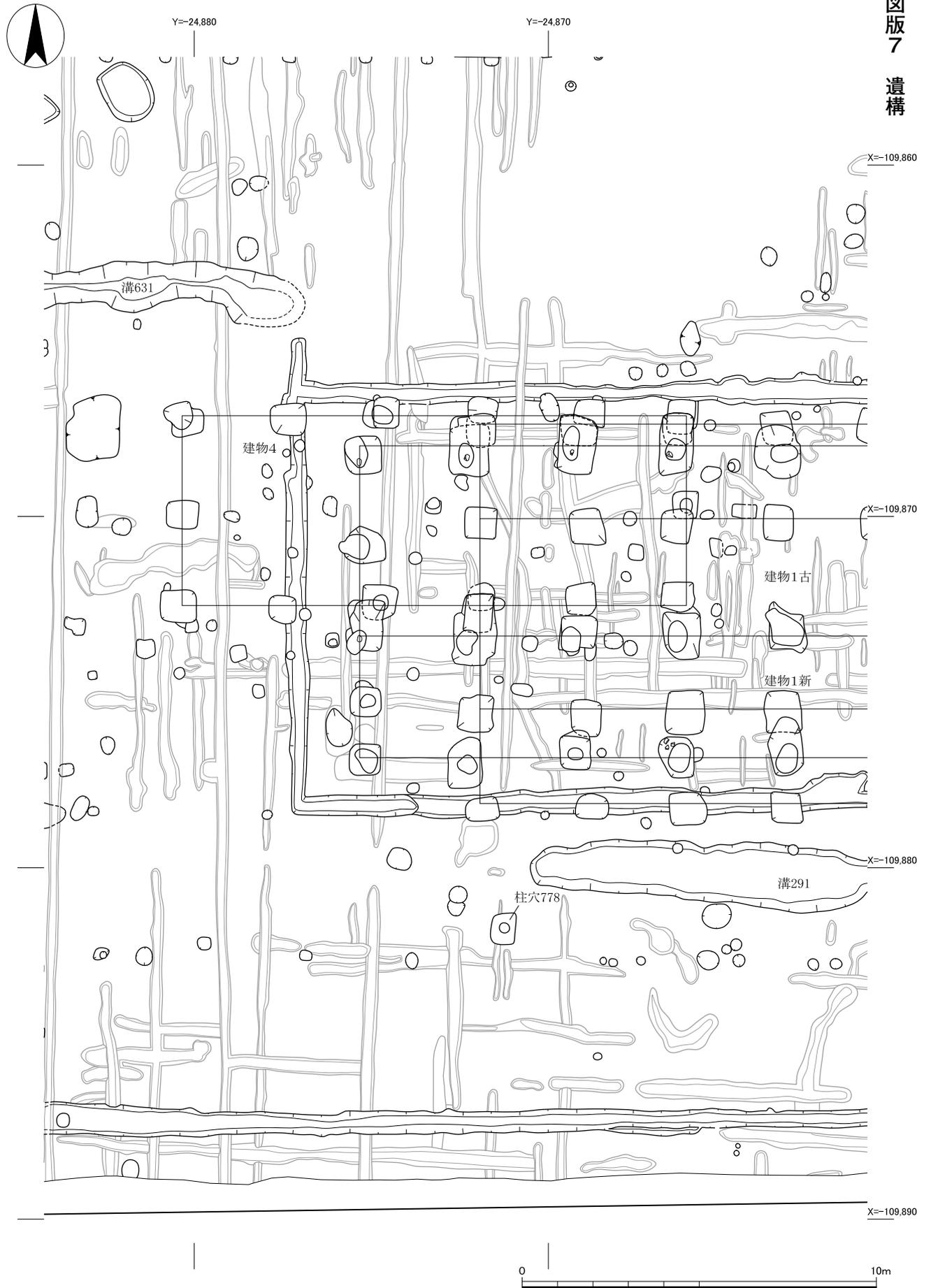
X=-109,870

X=-109,880

X=-109,890



遺構平面図5 (1 : 150)



遺構平面図6 (1 : 150)

図版
8
遺構



Y=-24,860

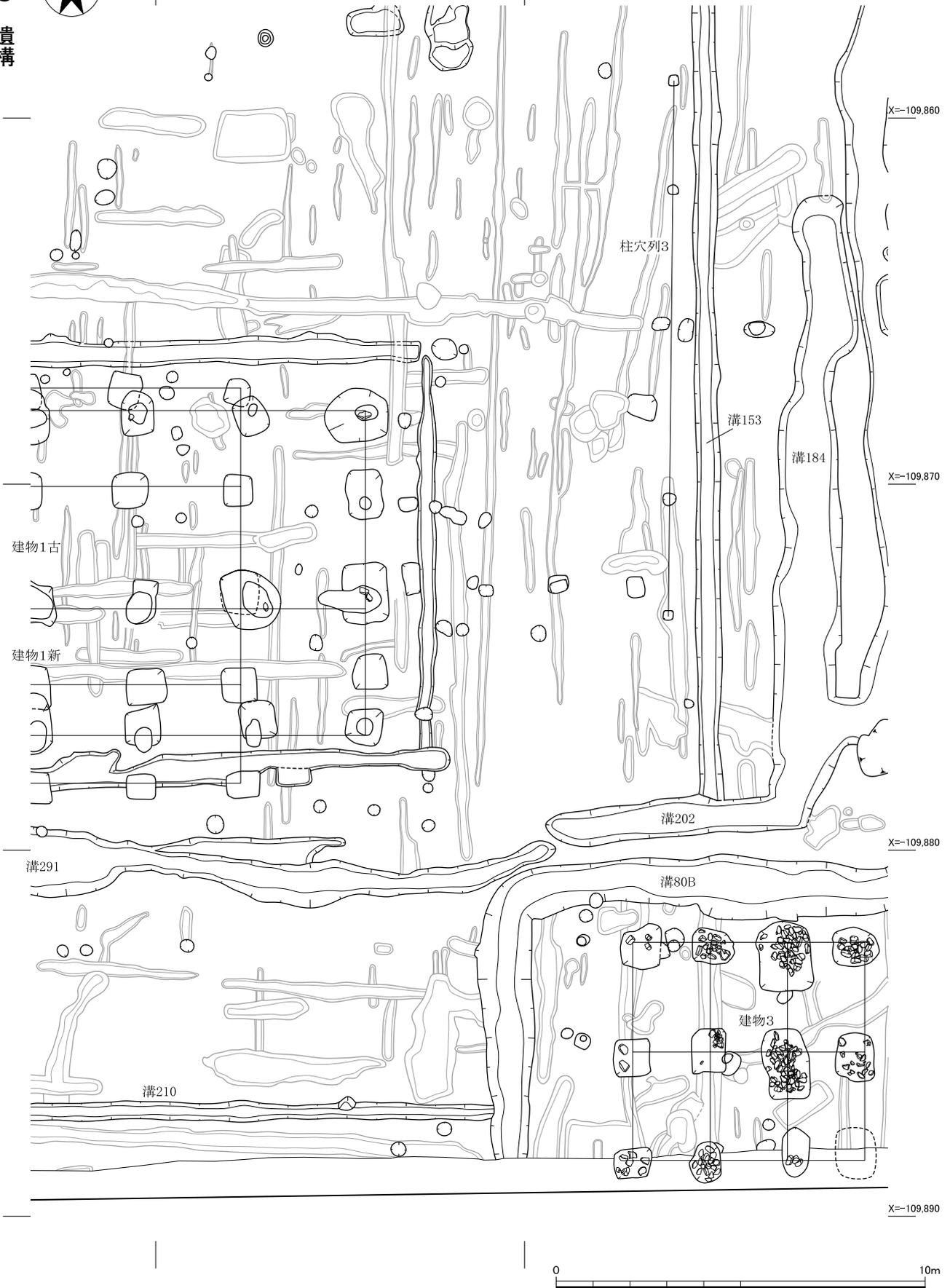
Y=-24,850

X=-109,860

X=-109,870

X=-109,880

X=-109,890



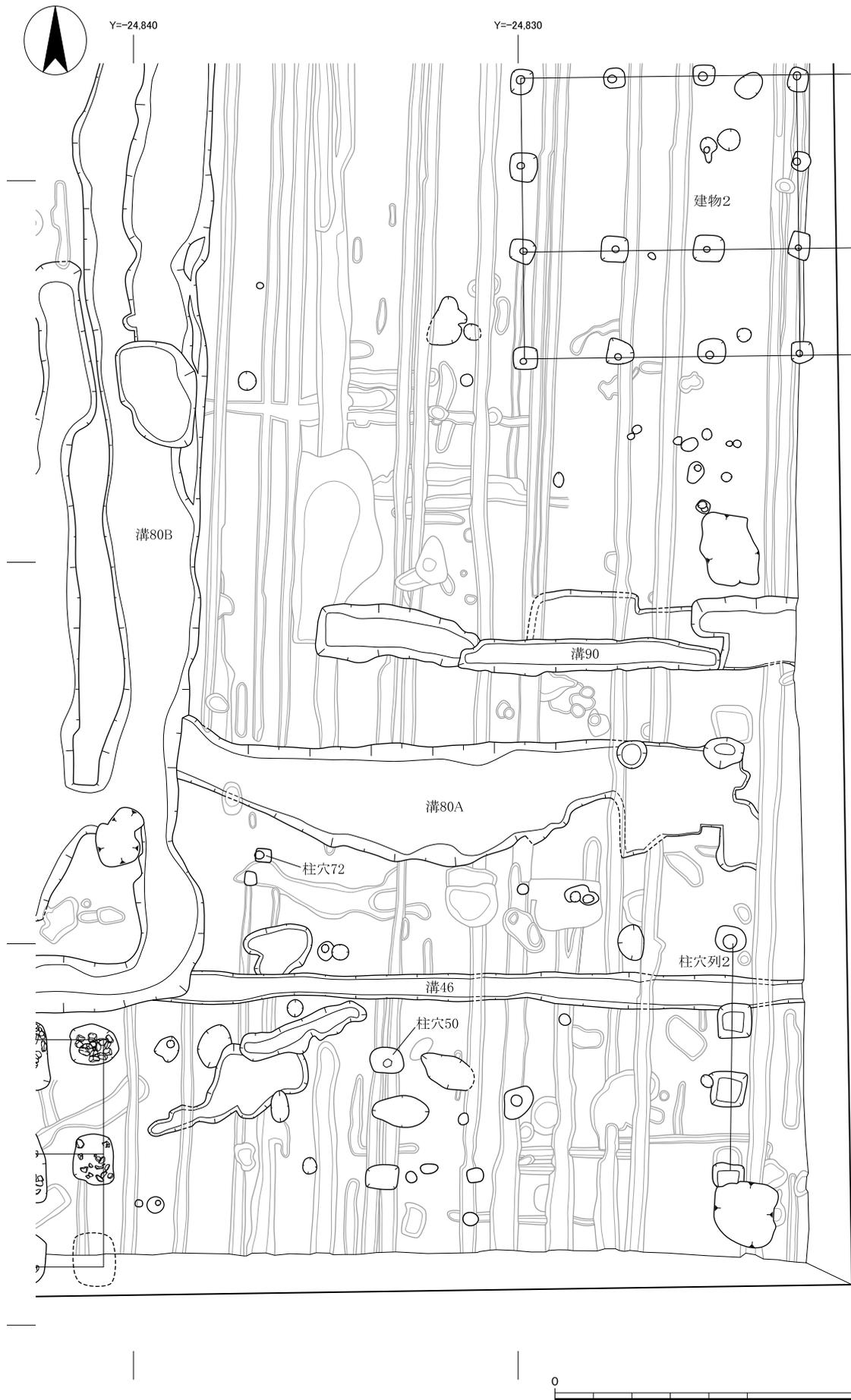
遺構平面図7 (1 : 150)

X=-109.860

X=-109.870

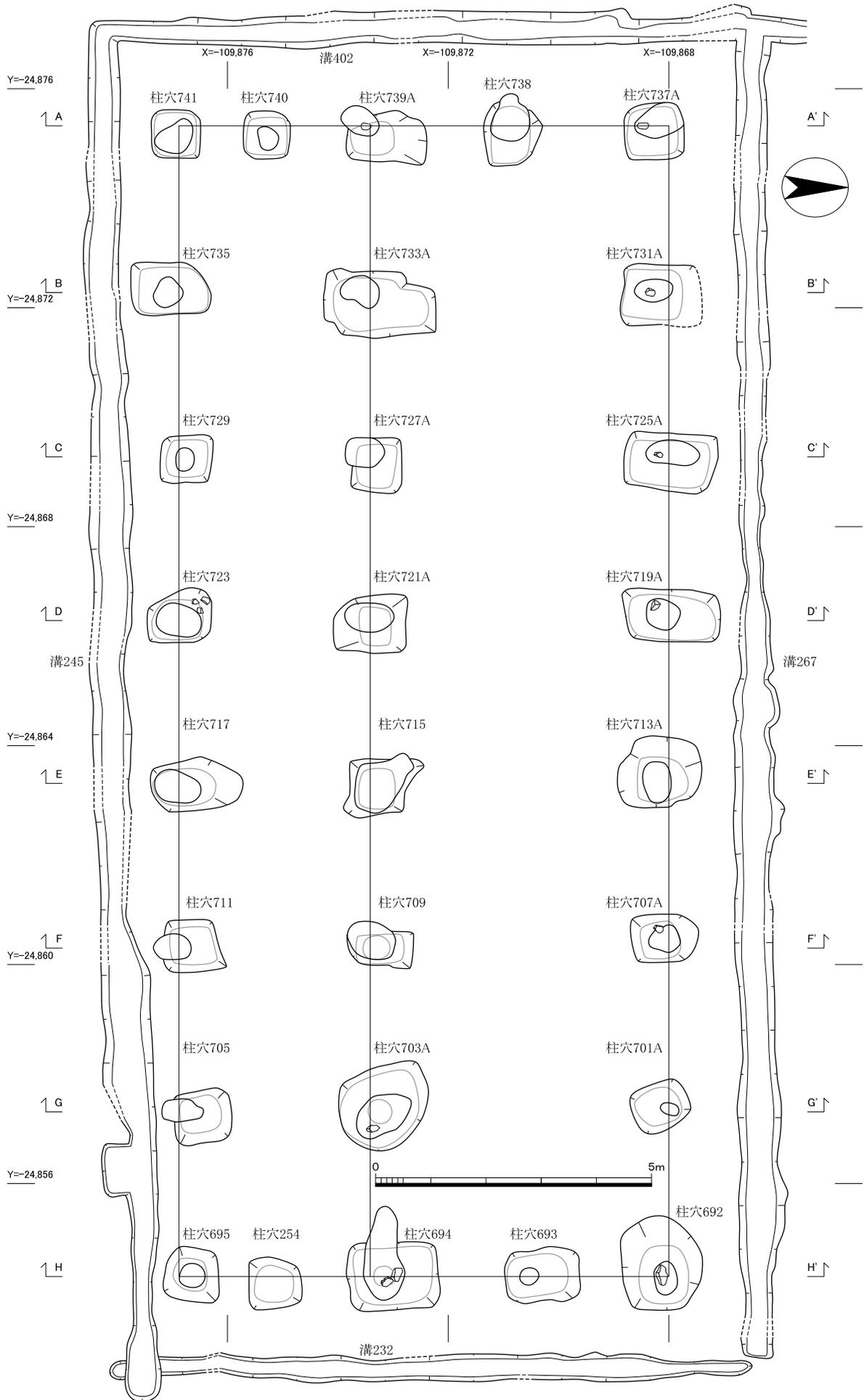
X=-109.880

X=-109.890



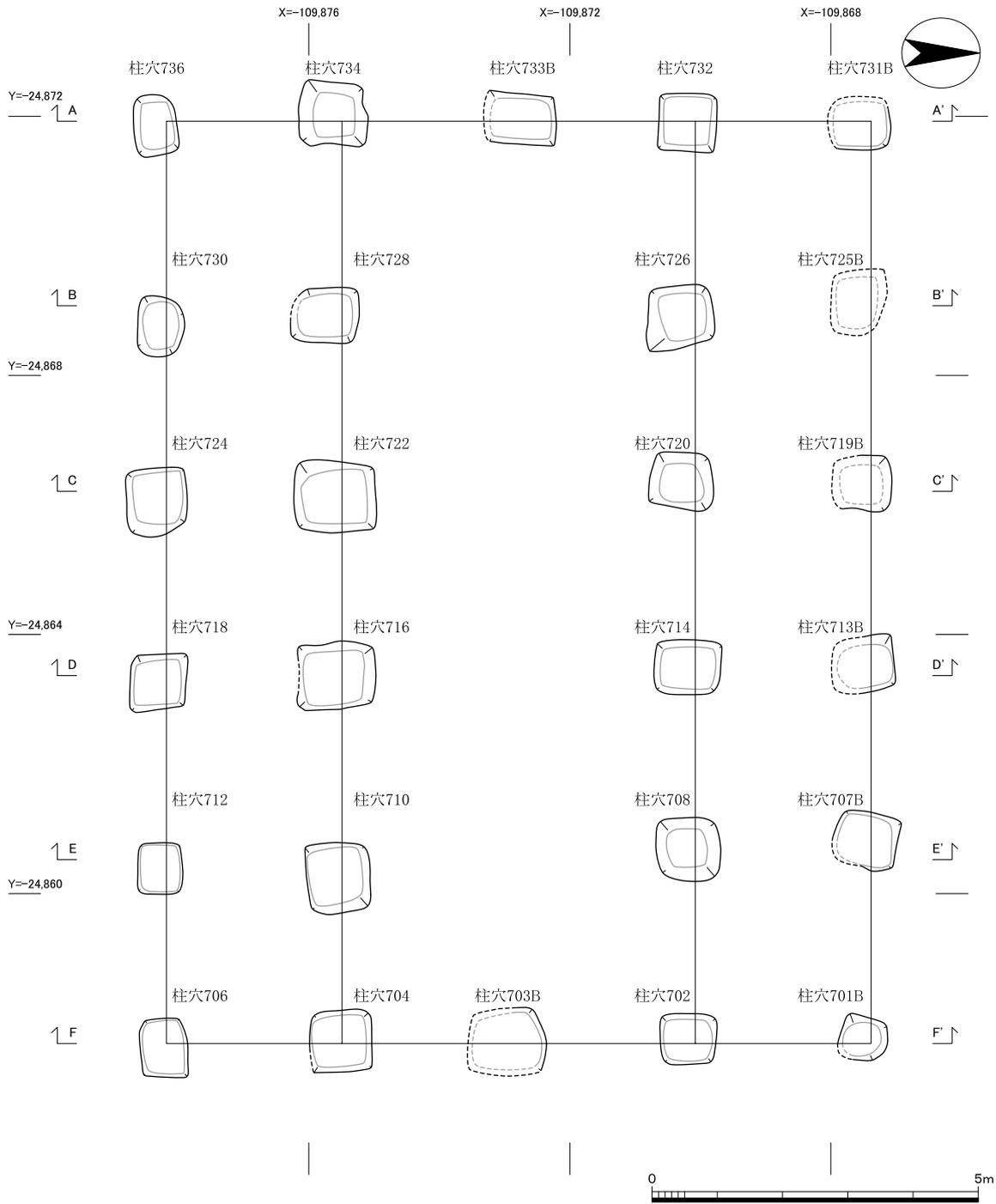
遺構平面図8 (1 : 150)

图版 10
遺構

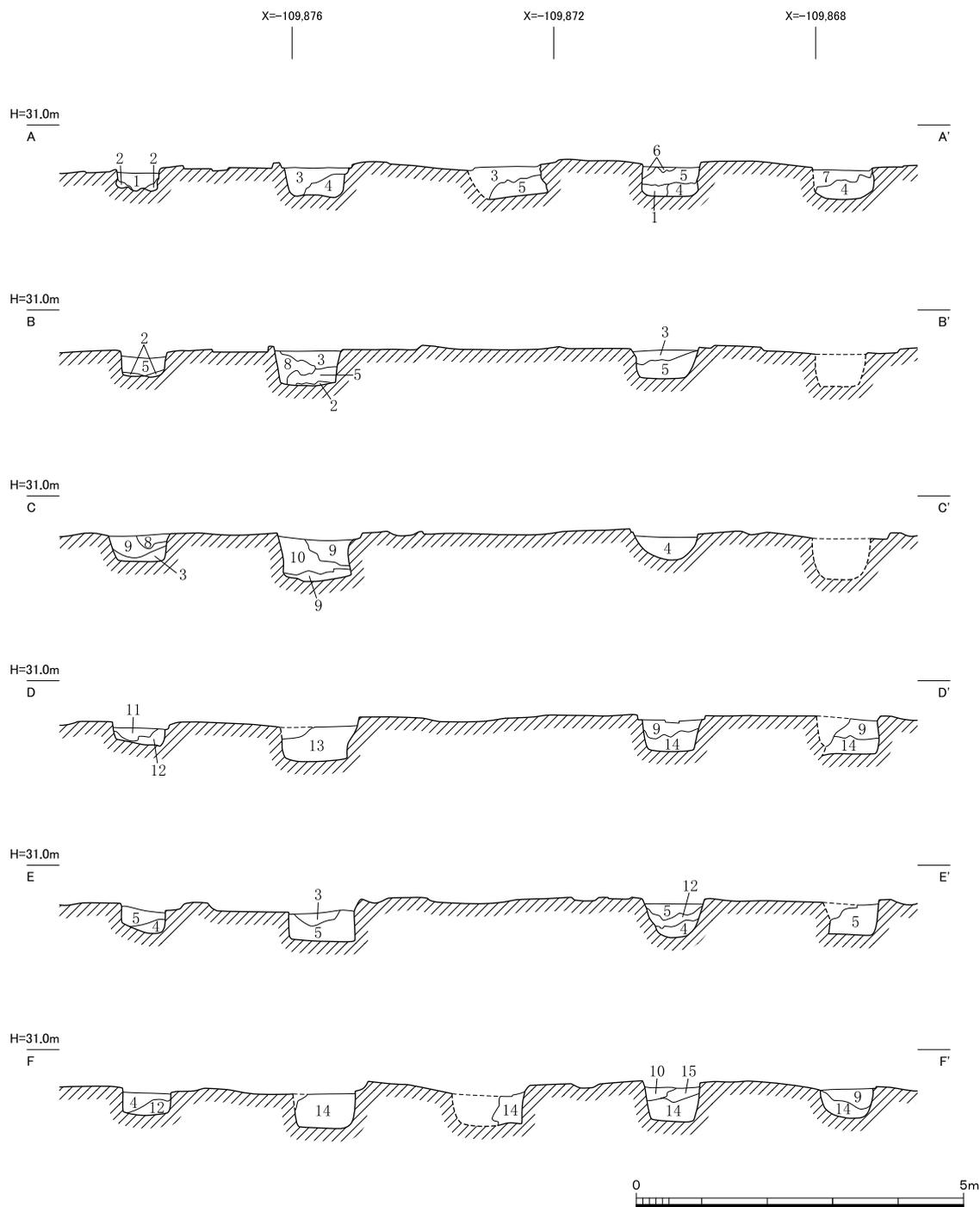


建物 1 新平面図 (1 : 100)

图版
12
遺構

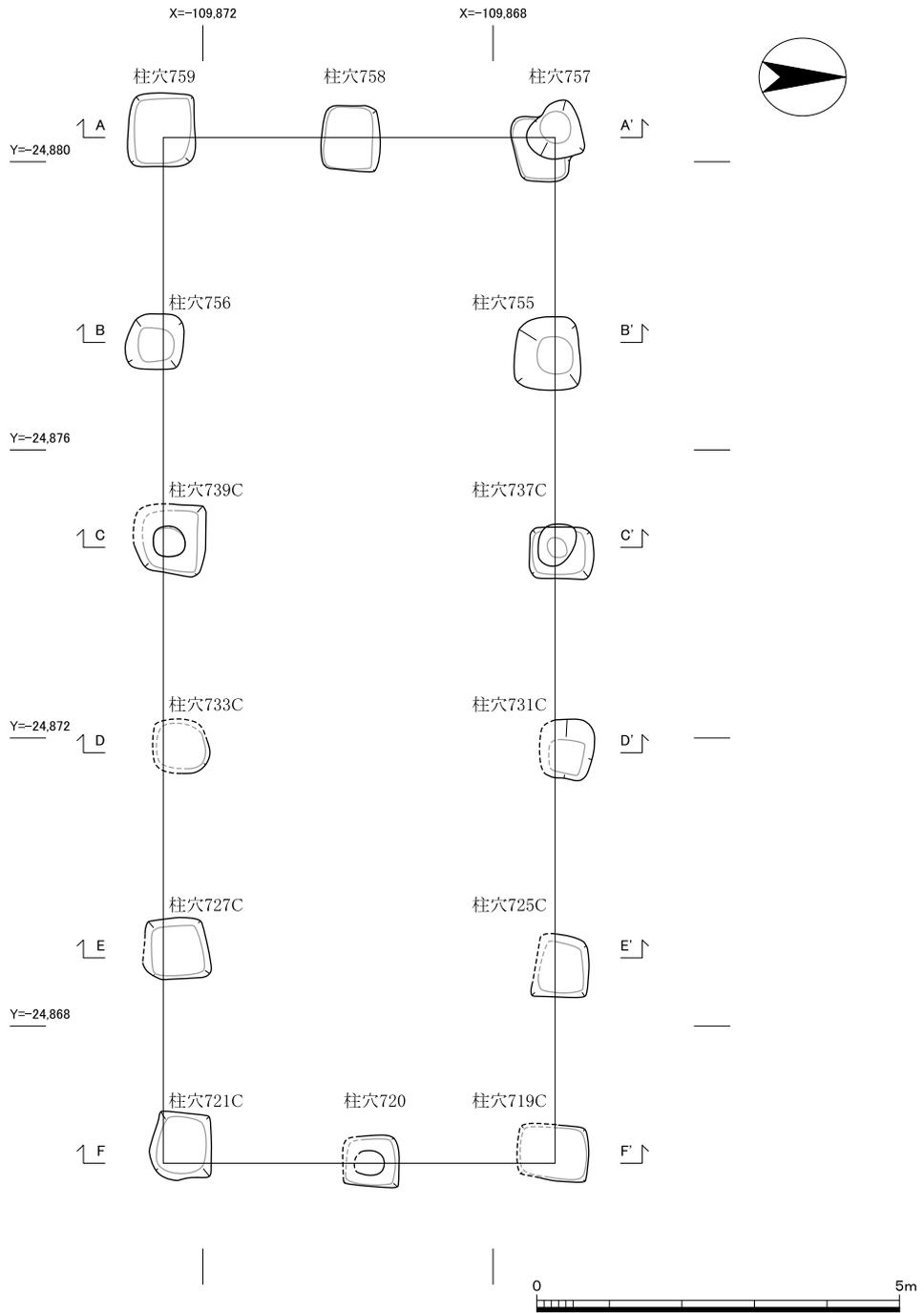


建物 1 古平面図 (1 : 100)

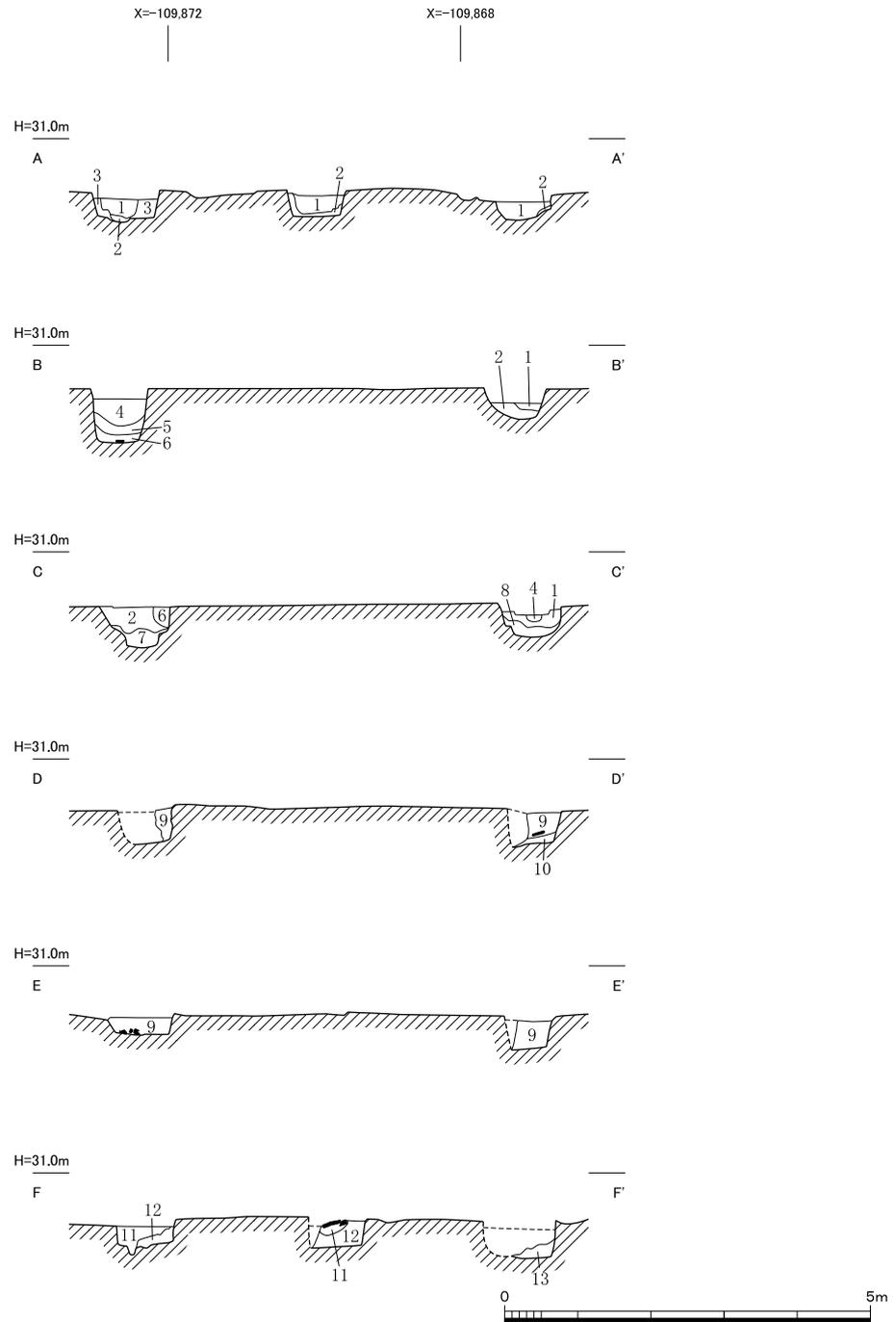


- | | |
|--|---|
| 1 10YR3/2黒褐色粘質土に2.5Y5/4黄褐色粘土ブロックが混じる | 9 2.5Y5/3黄褐色粘土ブロック |
| 2 10YR3/3暗褐色粘質土 | 10 10YR3/3暗褐色粘質土と2.5Y5/3黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 3 10YR3/3暗褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 11 10YR5/2暗灰黄色粘土ブロック |
| 4 10YR3/2黒褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 12 10YR3/2黒褐色粘質土ブロック |
| 5 2.5Y5/4黄褐色粘土ブロック | 13 10YR5/3こぶい黄褐色粘土 |
| 6 10YR4/2灰黄褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 14 10YR3/2黒褐色粘質土と2.5Y5/3黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 7 2.5Y5/4黄褐色粘土と2.5Y5/6黄褐色粘土のブロックが混じる | 15 10YR4/3こぶい黄褐色粘質土と2.5Y5/3黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 8 10YR3/3暗褐色粘質土に2.5Y5/4黄褐色粘土ブロックが混じる | |

建物1古柱穴断面図 (1 : 100)

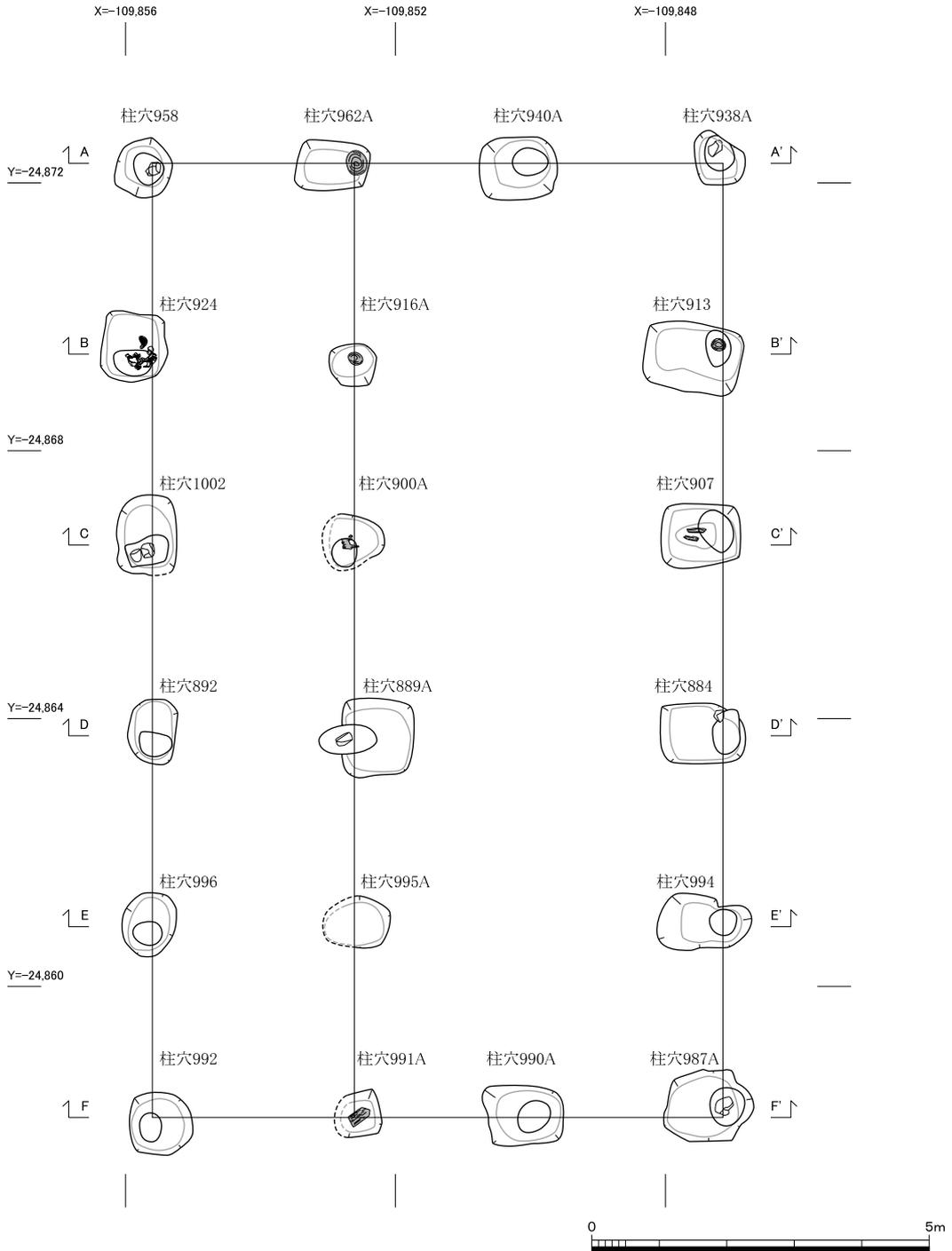


建物4平面図 (1 : 100)

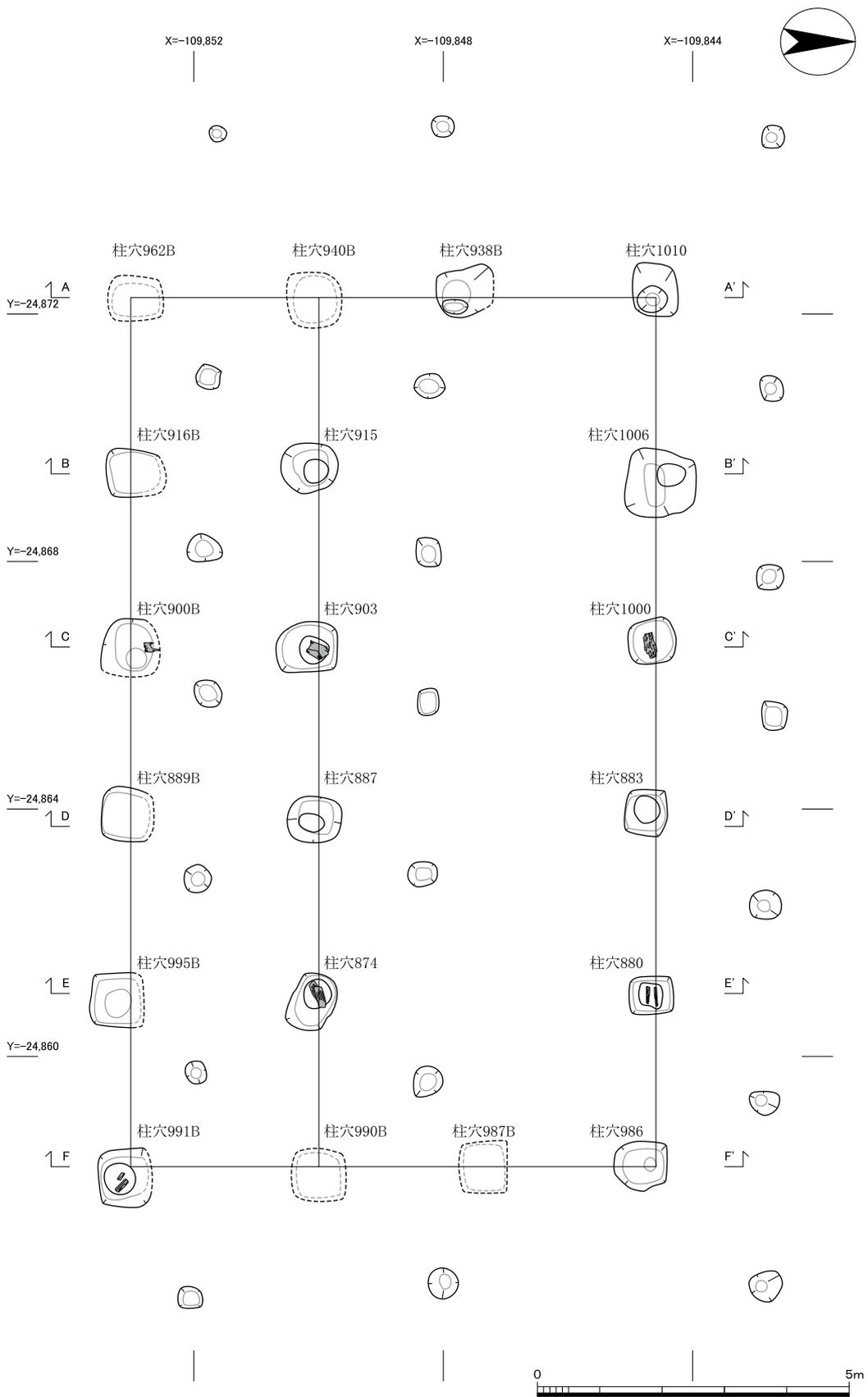


- | | |
|--|---|
| 1 10YR3/2黒褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 8 10YR3/2黒褐色粘質土と2.5Y6/3にぶい黄色粘土のブロックが混じる |
| 2 2.5Y5/4黄褐色粘質土ブロックに10YR2/2黒褐色粘質土が混じる | 9 10YR3/3暗褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 3 1と同じ粘質土ブロックが水平状に堆積 | 10 10YR5/1褐灰色粘質土 |
| 4 10YR2/2黒褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 11 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土と2.5Y5/3黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 5 2.5Y5/4黄褐色粘土 | 12 10YR3/2黒褐色粘質土と2.5Y5/3黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 6 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 13 2.5Y5/3黄褐色粘土 |
| 7 2.5Y6/4にぶい黄色粘土 | |

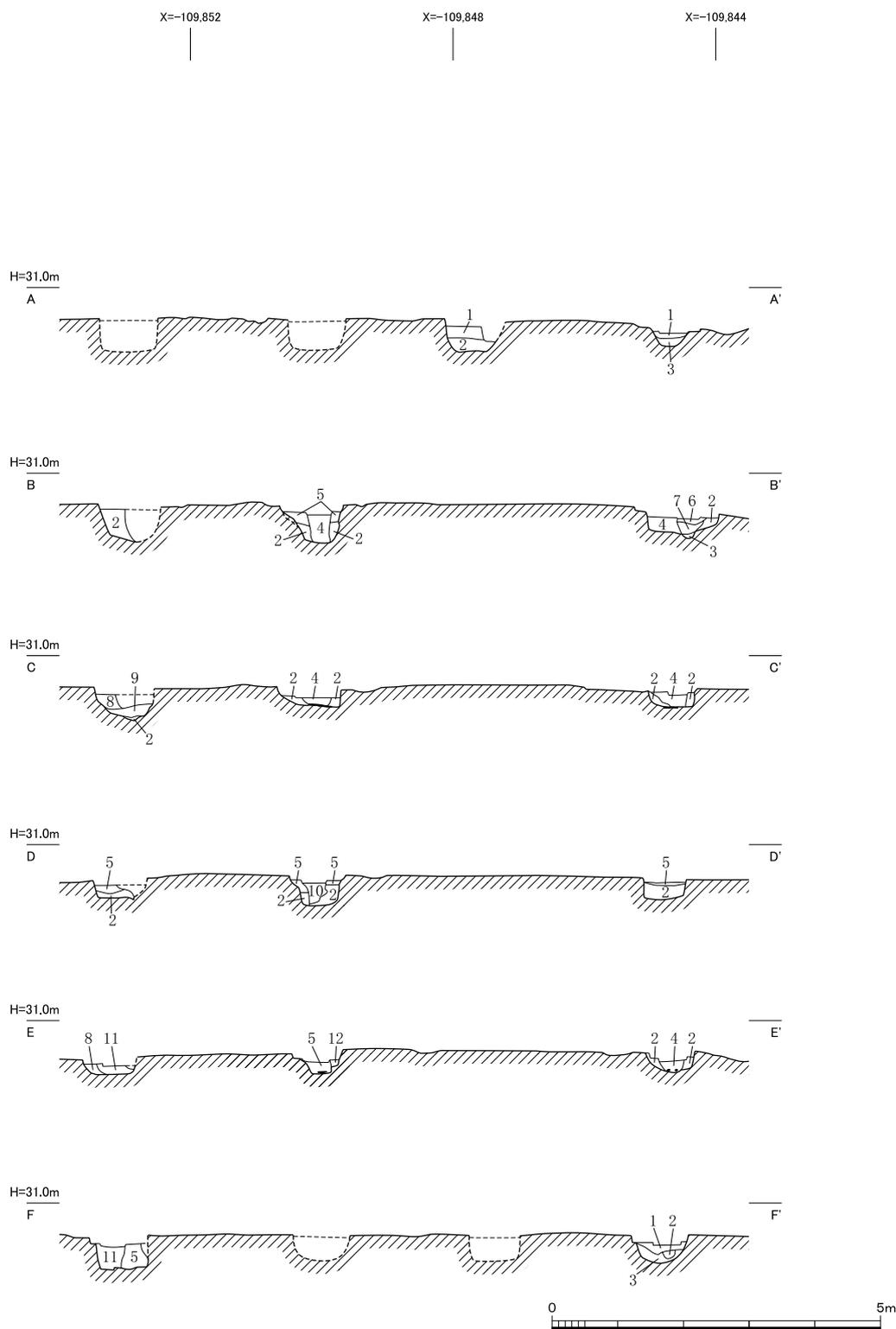
建物4柱穴断面図（1：100）



建物 5 新平面图 (1 : 100)



建物 5 古平面图 (1 : 100)



- | | |
|--|---|
| 1 10YR4/2灰黄褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 7 2.5Y5/4黄褐色粘質土ブロックと5Y5/1灰色粗砂が混じる |
| 2 2.5Y5/4黄褐色粘質土ブロック | 8 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 3 2.5Y5/4黄褐色粘土ブロックと5Y5/1灰色粗砂が混じる | 9 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 4 10YR3/2黒褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 10 10YR3/3暗褐色粘質土ブロック |
| 5 10YR3/3暗褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる | 11 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる |
| 6 2.5Y5/4黄褐色粘土と5Y5/1灰色粘土のブロックが混じる | 12 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土と2.5Y5/4黄褐色粘土のブロックが混じる |

建物5古柱穴断面図（1：100）



2区全景（東から）



1 南壁断面（北から）



2 西壁断面（北東から）



1 建物1・建物4（北西から）



2 建物1・建物4完掘状況（東から）



1 建物1新柱穴692検出状況（南から）



2 建物1新柱穴705検出状況（南から）



3 建物1新柱穴717遺物出土状況（南東から）



4 建物1新柱穴727 A遺物出土状況（北東から）



5 建物1新柱穴703 A半裁断面（東から）



6 建物1古柱穴732半裁断面（東から）



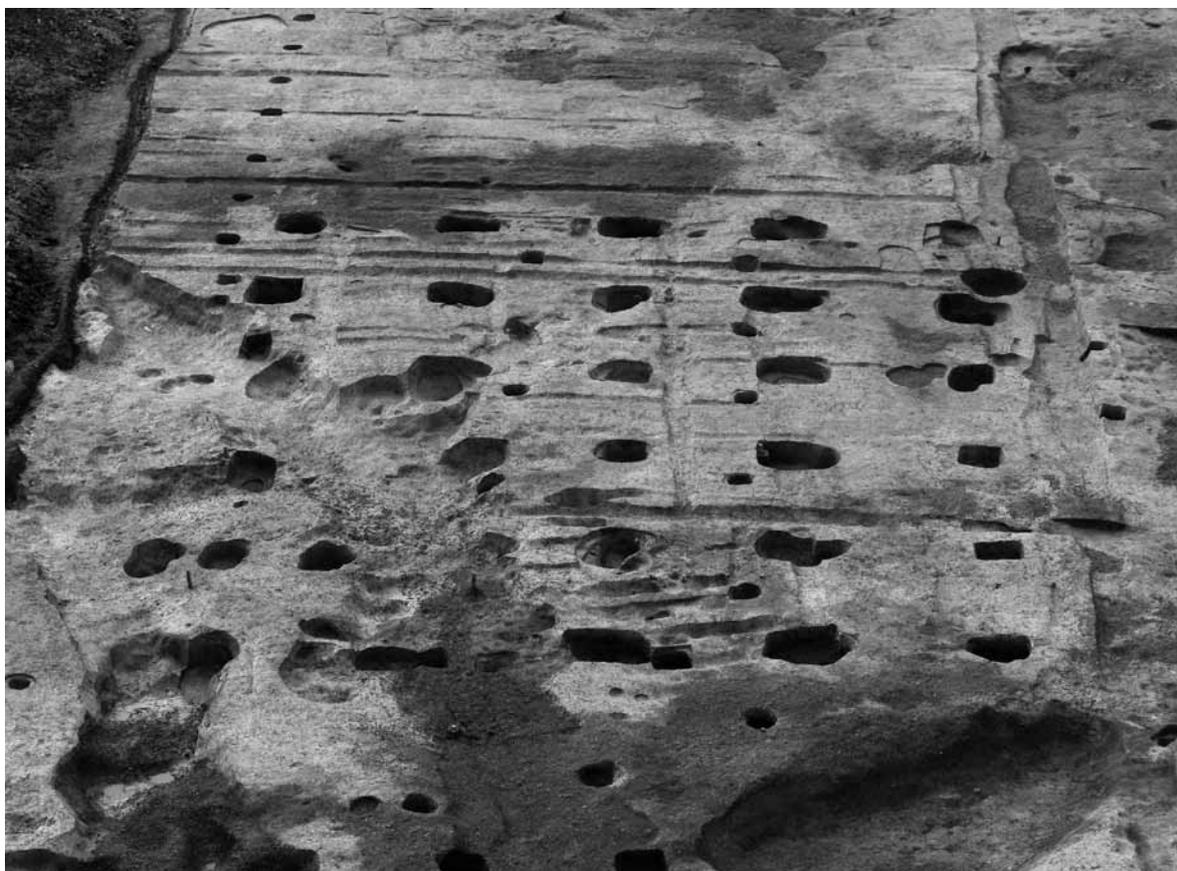
7 建物1新柱穴725 A・建物1古柱穴725 B
半裁断面（北東から）



8 建物1新柱穴694礎板出土状況（北東から）



1 建物5・建物6（東から）



2 建物5・建物6完掘状況（東から）



1 建物5新柱穴938 A・建物5古柱穴938 B
遺物出土状況（東から）



2 建物5新柱穴924遺物出土状況（北東から）



3 建物5新柱穴991 A・建物5古柱穴991 B
半裁断面（東から）



4 建物5新柱穴996柱根固め状況（東から）



5 建物5新柱穴962 A柱根出土状況（南東から）



6 建物5古柱穴903礎板出土状況（東から）



7 建物5古柱穴874礎板出土状況（東から）



1 建物2 (西から)



2 建物2柱穴792柱根出土状況(南から)



3 建物2柱穴793柱根出土状況(南から)



4 建物2柱穴103半裁断面(東から)



5 建物2柱穴104半裁断面(東から)



1 建物3 (北から)



2 建物3南端柱穴列検出状況 (北西から)



3 建物3柱穴660半裁断面 (東から)



4 建物3柱穴150半裁断面 (東から)



1 溝80 A 土器群 1 遺物出土状況 (南西から)



2 溝80 A 土器群 3 遺物出土状況 (北西から)



3 溝153 遺物出土状況 (南から)



4 溝80 B 断面 (南から)



5 土坑766 (北から)



姉小路全景（東から）



1 姉小路（南東から）



2 路面800断面（東から）



3 溝（水路）801断面（東から）



4 溝（水路）807・盛土809断面（東から）



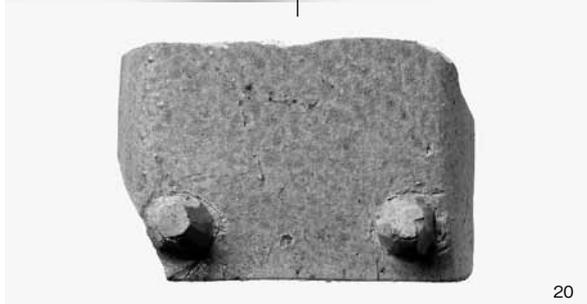
5 溝831断面（東から）



1 1区流路630完掘状況（東から）



2 2区流路630完掘状況（東北東から）



土器 1 (柱穴 857・柱穴 717・溝 80 B・溝 810・溝 832・流路 630・溝 831・溝 799・溝 (水路) 801・溝 (水路) 807 出土)



土器 2 (溝80A出土)



1 転用硯 (94)



2 漆が付着した土器 (95)



瓦1



瓦2



瓦9



瓦11



瓦15



瓦17



瓦18



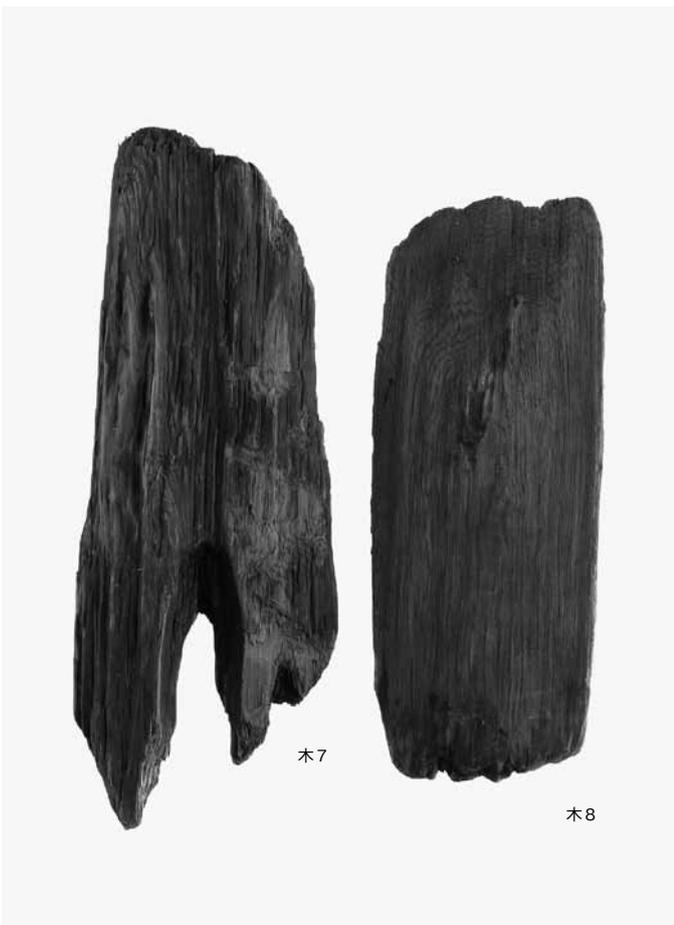
瓦21



木製品1 (柱根)



木6

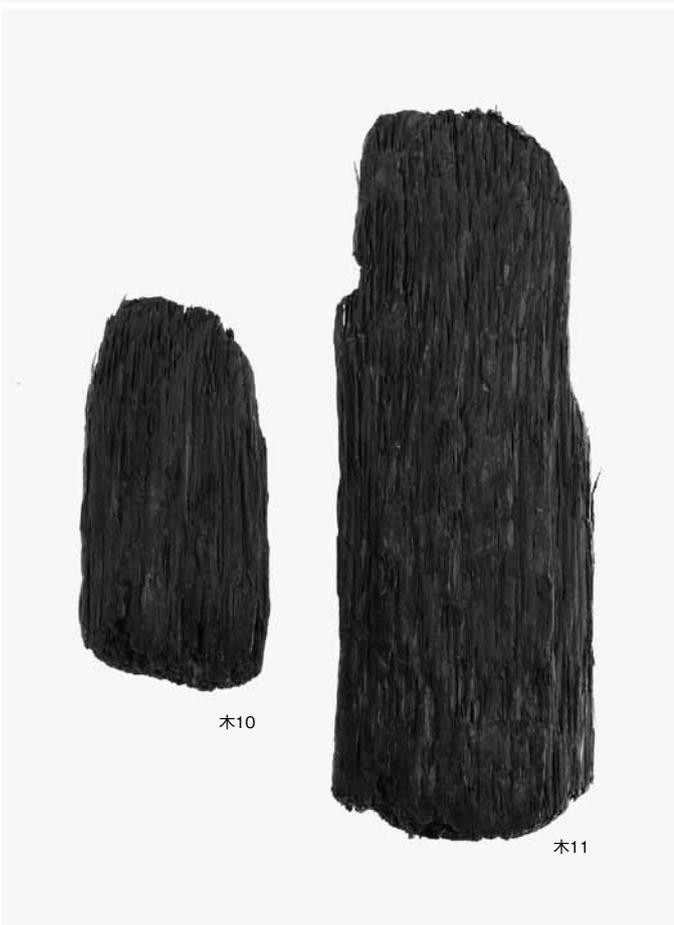


木7

木8



木9



木10

木11

木製品 2 (礎板)

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょうさんぼうごちょうあと							
書名	平安京右京三条三坊五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-15							
編著者名	山本雅和・末次由紀恵							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとうしうきょうく 京都市右京区 にしきょうくわぼらちよう 西ノ京桑原町 1番地	26100	1	35度 00分 34秒	135度 43分 39秒	2017年5月 1日～2017 年12月14日	約4,580㎡	建物建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	平安京造営前	土坑、流路	土師器、須恵器、埴輪		西ノ京遺跡の古墳時代から飛鳥時代の流路・土坑を検出した。大型建物を含む平安時代前期の建物群を検出した。平安時代前期から室町時代の姉小路の変遷が明らかとなった。「政所」「齋」などの文字を記した墨書土器が出土した。		
		平安時代	建物、柱穴列、柱穴、路面、築地、土坑、溝、盛土	土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品、土製品、石製品、動植物遺体				
		鎌倉時代以降	畦、土坑、耕作溝群	土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、木製品、土製品、石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-15

平安京右京三条三坊五町跡

発行日 2018年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961